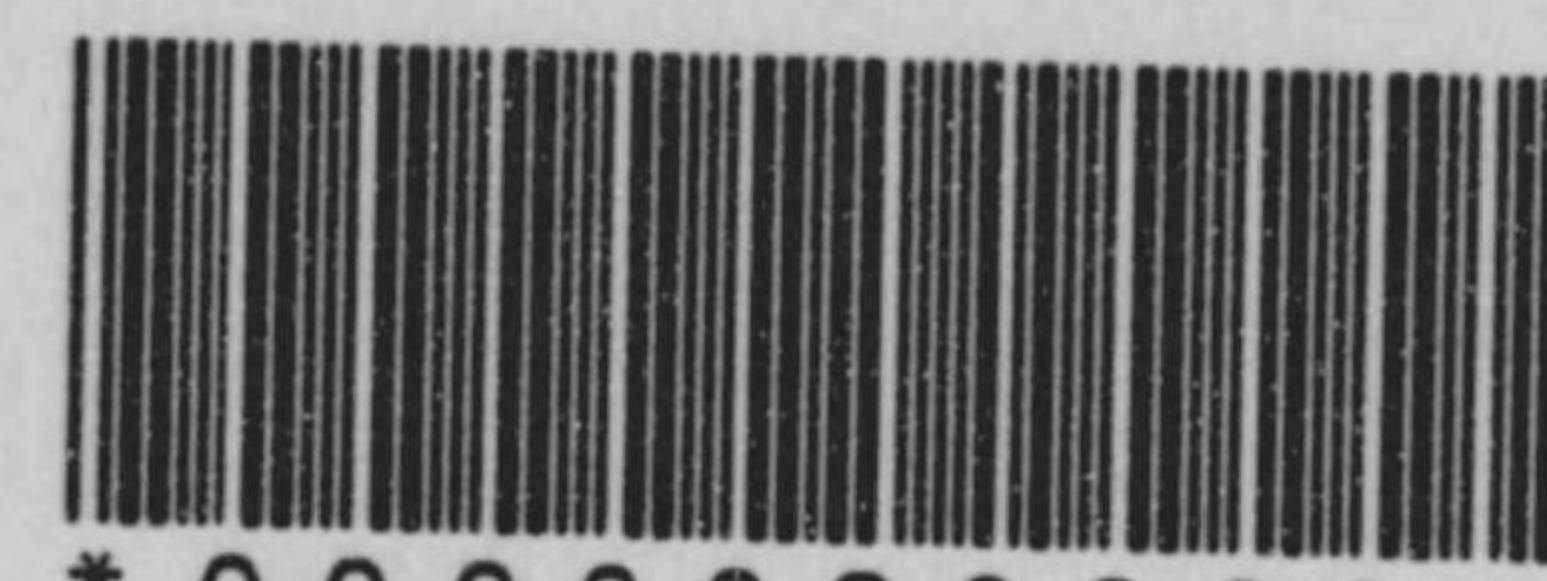


717
80



* 0000039000 *

0000039-000

717-80

世界と世界人

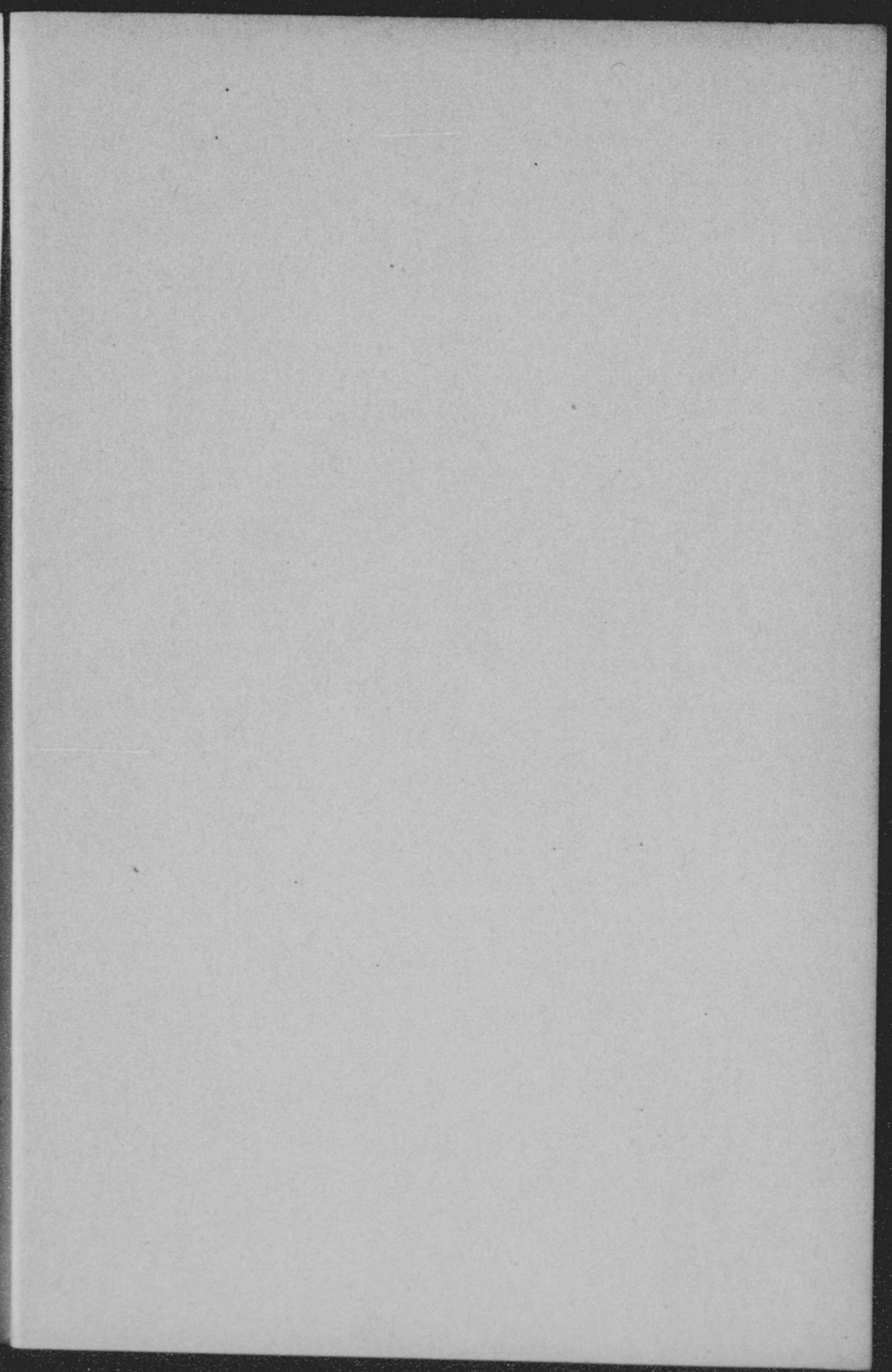
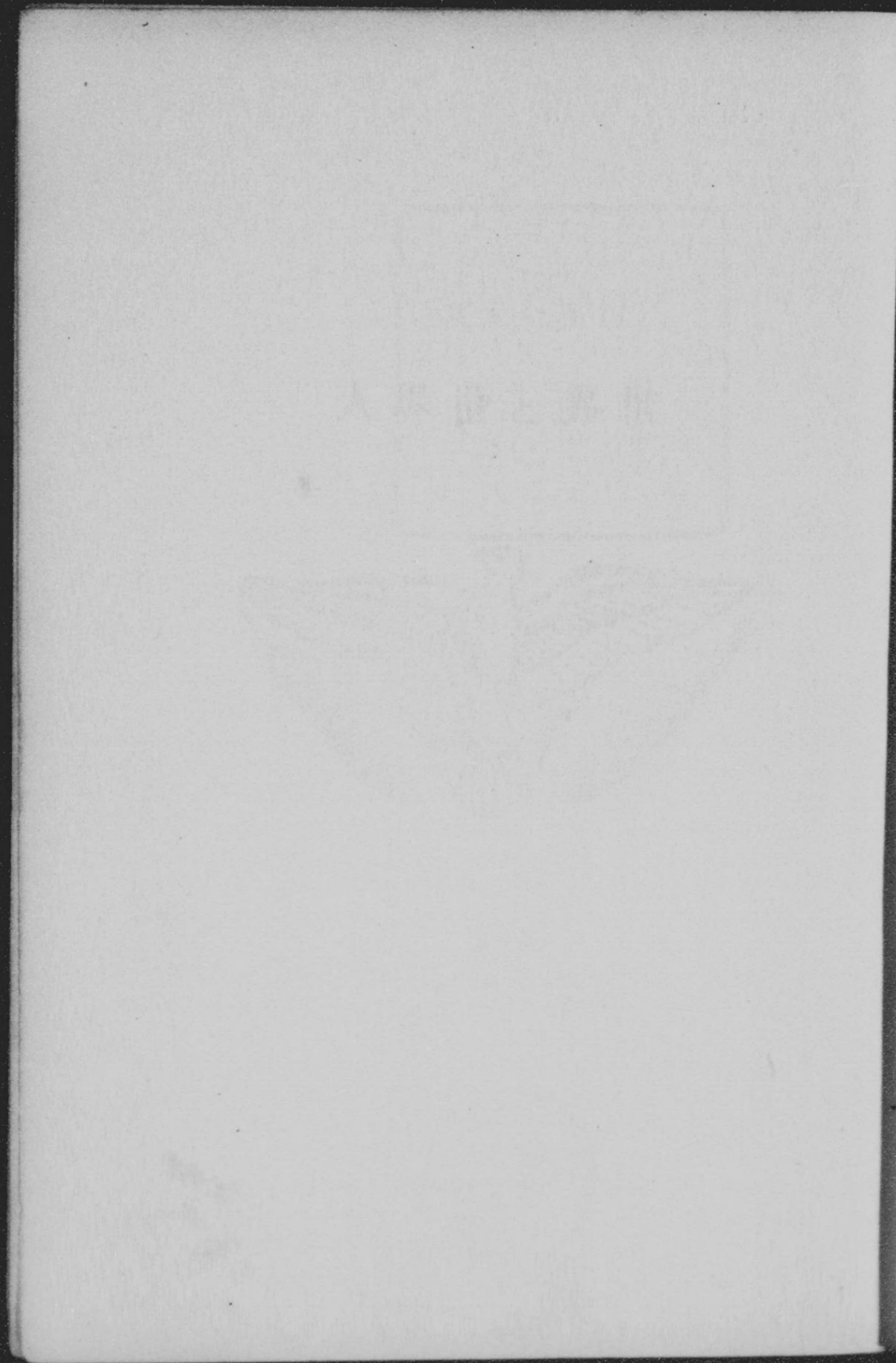
堀口九万一・著

第一書房

昭11

AAB

268





人界世と界世



京東
房書一第



717
80

目次

I

中南米に使用して	九
旅程、文化宣傳の型、先づ日本知識の是正から、外人の著書を材料に、日本 道徳の基礎「武士道」、ブエノス・アイレスの質問會、日本の藝術に就て、 意義ある啓蒙運動	
中南米諸國の印象	三四
第一信 アルゼンチン	三五
講演會の大流行、五百年の先進者、亞國婦人の向上、ク夫人の警句集、眉の 描き方まで、物質的天恵の反映	
第二信 ウルグワイ	四二
「花咲爺」を一席、學童の社交性、税關官吏の應接ぶり、自己劣視觀念、氣	

位を高く持て

第三信

ブラジル

日本の教育に仰天、日本人を排斥して後悔、日本移民への忠告、理解
出来ぬ宣傳映畫

四九

第四信

メキシコ

思ひ起す革命當時、華麗な墨都の發展振り

六〇

日本に對する外國人の評價

六五

公衆道德の相違

七〇

外國人から見た日本及日本人

八〇

日本の躍進は奇蹟に非ず

八五

他國とは育ちが違ふ、素晴らしいその素性、英語のシルクは、支那の養蠶術の西漸

外國人の目に映ずる日本の兵士と米國の兵士

九五

西洋と東洋との場合

一〇五

日本人の教養

一一二

諸國民性一言評

一二四

白色人種は寢返りの常習犯

一二七

西洋人の自惚

一二〇

恐ろしい國際關係の現状

一二四

II

ビエル・ロチの愛人への戀文

一三一

「生きる」といふことは殺すことなり

一三六

巴里の給仕長の觀たる米國觀光客

一四〇

威張らない大臣

一四六

フランス作家の勇退逸話

一五三

宣傳は支那人の天才

一五八

支那人のホルモン

一七二

旅行について

一七六

幸福の處方箋

一八五

老人引退論	一九二
性格の強い人	一九四
音痴か	二〇〇
國境雑話	二〇二
爆彈三勇士に對する感想	二〇七
日本が強いのは婦人が偉いから	二一三
馬鹿馬鹿しさの尊さ	二一七
芝居の思ひ出	二二三
痛快な漫筆	二二七
全國民が詩人的な日本	二三一
俳句漫筆	二三八
『人間喜劇』開幕前	二四四
メキシコ革命騒動體驗記	二四八

大統領家族日本公使館へ避難す、命がけの食糧品搬入と電信の發送、假大統領の日本感謝の演説、大統領家族日本公使館へ避難した理由、日墨間の親善

の徑路、親交の効果觀面、墨國獨立百年祭、日本品博覽會の大成功、ディアス政府の末期、マデロ新政府と日墨關係	
ブリアンの雄辯（雄辯三大家の演説振り、その一）	二八三
ロイド ジョージの雄辯（雄辯三大家の演説振り、その二）	二八九
クレマンソーの雄辯（雄辯三大家の演説振り、その三）	二九六

III

ブラジル生活の早取寫眞	三〇五
發車した當時は俺はまだ子供だった、驛の待合室は遅著を待ち合す爲、結婚と葬式はその例外	
ブラジルの正月 附たり 外國の正月	三一三
ブラジルの武陵桃源	三二一
アマゾン漫記	三二四
命名の由來、アマゾン地方の食物、アマゾンの動物	
ブラジルの黒ン坊奇聞	三三七

ブラジル奥地の掠奪結婚	三六一
花嫁の家を襲撃、ジュボワ神父に聴く、酋長の掠奪結婚	三三九
ブラジル婦人を語る	三四九
ブラジルのクリスマス風景	三五八
リオ・デ・ジャネイロの横顔	三六三
リオ・デ・ジャネイロの夜の十時	三六八

I

中南米に使用して

旅程

去る五月十五日に東京を立ちまして、十一月の十五日に歸著しましたから、丁度半ケ年で戻つて参つた譯であります。その間に廻つた國がアルゼンチン、ウルグアイ、ブラジル、メキシコ、この四ヶ國なのであります。それでこの一ヶ國に就てお話申上げても一時間や二時間では足りないところを、四ヶ國に就て僅か一時間か一時間半でやらうと云ふのでありますから、極く端折つてほんの駆足的に話さなければならぬのであります。どうかその積りでお聽きを願ひます。

地圖でお示しする程の必要はないだらうと思ひますけれども、兎に角、日本を立ちまして、シンガポール、コロンボを経、印度洋を通つてターバンに著き、ターバンからケープタウンに著いて、ケープタウンから直航して、ちよつとりオ・デ・ジャネイロに寄り、さうして直ぐに

アルゼンチンまで行つたのであります。これが、五月の十六日神戸發で、アルゼンチンに著いたのが七月の四日ですから、丁度五十日目です。そしてアルゼンチンの首府ブエノス・アイレスに殆んど一ヶ月居りまして、それからウルグアイ、それから隣のブラジル。ブラジルは御承知の通り、首府リオ・デ・ジャネイロ、これが政治の中心であります。その隣にサンパウロと云ふ州がありまして、此處には日本人が十八萬人も居る處であります。で、此處にも二十日間近く居つたやうな譯であります。それから又船に乗りまして米國のヒューストンに出まして、ヒューストンから二日三晩でメキシコの首府に著き、此處にも又二十日ばかり居りまして、それから汽車で三日三晩、サボテンの原野を通過して、ロサンゼルスに出まして、そこから太平洋を横切つて日本へ歸つて來ましたので、丁度西から出まして東に廻つて世界を一周したやうな都合であります。

ところが、これらの國々どれもこれも皆私に取つては初めてではございません。アルゼンチンでも、ウルグアイでも、ブラジルは尙更のこと僅か十二年前まで私は公使をして居つたのであります。それからメキシコは、今から二十二年前になりますけれど、あの革命の最中、大統領の家族が多勢で日本公使館へ逃げて來たので、それを保護してやつたと云ふ廉を以て、こちらの方は忘れてしまつてゐた、今年の三月、勳章などを頂戴したやうな譯なのです。ですからこの度行きましたところ、所謂懷舊とでも申しますか、非常な歓迎を受けまして、誠に愉快で

ありました。さう云つた工合で、四ヶ國とも私には内外人ともに知人が多かつたので、日本文化の宣傳の爲には非常に便宜であつたのであります。ブラジルその他に於ても元から知つて居つた外務大臣や、その他多くの外務省の役人、或は新聞記者、大學總長、又は貴族院議員、衆議院議員などにも随分古くからの友達が居りましたので、これ亦非常に好都合でありました。のみならず、日本居留民の人達の中にもその頃からの知人がまだ随分多く居られましたし、それから大使館、公使館の人達がいづれも皆かつての同僚若しくは以前私のスタッフでありました人達なので、心から色々と各種の便宜を圖つて呉れられ、所謂勤め氣を離れて世話して下さいたことは、心から感謝に堪へない次第であります。

文化宣傳の型

扱て、南米では初めての試みである日本文化の宣傳なんといふことは、一體どう言ふ仕方にしたら一番効果的であらうかと、あちらの人や日本公使館の人達に訊いてみましたところが、それはもうこちらの方では、ある一つの型があると云ふのです。と云ふのは、日本は今度初めて南米に於て日本文化の宣傳なんといふことを催しますけれども、歐米各國はズット以前から始終これ等の國へ文化の宣傳をやつて居るのであるから、その定石に従つてやつたら宜からう、

とのことでした。

ではどうするのかと申しますと、先づ一番先に其地の各新聞社をずつと訪問します。それも唯だ名刺を置くだけではない、初めに電話を以て、今度斯う云ふ人が、斯う云ふ譯で来たのだが、何時會見して呉れるかと打合せをして置いて、それら社長若しくは主筆の人に會ふのであります。さうしてその會見の時は必ず速記者を傍に置いて、向うの方と私の方との問答をすつかり筆記させて、それを翌日の新聞に出して呉れるのであります。ですから私は講演の主題又はその要點を話します。さうするとその會見の場面を必ず社長或は主筆と一緒に寫眞に撮つて、今度斯う云ふ人が来て、近い内に斯う云ふことに就て講演する筈だと云ふことを各新聞の雜報の中で廣告して呉れるので、非常に都合が好いのであります。都合は好いが、その代りこの訪問は、時間を取るのには困りました。唯だ名刺を持つて廻るのだと一日か半日あれば六つや七つの新聞社には挨拶が出来ます。併しそれでは向うの人にはお氣に喰はない、のみならずこちらの目的も達し難いので、時間や手間は掛りますけれども、矢張りこの方法が一番効果的なのであります。

そこで、宣傳の方法はと申しますと、私は先づ三つの仕方に依りました。第一に講演、第二がラヂオ放送、第三が個人の戸別訪問の會談、この三つであります。

向うはラヂオが非常に多い。日本のやうに中央放送協會と云ふやうなものになつて居ないで、

各私立會社が澤山あります。ですから、ラヂオなんぞ、やらうと思へば何時でも向うの方は喜んで時間を提供して呉れると云ふ工合で、大いにこれを利用しました。御存じの通り、メキシコ以南の所謂ラテン・アメリカは、ブラジル以外は、みんな元はイスパニヤの植民地で、漸く百年前に獨立したのですから、ラヂオの放送は皆イスパニヤ語なのであります。私は幸ひにメキシコに五年、イスパニヤに六年居りまして、その頃職務上の必要からこれを學習しましたので、その後随分年も経て徴が生えて居るかも知れませんが、兎に角二か八かには話せますからラヂオは皆イスパニヤ語でやりました。しかし講演にはすべてフランス語を用ひました。

日本では、英語は世界語なり、などと思つて居りますけれど、實際を申しますと、(あなた方がヨーロッパを御旅行になつて御經驗になる通りに)ヨーロッパ大陸でさへ英語はあまり幅の利いた言葉ではありません。況してラテン・アメリカへ來ますと、英語は全く駄目で、フランス語でなければ通らないのであります。ラテン・アメリカ諸國ではフランス語は各中學校の正科中に入れてあるので、是非ともやらなければなりません。で此れ等の國の人々は大抵フランス語が解ります。上流社會特に社交界に出入するほどの人は誰も彼もこれに通じて居ります。それから第三の個人訪問で、或は大學の教授に話すとか、圖書館長に話すとか、私立學校の先生に話すとか、こんな工合に、まづその方法を定め、それに従つて盛んに宣傳を致しました。

先づ日本知識の是正から

ところが、日本文化の宣傳と言ふことは南米人に取つては初めてなので、一體日本に文化などがあるのかしらと、それさへ疑つて居る次第でした。その譯は、概してラテン・アメリカ人は一つの習癖として、文化と云ふものはフランスに限るやうに思つて居るのであります。これは何故かと申しますと、元來ラテン・アメリカの獨立と云ふものは、フランス革命が原因になつて、革命思想が南米に擴がつて、その結果としておこつたもので、當時ラテン・アメリカの志士達が革命思想を吸收する爲に用ひた書物は皆フランスの本であつた。例へばルウソー、ヴォルテール、モンテスキューの書いたもの。斯う云つたフランスの本で皆革命思想を教はつたので、その餘風が今以て南米諸國には残つて居ります。況んや流行の衣服、帽子、婦人の靴、香水、眉の描き方迄、一切合切フランスでなければ夜も日も明けないと言ふ國柄です。隨つて文化と云ふものはフランスに限る位に思つて居るのです。そこへ今度日本の文化を宣傳に來た、しかも、もと來て居つた公使がそれをやるんださうだ、これは面白い、一つ聽きに行かう、と云ふやうな工合で、私の見た所では、文化と云ふものを研究するとか何とか云ふことよりも、寧ろ半分は好奇心に驅られて、そんなものが日本にあるのかしら、一つ聽きに行つて見ようと

云ふ鹽梅に、まあ寄席かシネマにでも行く位に考へて來たのではないかと思はれるのであります。

ところがこれは私の講演ばかりではありません、他の外國の文化宣傳の講演なども、矢張り同様だと思はれますが、特にどの講演でも過半数は上流階級の婦人なのであります。先刻も歐米諸國は南米へ始終文化宣傳をやつて居ると申しましたが、この度も丁度期せずして、アルゼンチンへ、イスパニヤの文化宣傳使がやつて來て居り、しかもその人は御存じの國際聯盟理事會で日本に意地悪く當つた、あのマダリアガ先生であつたのであります。それからフランスからは文學者のダニエル・レヴィがやつて來て居りましたし、イギリスからは、ロールド・マクミランがやつて來て居りました。その他ウルグアイからは數學家の何とか云ふ人が來て居るといつた工合で。日本でこそ文化宣傳などと云ふものは一寸珍しいやうに思つて居りますけれど、あちらには頻繁に各國から文化の宣傳者がやつて來て居るのであります。そこで私も、外國の宣傳使はどんなことを話するのか、一つ聞いて見ようと思つて、一夕、マダリアガの演説を聽きに行つて聴衆の中に入つて見ました。その時は先生はイスパニヤ文學と英佛との對比を話し、その次に哲學と文學の關係と云ふのをやりました。講演それ自身としては大したものぢやないので、言はば俗受けのする、誰にも解るといふやうなものであります。と云ふ譯は、南米の如き新開國では、講演會などはそれが學問といふやうなものよりも、寧ろ社交機關

か何かのやうなもので、講演を聴きに行くのも、實は社交の一部分位に思つて居るらしく思はれるのであります。各講演の寫眞も持つて居りますが、いづれの講演にも婦人が多くて、大抵、五百人の聴衆があつたとすれば、その中の二百五十人以上は皆婦人なのであります。私の講演した時も、矢張り聴衆の半分以上を婦人が占めて居りまして、これはアルゼンチン、ウルグアイ、ブラジル、メキシコ、皆同様でありました。

外人の著書を材料に

ところで私が日本文化を説くに當つて、日本の文化はこれこれだと言つて、抽象的に一人ぎめに言つて見たところが、何等日本に關して豫備知識のない人達に向つて話すのですから、何を言つて居るのか先方にはさつぱり解らないと言ふ懸念がある。それにもう一つは私がさういふことを言つても我田引水と云ふやうに取られるのも残念なので、フランスの書物を演壇へうんと持つて出て、必要のある箇所はそれを一々引用して讀んで聞かせてやりました。即ち、これは俺が言ふのぢやない、俺の一家言ではない、フランス人すら斯う見て居るのでぞと言ふ爲に、フランス人の書物を引用しました。フランス人が言つたとなるといや應なしに南米人は納得するのです。

さて、外國人は日本と云ふものを今まではよく知らない、知つて居つても皆誤解をして居る。その譯は、先づ地理的に日本が世界の東端に位してゐるため、自然これまでは交通も不便であつたので、隨つて世界によく知られなかつたこと。もう一つは日本の言語、文章が他の外國と全く違ふので、外國人がこれを會得するには非常に困難であること。のみならず日本人の感情の現し方、或はゼスチュア、或は道德價値の標準、これがまるで外國人と違ふので、日本人を知るにはこれ等を十分に會得した後でなければならぬ。これが解らんで居つて、直ぐ、日本は斯うだ、ああたと云ふ判断を下すのは大間違ひなのである。

ところが、この頃のやうに交通が頻繁になつて來ると、よく新聞記者だとか、中には小説家などと云ふのがやつて來る。さうして來た翌日から直ぐ筆を執つて日本のことを通信したり書いたりするので、その間違ひのあるのはむしろ當然である。例へば、ピエル・ロチイの『マダム・クリザンテーム』——『お菊さん』などに就て見ても、途方もない嘘が書いてある。あなた方もあのジョン・パリスの『キモノ』だの『サヨナラ』で御承知の如く、全く日本を知らずに、或は自分達の眼鏡を掛けて日本を判断するから、非常な間違ひがある。『お菊さん』の二百五十頁の所に、日本は中流以上のどんな良い家庭でも其處へ入つたら端から區別なしにみんなの人にキッスすることが出来る國だ、なんといふことが書いてある。御存じの通り日本にはまだキッスなどといふ習慣はないのであります。又、トマ・ロカの書いた、『ロノラブル』

バルチ・ド・カンパーニュ——「御遠足」とか又は「御遊山」とでも譯しますかな——、と云ふ本の中には日本のことを色々悪く言つてある。一番甚しいのは、日本の母たる事の任務は子供の大小便の世話だけである、子供の教育なんて云ふものには無關心だ、と云ふやうな途方もない事が書いてある。

さう云ふ本が皆フランス語で擴まつて居りますから、それを一々私は其處で讀み上げて、これは間違ひだ、これは日本のことなんか知らないのだ、兎に角日本の事が世界に解つて來たのは日露戦争以後なんだ、日露戦争以後の本になると餘程違つて居る、といふ事を話してやり、その中でもアペーヌといふ人の、『アン・ファス・ジュ・ソレイユ・ルヴァン』——「昇る朝日に直面して」といふ、題名からして元氣のものなのですが——といふ本などは最も外國人に讀ませたい本だと思つて、その本の出版元までも知らせて來ました。この本の中には日露戦争に於て日本人が勝つた原因を探究し、面白いことを言つて居る。それは日本の在來の教育のお蔭である。一體日本の御維新前までの教育と言ふものは四書五經が基礎であつたのだ、これを一言に言つて見れば日本の教育は取りも直さず道德教育と云ふものであつた、仁、義、忠、孝、と云ふやうなことが教育の本であつたのだ、その教育の結果が顯はれて日露戦争の勝利の原因となつたのである、などと云ふことが書いてあります。又最近出た、隨分日本にも來て居て、私は丸善で買つた本なんです、フランスのルジャンドルと云ふ人の『アジア對ヨーロッパ』

と云ふ本がある。これなどにも、日本のお母さんが子供を教へることの嚴格なること、及び注意の周到なること、それは唯だ溺愛ぢやない、愛にばかり溺れて居ないで、ちゃんとすべき所はするものと云ふことを教へて居る、川柳調にある通り「腹を切ることも教へて可愛がり」、可愛がることは可愛がるけれども、いざと云ふ時になつたらお前は腹を切らなければならぬ場合もあるぞと云ふやうなことも教へて居る。それで義理と云ふことが日本人の根本的觀念である、と云ふことが書いてあります。そこで、この義理と云ふのは英語のデューチーだとか、フランス語のドヴォアールと云ふのよりも深く、遠く、さうしてその範圍と云ふものは廣いものであつて、これは西洋語には譯せないと云ふので、ローマ字「Giri」と書いてありました。かういふことをあちらの人に大體だけでも宣傳すると云ふ方針で、色々日本の美點をフランス人の書物に依つて話しました。又、日本婦人に就ては、カイゼルリングの『ジニールナル・ド・ヴォアアイアー・ジュ・ダン・フィロゾフ』——「一哲學者の旅行日記」の二百四十頁には、如何にも日本の婦人のことを褒めて書いてあります。

「凡そ造物主が拵へたものの中でこれほど完全に出來上がったものはない、女と云ふもの理想を具體化したのが日本の女だ。」と云ふまでにいつてあるので、言はば日本婦人の爲に萬丈の氣焔を吐いたやうなものです。だからこれなども佛文譯書で紹介してやりました。その時には聽衆も何だかちよつとビックリしたやうな様子でありました。

が併し、ある一方の者は悪く言ひ、他の一方は莫迦に日本を良く言ふのは、つまりまだ日本の歴史や傳統なんかを知らないからなのだから、これから聴衆諸君は今少し日本を研究せられたいと言ふ事を述べました。そして昨年日本へ来た、フランスの小説家のデコブラが『日本旅行記』を書いて居りますが、その中に、これだけは先づ正當な見方だと思はれますが、「世界中で日本ほど毀譽褒貶の甚だ異なる批判を受ける國はない、或る人は、日本ほど良い國はない、だから僕は老後を楽しむ爲には日本へ行つて暮したいと思つて居ると云ふ人があるかと思ふと、他の一方には、あんな嫌やな國はありやしない、二度とあんな國へ行くのは嫌やぢやと云ふ、斯う云ふやうに兎に角日本は毀譽褒貶の甚しい國である。」と云ふことを書いて居りますことを話して聞かされたやうな譯であります。

その次に、これ迄の多くの外國の本には、日本のことを萬事が模倣だと言つて悪くけなして居ります。即ち日本は模倣だけをやつて居る、複製だ、コピーだ、何等のオリジナリテイもありません、と非常に悪く言つて居るので、世界各國とも、どうも日本は模倣國だと云ふやうな感じを持つて居ります。で、これを一つ駁撃して置くことが先づ必要だらうと思ひまして、前に云つたアヴェーヌと云ふ人の説などを此處で讀み上げました。アヴェーヌ氏は「日本の模倣ぢやない、イミテーションぢやない、あれは改良だ、改善だ。」と云つて居ります。又殊に、前に申上げたカイゼルリングは、その『日本旅行記』の二百六十六頁に面白いことを言つ

て居ります。すなはち「成る程世間の人の言ふやうに日本人は創作者ぢやない、自分から創作したと云ふものはないが、併し又、皆が言ふやうに單なる模倣者でもないのだ、それなら何であるかと云ふと、私の見る所では、あれはユーチリザツル、即ち利用者である。」とかいてあります。他人が何か發明すると、日本人はそれを自分の國の風俗習慣、或は自分の國の開化の程度、などに適合するやうに直して之を利用する、この點は日本が世界に冠たるどころだと言つて、日本を辯護して居ります。

それから次にはエミール・オーブラックと云ふ人、これはフランスの文部省の大監察と云ふ偉い人なんです。この人が『日本』と言ふ書を著して、その中で日本人の爲に大いに氣を吐いて呉れたのです。實に日本を良く言つて居ります。この人の日本模倣論に就ての議論が非常に面白い。それには斯う云ふことが書いてある。「歐米諸國の人は日本のことを一から十まで模倣模倣と言つて貶して居るけれども、一體模倣しないものが世界にあるのか。日本は模倣すると云ふけれども模倣すべきものを選択して居る。それよりもヨーロッパの方こそ盲目的に模倣して居るぢやないか。一例を擧ぐれば、西洋では宗教は猶太をその儘模倣し、法律はローマを模倣して居る、學問藝術はギリシヤを模倣してゐる。これ皆模倣なのである。さて又考へて見るに、一體全體、模倣と云ふことはそんなに悪い事なのか。私はさうは思はない。子供は大人を模倣するから伶俐になり、雛鳥は親鳥の鳴音を模倣するから一人前になるのである。」と日

本の爲に太鼓を叩いて呉れたのであります。でこの好機逸すべからずとして、私は聴衆にこれを読み上げて聞かせました。要するに外國人はこれから日本の歴史、傳統を今少し研究することが必要だ、だから南米の人達も今後日本と大學教授や學生の交換をやつて、お互の理解を深めたいものだと言ふことを力説した次第であります。

日本道德の基礎「武士道」

さて、南米諸國には滿洲事變と云ふものが餘程悪く宣傳されてゐる。その結果彼等は日本は單に軍部萬能、或は軍國主義者、侵略者であるかのやうに思つて居りますから、先づその蒙を啓いて置く必要があるだらうと考へました。で、以上に次いで、日本精神、大和魂、武士道に就て、大體を説明し、四十七士の事を例に擧げて武勇、忠義を説き、更に名譽を尊重すること、昔は戦争の時に名乗りを揚げてやつた例もあることや、或は犠牲の精神に富んで居ること、責任感が強いこと、即ち義は泰山より重く死は鴻毛より輕し、と云ふやうなことを大雑把に言つて、さて最後に、一體武士道と云ふものを世間の人は何か一種特別な物のやうに取扱つて居るのが間違ひなので、日本のモラル・プラクチック、即ち現今の日本人が行つて居る社會道德が武士道そのものであるのだ。その根本は武士道から傳はつて居る所の「強いばかりが武士ぢ

やない」「情を知ること」「思ひ遣りの深いこと」である。だから「武士は相身互ひ」と云ふ言葉がある、と云ふことまでも説きました。さうして、凡そ日本人ほど思ひ遣りの深い人間は世界中にないだらうと思ふ、高野山へ行つて見ると、日露戦争で死んだ日本人と一緒に滿洲で死んだロシア殉國の兵士の爲に大きな石碑が建つて居る。世界廣しと雖も、敵國の兵士の爲に供養したり追善碑を建てると云ふやうな寛厚な國民が何處にあるか、日本を除いては全く世界に無類である。畢竟するに日本人がサツパリして居て、戦争の時は激しく戦ふけれど、戦が済んでしまへば、また元の兄弟になつてしまふのである、と言ふことを説明し、尙又正義の觀念の非常に強いことを強調して説明したのであります。そしてそれ等の例として、ある商家の小僧が使ひに出て、金を盗られて店へ歸ることが出来ない、で橋上から河へ飛び込んで身投げしようとする處へ、通り掛つた一人の男が、どつこい何をするかそれを抱き止めて、その仔細を聞き、さうか、それくらゐの金なら俺がやらう、と言つて助けてやると言ふやうな義侠の話。或は又子供が窘められて居ると、縁もゆかりもない、通り掛りの人がその喧嘩を買つて出て、俺が相手になつてやる、一體貴様何をする、と云ふ鹽梅に、強きに屈せず弱きを助ける。これは正義觀念の發露である。これが武士道であるので、武士道と云ふものは、名譽、正義、義侠と正直と云ふことの爲には命を惜しまぬと云ふ。これが日本で今我々が現實に行つて居る社會道德の基礎である。即ち、支那の小説の中に出て來る守錢奴の形容に、強きを恃みて弱きを苦

しめ、暴利を貪つて飽くことなしと云ふのがあるが、このあべこべなのが即ち日本の武士道なのである、と云ふことを説明しました。

またある講演会で「日本の教育」を話した時に、ジュ・ブスケと云ふフランス人が日本の教育勅語をフランス語に譯しましたが、如何にもよく譯してあるから、日本の教育と云ふものは、「斯の道は古今に通じて謬らず中外に施して悖らず」と云ふのが即ちそれであつて、一口に言つて見るならば、世間で謂ふヒューマニティー即ち人道と云ふものを具體化して行ふのがこれが日本精神だ、と云ふことに先づ結著しまして、その證據には、日本は今までに戦争はしたが未だ嘗てオツフェンシヴの戦争をしたことはない、いつでもデフェンシヴである、日清戦争然り、日露戦争然り、満洲事變然りである。然るに世間の人は日本を軍國主義だとか侵略主義だとか云ふやうに言ひ觸らして居るのは、これはまるで日本を知らないのである、日本の傳統的國民精神を知らないからの誤りである、と云ふことを説き聞かした次第であります。

ブエノス・アイレスの質問會

このやうな講演をブエノス・アイレスの文科大學の講堂でやりましたところが、さてその翌日から新聞記者が来る、大學の教授が来る、作家が来る、さうして今少し詳しく聴きたいと言

ふのです。處で、これ等の人達の質問は大概同じやうなものですから、同じことを別々に説明しなければならぬ。で私はこれぢや堪らぬから、どうだいあなた方、私にもものを聞きたい人だけが、何處かへ一つに集つて質問會と云ふやうなものでもやつたら、それなら私も一席で済むことになるから、と言つたところ、それぢやさうしませうと云ふので、四十五六人の人が文科大學の會議室へ集つて、質問會を開いたのであります。その中には随分面白い話もありましたが、もうだんだん時間が過ぎますから端折ります。

私は其處で義侠と云ふことを説いて佐倉宗吾の話をしてやつたのです。ところが、何故そんな佳い話があるのに日本人はそれを小説なり或はシネマにつくらぬのか、吾々は、何等さう言ふ種類のことは聞いて居ないで、日本は唯だ暴力で満洲を取つたとか、上海に行つて家を打ち壊したとか云ふやうな話ばかり聽かされて居ると斯う言ふのです。この質問會の時、最も面白かつたのは、日本の近時大發展の原動力——ヨーロッパが三百年も掛つてやつた事を、日本はペルリ渡來後僅か八十年で仕遂げた。この日本の近來の躍進の原動力は何だ、これを簡単に説明して呉れと、言ふのです。私は、それは教育の普及と日本人の勤勉性に歸すると言つて、その所を詳しく説明してやりました。殊に日本は開國以來、外國の長所を採る爲、外國から教師や顧問を傭聘し同時に日本からは毎年多くの留學生を歐米に派遣し、その學んだ所を同化して日本に適用し、謂はば東西の文化を融合したのが日本の今日の文化だ、と云ふやうな工合

に詳しく説いてやりました。

すると、その翌日の新聞には、ドクトゥール堀口——私はドクトゥール、文學博士になつてしまつた。ところでこれは、一體南米の國へ行きますと博士なんと云ふものは何でもない、それについてフランス人が面白い事を書いて居ります。南米へ来て何處かのサロンで武張つたやうな人を見たら、誰でも構はずシニョール・コロネル——大佐殿と言へば間違ひなし、シビールの人であつたら、誰でも構はずシニョール・ドクトゥールと言へば間違ひない、と言つて居る程であります。ですからあちらでは男は皆ドクトゥールなんだから、ドクトゥールを奉られたからと云つて、さう有難がる譯ぢやありません。閑話休題で、話を本筋へ戻しまして、その翌日の新聞には、今度ドクトゥール堀口が来て吾々に全く新しい世界が存在すると云ふことを示して呉れた、これは實に有難い、二十世紀のこの物質文明の中で、日本人のやうな綺麗な心を持つた人があると云ふことを聞いて、實に頼もしいと云ふことが書いてありました。

この質問會は二時間ばかりで終りまして、それから隣りの部屋へ行きましたところ、コクテールだとか色々の飲み物だのサンドキッチだのが備へてありまして、其處で、今度は座談會なんです。その席で、剽軽な新聞記者が、日本には情死と云ふことが今でもあるかと、心中のことを訊くのです。先生方はこの心中と云ふことが解らぬものと見えて、何と翻譯して訊くかと思つて居ると、初めは何を訊くのか分らなかつたのですが、ツープル・シュイシード・パール。

アムール——戀愛による二重の自殺——と云ふのです。成る程面白い、これはモール・サンテイマンタルと云つても分らぬし、シュイシード・サンチマンタルでは尙分らぬから、それで先生方はあの通り、回りにどく「戀愛による二重の自殺」と譯したものと分りました。

そこで私が、それは今でもある、そんなものは毎日の新聞に三つや四つ出て居ないことはない、斯う言ふと、先生方は驚いてしまつたのです——そこで私は、或はこれは詭辯かも知れないが私はさう思つて居る、日本人は戦争ばかりを命賭けにするのぢやないのだ、戀をすることも命賭けをするのだ。お前を愛すると言つたら、男の方でも本氣なんだ、女の方でも本氣なんだから、そこで社會上の地位だとか、貧富の懸隔だとか、お母さんから故障が出るとか云ふと、それぢやと云ふので死んでしまふのだ。あなた方も思つて御覽なさい、女から命賭けで愛されるなどと云ふことはどのくらゐ男にとつて幸福か、と言ひましたところが、皆がきやつきやつと言つて笑つて居りました。

日本の藝術に就て

そこで次の講演の時には、日本の藝術に就て話して呉れと云ふので、その話をいたしました。そして歐米諸國の人達は日本の藝術と云ふものを唯だ浮世繪が立派だとか、歌舞伎が綺麗だと

か云ふことしか知つて居ないのだが、もともと日本文化、藝術と云ふものは、ヨーロッパの藝術と均しく古い歴史を持つて居る、随つて中には歐洲のそれより進んで居るものもある、と云ふことが言ひ得るのである。今でこそ支那はあんなに衰へて居るけれども、磁石の發明、火薬の發明、木版印刷の發明などは支那の方がヨーロッパよりはつと早い、特に養蠶や絹の製法などと云ふものも支那の方がヨーロッパの師匠株である、處が日本は地理上の位置が支那と近いものだから、支那で發明が出來ると、それが直ぐ日本へ傳はつて來た。であるから木版印刷などは、奈良法隆寺の百萬塔陀羅尼などを見ても、ヨーロッパではまだ木版印刷の無い七世紀頃のものに現に残つて居る。殊に絹の製法などに就ては西洋紀元の四百七十年の頃から日本へ傳はつて居る。況して建築でも彫刻でも繪畫でも決してヨーロッパに劣るものではない。殊に、ギリシャ系の藝術様式などが、アレキサンダー大王の征服により印度に傳はり、支那、朝鮮を経て我國に入り、現に奈良前期の遺物にその影響が見られる。それほど日本の藝術と云ふものは古くもあり、それだけの經驗を経、それだけの訓練を積んで居るから、ヨーロッパに負けやしないのである、殊に山水花鳥の繪畫なんと云ふものに就ては、フランス人のオーブラックなどは非常に褒めて居る。と言つて、その書物を読んで聞かせた。今それを一口で言つて見れば、日本の畫家と云ふものは唯だ形が似て居ると云ふことを主眼としたものではない、例へば動物なら動物の眞髓を捉へて、さうしてそれを自分の理想で以て生きて居るやうに表はすのが、

これが日本の動物畫法のうまい所である、と云ふやうなことを言つて居るのであります。それから殊にヨーロッパでは、私が初めて向うへ渡つた頃、——丁度四十五六年前頃、——アール・ヌーヴォー（新しき藝術）と云つてヨーロッパの到る處のレストランでも、どのカフェでも、どのホテルでも、部屋の裝飾を皆アール・ヌーヴォー式に變へてしまつたことがある。これは尾形光琳が今から二百年ばかり前に、物の形似と云ふものよりも、寧ろそれを理想化したものを作つた。あれは尾形光琳の手柄である。それをヨーロッパの畫家が日本へ來た時、初めて之を見たものだから、これは大いに珍しいと云ふのでヨーロッパへ輸入して、新しき藝術——アール・ヌーヴォーと名づけたのであるが、何ぞ知らん、日本ではそんなものは棚ざらしで、二百年このかた見て居るのだ。アール・ヌーヴォーどころか古い藝術なのである。西洋と日本ではこれほどの開きがある、と云ふやうなことを附加へて話しました。

又、あなた方も既に御存じの通り、アメリカが有つ唯一の畫家ホイットスラー（ルルクサンブール博物館へ行きますと、ホイットスラーが自分のお母さんを描いた繪がありますが）、あの線の單純な工合及び色の使ひ方と云ふものは確かに廣重の影響を受けて居るものだ、と云ふことは繪畫史家の齊しく、認めて居るところであります。殊に、私の行く前、昨年あたり藤田嗣治君が南米の方をすつと廻つて通りましたので、藤田君の繪を賞翫して居る人も随分ありましたから、日本畫の特別なライン——線のことなども話して聞かせましたり、それから文學の方へ

入りましても、近松、西鶴、芭蕉、それから殊に和歌——日本の歌のことを話して、一體日本では誰でも和歌とか短歌とか云ふものを作る、日本人は國民學つて詩人なので、戦争ばかりして居る國民と云うて居るなどは大間違ひであり、誤解であり、感違ひである。日本では武將でも皆詩人だ。實朝にせよ、義家にせよ、頼朝にせよ、秀吉にせよ、家康にせよ、皆それぞれ歌を詠んで居る。殊に世界各國に無類なものが日本にある、それは宮中に於ける御歌所である。それほど迄に日本人は平和及び美と云ふものが好きなのである。

御歌所——宮中の御歌所、これは村上天皇の時にはじまつたのですから、今からざつと千年も前からあるのです。御歌所と云ふと、吾々は不斷聞きなれて居るので、何の奇もないことであるが、これを西洋の言葉に直して見ると、ビュロー・オヴ・ポエジ——詩局又は詩廳、ビュロー・オヴ・ポエジなどと云ふものは世界中何處を尋ねても決してない、これがあるのは日本だけである。その他今までの古典的歌集は皆勅撰によつて出来て居る。その外毎年續けられて居る宮中の歌御會——これ亦全く世界無比の優雅な儀式である。しかし、あちらの人に説明するのに、歌御會などと云つても解らないから、毎年正月には宮中に於てクラシク・ポエジのコンクールがあるのだと説明し、そこへは上は 天皇、皇后兩陛下、皇太子殿下、親王、内親王の方々皆御臨席になり、そしてお作りになつた御歌を披講するのである。しかもそこへは全國民、田夫野人の百姓だらうが樵夫、漁師、どんな者でもその作歌を其處へ提出し

て預選にあづかることが出来るのだ。昨年奉つた歌の數は三萬九千六百三十七首、謂はばザツト四萬首の歌が其處へ詠進された。廣き世界の國々の中で日本ほど詩と云ふもの、美と云ふものに憧れて居る國民があるか、日本ではどの天子様も、皆歌をお讀みになる。殊に明治天皇の御歌集は八萬餘首と拜聽し奉る。外國の王様だの大統領だのと云ふ人の中で、詩の作法をだに心得て居る人が何人あるか訊いて見たいやうな氣がすると話しました。しかも吾々は日本に於てばかりそれをやつて居るのみならず、遠く外國へ來てすらも尙ほそれを忘れない。例へば、ブラジル、アルゼンチンで發行する日本字の新聞には皆その文藝欄の中に歌、詩、俳句、川柳が載つて居る、それが皆労働者の作つたものである。百姓——詳しく言へばカフェの畑へ出て朝から晩まで鍬や鎌を持つて働いて居る日本人も、一方では皆詩人なんだ、斯う云ふ國民が世界の何處にあるか。これを以て見ても日本を軍國主義だの、侵略者だなどと言ふのは大間違ひだ、さう云ふことを言ふのは即ち日本文化を知らず又日本の國民性を知らないのだ、斯う言つて懇々と説いたところ、非常に喜んで聽いて居つたやうでありました。殊にブラジルでは、私が講演すると云ふことが新聞に出ますと、向うの師範學校に入つて居る日本人の學生が三人、私の宿へ見えまして、今度講演をなさるさうですが、どうか一つ斯う云ふことを言つて下さいと言ふので、何だいと訊くと、どうも學校の先生が時々莫迦なことを我々に訊かれるので困ります。私共に向つて日本には電燈があるかの、電車があるかの、と言ふのです。そんなことを

言はれては困ると言つて説明しても、ブラジルの先生は本當にしないのです。そこであなたがお話になるならば彼等も本當にしませうから、この點一つうんと力を入れて説明してやつて下さいと云ふ事でした。そこで私はその講演の時に、日本の商業、製造、工業及び精密工業などのことを詳細に話しまして、日本では昔から米粒の中に十六羅漢を刻むと云ふやうなこともあるのだ、謂はば、ペルリが來た時には日本文化の内容は殆んど充實して居つて、今にも爆發しようとして居つた、その噴火山にペルリが來て、ちよつとマツチを點けたので、一時に爆發した、それだから僅か八十年の間でこれだけになつたのだ、と云ふやうなことを説いて聞かせました。するとその日本學生は翌日直ぐ禮に來まして、いやもう溜飲が下りました、今日から肩身が廣くなりました、と云つて大いに喜んだやうな次第でありました。

意義ある啓蒙運動

以上のやうな次第で、要するに私の講演と云ふものは唯だ啓蒙運動にしか過ぎないのです。そして全く啓蒙運動ならざるを得ないので。と云ふ譯は、日本に關する豫備知識が全然ない、何も知らない者に向つて講演するのですから、詳しい事なんか話しても、却つて解らない恐れがある位なのです。ですからこちらは苦心して極くわかり易いことだけを説いたのです。要す

るに國交と云ふものは個人の交際より始まり、總體の個人の交際が國交と云ふものなのでありますから、私の講演、又は各個人との會談宣傳、などが、今急にその効果を顯はさぬにしても、ブラジル人、アルゼンチン人、ウルグアイ人、メキシコ人等に日本に對する新たな見方を示唆しただけでも、多少日本を敬愛する念慮を持たせると云ふことの爲には幾分か役に立つたことであらうと思ふのであります。(昭和十年十一月二十五日外交協會講演)

中南米諸國の印象

最初の國際文化宣傳使節として私が中南米諸國へ向つて東京を出發したのは五月十五日、その翌日神戸から大阪商船のモンテヴィデオ丸に乗り込み、印度洋を通つて一路南米リオ・デ・ジャネイロに向ひ、そこから更に南下してアルゼンチンの首府ブエノス・アイレスに著いたのが七月四日であつた。そこでアルゼンチン、ウルグワイ、ブラジルの各地において或は講演、或はラヂオ放送又は學者、新聞記者、政治家などを歴訪して日本文化を紹介し、九月下旬に至り更にブラジルから北米を経てメキシコに入り、そこに二週間余り滞在した後、ロサンゼルスに出で、そこから今度は太平洋を横切つて十一月十五日横濱へ歸著した。出發から歸著まで文字通り丁度半歳。で、これから地球を一周したこの半ヶ年間の旅行中に於ける印象や感想を、ざつとお話ししようといふ譯。その前に一寸斷つて置きたいのは、これ等南米諸國は私に取つては今度が初めてではなく、いづれも數年前に一度または二度在動したことがあるといふ事だ——旅行の順序に従つて先づアルゼンチンの話から始める事にする。

第一信 アルゼンチン

講演會の大流行

南米諸國で講演會が盛んに行はれるのには實に驚かされた。就中アルゼンチンの首府ブエノス・アイレスに於ては、政治、法律、經濟社會問題及び文藝、繪畫、建築、彫刻といったやうな各種の講演會は殆んど毎日位にあるといつても決して誇張の言ではない。特に文藝美術等のことに關する講演會には、その聽講席の過半、少くともその半數は婦人の占領する處であるに到つては尙更驚一驚。しかも多くの聽講婦人の中には女學生の頗る多い事と、白髪のお婦人が熱心にノートを取つて居るのさへ見受けらるのみならず、いづれの婦人も側目もふらず靜聽してゐる熱心さは、要するに、今や新進の氣の横溢せるアルゼンチン婦人の、その内に燃える知識慾の旺盛熾烈な一の現れである外、何物でもないことが看取せられた。



五百年の先進者

アルゼンチンでのある講演で、私が、外國人は概して日本の文化を一八五三年（嘉永六年）ペルリが初めて日本の門戸を叩いた時から始まつたもののやうに思つて居るが、あれは大なる誤謬であると指摘して、蓋しこれは外國人が日本の歴史を知らないからの誤りで、若し少しでも日本の歴史を繙けばそれ等の誤解はない筈だと言つて、日本文化の傳統の久遠なるを説き、且つ又これは決して私の一家言でも、日本人としての我田引水を依怙最負の沙汰でもない辯證し、その一例として佛國の作家クロード・ファレル（ファレルは日本でもお馴染の早川雪洲所演映畫『ラ・バタイユ』の原著者である）の『東方遊記』を引用し、

「ファレルは中世紀に於ける日本文化と歐洲の文化を比較して、當時ヨーロッパはまだ未開半野蠻の状態にあつたのに、日本では、この時既に清少納言の『枕の草子』が書かれて居た、しかもその筆者の觀察の精緻尖鋭、その趣味の訓練せられて高雅なることは、とても歐洲とは比較にならぬ程進歩して居たと驚嘆し、敬服の餘り自ら『枕の草子』幾章を抄譯し、且つ之に附言して、日本には十世紀において既に此のやうに絢爛たる文學の發達があつた、今試みに之を歐洲に於ける最初の閨秀作家、スペイン、ナヴァールのマルゲリート皇后（フランス國王、

フランソワ第一世の妹君（1521—1549）の書かれたエクタメロンに比較するに正に日本は五百年の先進者であると稱揚して居る程である。」

と結論し、更にその當時書かれた紫式部の『源氏物語』を舉げて、日本には一千年前に既にマダム・ド・セヴィエール（1626—1696）が生れて居たことを講演した。

亞國婦人の向上

それから二三日たつて、前海軍大臣（現に日亞文化振興會長）のサロンで、私の講演の聽講者の一人クレスポ夫人に邂逅した。（この人の夫君は現にアルゼンチンにおける日亞文化振興會の副會長である。）その時夫人は、私の講演はアルゼンチン人には初耳なので、非常な興味をもつて聽いた、特に中世紀における日本婦人の藝術的心境の高さには全く驚歎に堪へないと語られた。

で私は更に『源氏物語』の話を持ち出して、凡そ十一世紀頃の世界の文壇で眞の人生を描いた所謂寫實小説は『源氏物語』を外にしては世界の何處にも見出されないと切り出し、

「當時は英、佛、獨を通じて宗教的な幼稚な詩歌か、素朴な敘事詩のやうなものがあるに過ぎなかつた、概評すればそこには文苑の美しい花が咲き香つてゐたとはいへない。英文學最初

の寫實小説といはれるサミュエル・リチャドソンの『パメラ』（一七四〇年）は『源氏物語』より七百三十餘年後の作であり、シエクスピヤですらこの紫式部に比すれば六百年の後輩だ。』などと、日本文化のために氣焔を吐き、次いで歌即ちボエジの有名な婦人作家として、小野の小町や、加賀の千代、近代では樋口一葉女史の小説などのことを話した。

ク夫人の警句集

その翌日クレスボ夫人から一つの小包郵便が届いた。開けて見ると同夫人のフランス文で書かれた近著である。題して『ある女の心の囁き』といふ、夫人の時々の「パンセ」を書き集めた警句集である。読んで見ると、洗煉されたフランス文、簡潔でコンデンスされた表現、デリカナタツチ、特に女ならではないひ得ぬと思はれる繊細な感情が多分に盛られて居る。その觀察の尖鋭、その洒脱な胸襟、しかもピツカンな所や痛烈な皮肉などがところどころに交つてゐるので、読み始めたら中途で止められぬ程の牽引力を持つて居る。南米婦人の書いた物などと莫加にしては相ならぬとしみじみ感じた。今そのうちの二つ三つを手當り次第に抄譯してお目にかける。

同情。見たり感じたりすることの深きアイダンチテ。

労働。權利と義務の存在の理由。

時。絶えず造つたり壊したりする機關。

辯護士。同胞の不和で生活する人。

會話。社交界でいつも眞實のことならでは語らぬやうな容子をする技術。

哲學。銘々が勝手に自分の好きな方法で世界を見るためにあけた小窓。

正義。男の良心のうちに入れるにはチト大き過ぎる觀念。

友情。男と女の間では戀愛の前奏曲であり、且つその終曲でもある。

これらが立派なフランス文で書いてあるのだ。

眉の描き方まで

まして社交界などにおいては、世界における近代文化の源泉はフランスであり、その爛漫たる開花もまたフランスであると崇拜し憧憬してゐるので、パリ流行の婦人の衣裳、帽子、靴、手袋、ハンカチーフ、香水はいふまでもなく、眉の描き方まで一切萬端フランスでなければ夜が明けぬやうに思うてゐるのが南米の國々である。さればこれら諸國の人々の旅行先きはいはずと知れたフランスで、随つて留學生なども大抵は皆フランス育ちである。一例を挙げると上

流階級の女子などは嫁入り前には必ず一度はフランスへ旅行して来ねばならぬやうに思つてゐる。自然婦人達の讀む小説類などは殆んどフランス物である。だから前に話したクレスボ夫人に佛文の著書があつたりする譯である。

にも拘らず我國の多くの入達が「英語は世界語なり」などといつてゐるのは大變な間違ひである。英語は英、米、カナダ、濠洲、南亞その他の英領を除くの外は、そんなに幅の利く言葉ではない。歐洲大陸でさへ、英語はあまり通らぬ、況して中南米諸國においてをやである。

だから日本から中南米諸國へ英語で書いた廣告やパンフレットを送る會社や商社などがあるが、これ等は先方の紙屑籠を肥やすだけで、何の役にも立たないことを一言注意して置く。

物質的天惠の反映

「富は屋を潤ほす」……などと大上段に構へるのではないが、さてアルゼンチンの首府ブエノス・アイレスがこの數年間に擴大し、擴張し、發展し、進歩し、美化したのには全く驚かされた。港口には十幾マイルと續く壯麗で岩乘な岸壁、それに沿ふ幅廣き道路には幾千臺の綺麗な自動車のドライブ。

丁度東京の銀座に當る、市のもつとも繁華な場所、フロリダ、アブニダ・マイヨ、ヂヤゴナ

ル、レコンキスタ等の街々の家屋の輪奐、その店飾の華麗潤澤、そしてその繁華と雑沓、豊富豪華。もしそれ新開地のアブニダ、アルベールの住宅地區に至つては巍々堂々たる邸第、いづれも繞らすに廣闊なる庭園を以てし、その各自が趣向を凝らした作り方。そしてこれが一里も二里も續くのであるから驚かされる。況んや公共造物たる、競馬場、各種スポーツの運動場、水道局、電信郵便局等、等、いづれも皆科學的最新版のモダン型。加ふるに一塵の飛ぶを許さぬ道路の清掃、全く南米のパリを以てアルゼンチン人が自任するも、まんざら自惚にあらざるを覺ゆ。パレルモ公園への沿道の如きは宛然これシャンゼリゼーなり。

特に外國人の目を眩らしめるものは、いづれの男も女も、貴賤老若を論ぜずその服裝の綺麗さつぱりとしてゐることと、その履く靴の、いつ見ても、今直ぐ磨いたものかのやうにピカピカ光つてゐることである。

就中驚くに堪へたる一事は若い女の爪紅だ。各銀行、會社、商店又はデパートの女事務員などはまだしもであるが、各小商店甚だしきは果物店又は八百屋の賣子娘達に至るまで、いづれも時世粧の短髪に爪紅さしてゐるのである。一言せばアルゼンチンにおいては貴婦人か、サラリーマンの細君か、將た又女中であるか全く以て見分けがつかぬ。

そしていづれも愛嬌のある大きな黒い目には、母國西班牙ゆづりの氣高さと情熱と才氣とが肢體に煥發し横溢して所謂元氣潑刺、愉快でたまらぬと言はんばかりの顔色風采は物質的にも

豊富に恵まれたる天の賜物の反映でなくて何であらう。

第二信 ウルグワイ

アルゼンチンの隣國ウルグワイは南米におけるもつとも小さな國である。その廣袤僅かに七萬二千平方マイル。人口僅かに百九十萬で、わが新潟縣下の人口位だ。しかし學藝は随分發達して居るので、國都モンテヴィデオの大學は南米に於ける屈指の學者の淵藪と呼ばれ、國人等も亦自ら南米の「アデンス」を以て私かに任ずるといふ程その文化は中々進んで居る。

この國には各小學校に世界列國の名を付けるといふ一種異つた奇妙な慣例があつて、例へばフランス學校、イギリス學校、日本學校、又はドイツ學校などと呼んで居る。尤もこれは名前だけのことで、その國名を冠する國とは別に何の關係もないのである。

丁度私がウルグワイ國巡訪中、七月十八日はこの國の獨立記念大祭の公休日なので、私もこの日は訪問などを差控へ、ホテルの一室で獨り靜かに新聞などを讀んで居た。

するとモンテヴィデオ在留の日本人の重立つた人達が兩三人やつて來て、

「今日は日本學校で（式）がありますから若し貴方が行つてやられたら校長初めみんな喜ば

れることではう」

との話。「それでは」と直ぐに自動車で、その所謂「日本學校」へ出掛けた。

「花咲爺」を一席

私共がその學校へ著いたのは、丁度「式」が終らうとする少し前だつたので、校長はじめ職員達は大いに喜んで、日本で廣く知られてゐる童話の一つ生徒に聞かして貰ひたいと頼まれた。で、私は直ぐに、拙いながらもスペイン語で「花咲爺」の話をしてやつて、正直の徳、よく張りの損、かつは動物愛護といふやうなことをほめかした。それが濟むと音樂受持の女教員がピアノを弾いて、生徒一同に「君が代」を合唱させたが、その調子といひ感情といひ中々上手なものであつた。

この學校は二三ヶ月前に新築した鐵筋コンクリートの廣大なもので、空氣の流通、光線や音響の工合など、近代科學を應用した立派なものである。校長自ら先にたつて一々親切に案内して廻つた後、廣い職員室でお茶が出た。その間、受持教員達が菓子やサンドキツチの入つた紙袋を生徒達に分つてやりますと、皆うれしさに運動場で嬉しさに遊んで居た。

この校長や職員達の應接振りが如何にも垢抜けがして居て、少しもぎこちないところがなく、

しかも親しみがあつて、いはば一見舊知の如しとでもいひたいほど、全く氣の置けないところが私共に誠によい印象を與へた。堅い握手をかはして別れた後までも、何とはなしに懐しい思ひがして、歸りの車中でお互ひにそれを語り合つた程である。

學童の社交性

さて私共が校長に別れて校外に出ると、その時まで運動場で多勢してがやがや遊んで居た七八歳から十歳ばかりの子供達が十二三人私共の後に踉蹌して來た。そして私共が學校の門外に待たせて置いた自動車に乗り込むと、皆ニコニコした笑顔で自動車の兩側に並び、銘々自發的に人を見送る時の手ぶりをして、十口一齊に「ボン・ヴァーへ」といつた。「ボン・ヴァーへ」とは日本の「左様なら」又は「御無事で」といふのにあたる旅人を見送る挨拶の言葉で、フランス語の「ボン・ポワイヤージュ」と同義である。

これ等十二三人の子供は銘々勝手に、私共について來たので、先生の命令でもなく、またその示唆を受けたのでもない。まして先生が此等の生徒について來たのでは勿論ない。全く自發的に限隨て來て、自發的に送別の言葉を送つたのである。だから如何にも自然で、無邪氣で、可愛らしく、しかも誠に氣の利いた挨拶であることが深く私共の感興を惹いた。

思ふにこれは、ウルグワイ國人が外國人を見るに何等異様の目を以てせず、外國人に接するに極めて親密、平易であつて全く自國人と區別したり軒輕したりすることのない風習が、これ等兒童に感染薰育したものに外ならないと思はれる。

若しこれが日本の小學生徒であつたらどうだらう？ 外國人が三四人突然參觀に來た場合などには、はにかんだり、怖れたり、いじけたり、若しさうでなければ心の中に嫌悪したりして、その言語舉動に、何とはなしに不自然な所が現れはしないだらうか？

税關官吏の應接ぶり

この度の旅行で一番快く感じたことは、これ等諸國の税關の役員や巡查が丁寧であり親切であつたことだ。

ある國に對する印象の好し悪しは著頭第一に接觸する税關官吏の應接ぶりの如何に關することの少くないことを思へば、これは決して輕視すべきではない。特に外國著頭第一の印象は深甚なもので容易に消散しないから、これ等役人達の言動舉作の及ぼす影響の意外に大きなものであることを知るを要する。

今から四十年前私が初めてフランスへ行つた時、アーヴルからパリまで同じ汽車に乗つたフ

ランス人（アーヴルの豪商）が、いはば田舎からぼつと出の私に對して痒い所へ手のとどくやうな親切ぶり、私をアブニユ・マルソーの當時の日本公使館まで案内して呉れたので、深くその親切に感じたことがある。國交もつまるどころ、個人の交際である。總體の個人の交際が國交であるのだから、國交の親善を計るためには、個人個人の交際を親密にし、互ひに理解し合ふやうにせねばならぬことが沁々思ひ合はされた。

自己劣視觀念

そして子供の時から習性が、日本人にあつては、大人になつても全く取り除けられずに残つて居て、遂には所謂インフェリオリテ・コンプレックス即ち自己劣視の觀念となるのでは無いか。口でも、筆でも我々日本人は卓拔優越なる國民であるなどといつては居るものの、その心の奥では自己の優秀なることを拒否して居るものらしく思はれる。

例へば白人種と黒人種の混つたアフリカのダーバンでは、公衆便所へ行くとよく「ユーロツピアン・オンリー」即ち「白人丈け」と書いてある。で日本人がおやと思ふと、番人が「イエス・オー・ライト」といふ。すると番人がよしといつたといつて嬉しがる。同じことが電車の場合にもたびたびある。白人と黒人とを區別してある電車はダーバンの到る所にあるが、日本

人はいつも黒人の居る電車の方へ行く。すると車掌が「どうぞ白人の方へ」といふ。すると白人のゆく方へゆけたと思つてひそかに喜ぶ。何故最初から白人の方へ行かないのか。ここに既に、日本人が自ら卑下視して、他人から卑下される原因を作りつつあるのだ。

「自ら卑しめて、人之を卑しむ」と古人もいつた。餘りに謙抑に過ぎると自屈になる。この點が日本人の爲に口惜しく癢にさはる。

かくいつたからとて、外國人に對して威張れといふのでは決してない。況して外人を輕蔑したり嫌惡したり排斥したりしては尙更いけない。が、しかし、我々日本人も世界各國人とお互ひ同士、國際團體の一員であつて、負けも劣りもしない全く同等のものであるといふ信念を固めて、ウルグワイあたりの小學兒童でさへ、外國人に對し高ぶりもせず自卑もせずいはば自分達の兄弟若しくは仲の良い友達と思つて居る。あの氣輕な、そして同時に落著いた氣位に鑑みて日本人も今少し反省する必要があることを痛感した。

外國人に對するウルグワイ人の態度が、如何にも自然で無理がなく奥床しく感ぜられたことが歸りの自動車での我々の話題となり、その話に花が咲いて午餐の後までも尙續いた。その時某氏は、

「日本人はまだ實際外國人に對する腹が出来て居ない。そして氣魄が足らない。氣魄などといふと四角張るやうだが、平たくいへば氣位が低い。世界の一等國を以て自任する程なれば今

少し腹を太く、氣を大きく、そして氣位を高く持つやうにせねば駄目だ。だからこの際國民の氣位を高くするやうに教育することが今日日本の急務である。英佛の優越などは實はここから來て居るのだ。自ら優越を信じて高く自ら標致し、頭から他を呑んで掛つて居る……。」

氣位を高く持て

更に某氏はつづけて、

「だから他に對して、優越感とまでは行かなくとも、少くも他と同等であると信ずるの念、
くだいて言へばへなに負けるものかい」といふ信念を日本人に喚起することが何よりも必要である。そしてこの信念は實は日本人の誰もが心の内には持つて生れてゐるのだ。見給へ、これ迄日本人が成功した事蹟に就いて振り返つて見るに、いづれの成功も皆この氣位で押し切つて來たものばかりではないか。氣合だけで勝つたのである。日清戦争然り、日露戦争然りであつて、滿洲事變などは尙更の事だ。此のやうに日本人は何事でも皆氣合でやり、氣位で勝つのだ。氣合で病氣すら直すなどいふ（氣合術）などのある國は、世界廣しと雖も日本を除いては絶無である。だからこの氣合を養ひ氣位を高くすることが喫緊事である。」

とその鋭鋒當る可からずであつた。

第三信 ブラジル

日本の教育に仰天

ブラジルには、前後二回の在勤を通じて、私は十二年間も居たのだから、自然、大學教授や議員や新聞記者、特に外交官中には友達がまだ随分多いので、今度の三回目の旅行などはさながら第二の故郷へでも歸つたやうな心地で、最初から自他共に氣の置けない、いはばざっくばらんに意見の交換が出來たので、實に愉快でもあつたし又得るところも少くなかつた。

さて、首府リオ・デ・ジャネイロにおけるある講演で、ヨーロッパ諸國が二三百年もかかつて築き上げた文明を日本が僅か六七十年で成し遂げて今や押しも押されもせぬ一等國の一に數へらるるに至つた原動力は全く教育の普及にあることを強調し、今や日本には文盲者の數は一パーセントに過ぎず、と話したところが、文盲者の數が九十パーセントと呼ばれる伯國人には

餘程強烈に響いたものと見えた。で、その翌日から文部省の役人、代議士、新聞記者などが續續やつて來て日本の教育に關して色々質問するので、私は先づ、日本の初等教育は六歳以上の少年少女に對し強制的に施され、師範學校は教師を養成する爲に各地方に設定せられてあることから、今日の教育制度に於ては、小學校の直ぐ上には中學校があつて、中等教育が授けられ、更に優秀なる生徒達は高等學校へ進む。陸海軍、又は農業、工業、科學、商業或は藝術及び手藝を志望するものためには皆それぞれの専門學校がある。その外帝國大學及び幾多の大學は法律、經濟、文學、醫學、工學、理學の各分科を包含する。女子教育に關しては既に十數年前に女子大學が設置せられたを見てもその普及の一斑は推測される。特に修身に關する國民的大則を公式に示し給へる教育勅語は、倫理の普遍的原則を概括した後に「斯ノ道ハ實ニ我ガ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所、之ヲ古今ニ通シテ謬ラス、之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」と仰せられて居ることを説明し、フランス人ジュ・ブスケ氏の名譯になる「教育勅語」を示してやつたところ、これ等の人々は今更の如く驚歎して居た。驚歎は拜崇の導火線である。そこでこれ等の人は「教育普及の模範は日本に限る」などと互ひに語りあつて居た。それかあらぬか、この頃のブラジル通信によれば、あちらでは教育普及聯盟なるものが出來て、文盲一掃運動が盛んに各地に勃興し、その敬意の表徴としてブラジル國旗を日本へ寄贈することになつたのみならず、教育普及方法研究のため遠からず文部省の役人を日本へ派遣する

ことになつたといふことである。

こんな工合に、日本の真相があちらの人達にだんだんよく解つて來れば、日本移民排斥の聲などは自然下火になるばかりでなく、或は全くその跡を絶つに至るかも知れぬ。

日本人を排斥して後悔

先年伯國議會で日本移民排斥法案が通過して、べら棒にもこれを憲法の條項中に規定した。普通の法令で規定するならまだしもだが、憲法の中へ移民のことなどを挿入するとは以ての外だと伯國人ですら憤慨して居る。

そこでその経緯を訊ねて見ると、あれは全く國內政争の結果である。換言すれば、これ迄大統領の選挙を殆んど獨占せるかの觀あるサンパウロ州を虐めることがその目的の第一。加ふるに當時現大統領バルガス氏は、大統領選挙の投票を一票でも多く得ることの必要上、議員の御機嫌を取り、その意を迎へねばならぬ立場にあつたことがその原因の第二。その上に、日本の南米發展を嫉視するある國が策動して多數議員を買収し、排日案に投票せしめたのがその第三。これ等の原因で遂に排日移民法案は審議もせず、ばたばたと通過したものであると言ふことである。

さて排日法案が通過して所謂二分制限法が實施されると、間もなくサンパウロの奥地から勞力不足の聲が揚がつて來た。のみならず、サンパウロ市あたりでは、急に勞働者の賃銀が三割方の高騰を示し、不平の聲は到る所に聞えるに至つた。ここにおいて政府は補助金制度による歐洲移民の誘入に乗り出すことになつては見たが、さて伯國における田園勞働者としての適否を考へずに、漫然と歐洲の失業者などを連れて來て見たところが、田畠の耕作に經驗のない歐洲移民は、甘蔗やコーヒーや棉花栽培には餘り役に立ちさうもないと異論も出て、且つは歐洲全體が、エチオピア問題を中心として伊英の對立から、何時如何なることが突發せぬとも限らないので、各國はいづれもその國民の一人でも多からんことを希望して居る現狀に照らして、果して伯國の希望が達成せらるるや否やが疑問視されてゐる。尙又一方には、外國移民に補助金をやる位ならば、先づ伯國內に於ける伯國人失業者を援助救濟すべきであるとの議論が盛んになつて來た。そしてその結果、數ヶ月前に、政府は、伯國北部セアラ、ピアウイ、パラíbaの諸州から千人以上の勞働者をサンパウロ州に移入することとなつた。

ところが伯國北部の熱帯圈内に生れ、そこに住み慣れた勞働者達は、サンパウロの農園におけるが如き規則立つた勞働、例へば朝は六時に農場へ出て、夕刻の何時まで働かねばならぬといふやうな軍隊的規律の作業にはさつぱり慣れて居ない、のみならず、概して懶惰がその第二の天性となつた彼等にはとても堪へ切れないので、脱走者頻出。そこで雇主の方でも、雇はれ

た方の伯國人勞働者の方でも、不平滿々。今や双方とも困り抜いた擧句の果、どうしても又、遠く思ひを雲山萬里の日本移民の上に馳せざるを得なくなつたといふことである。

然らば之を如何にすべきかが目下伯國に於て議論に花の咲いてゐる日本移民問題である。先年新たに制定した憲法の手前もあるので、如何にして之をくぐり抜けるかと言ふことがその苦心の存する處である。が、兎角理窟と言ふものは鳥糞ちんぎんのやうなもので、何處へでもくつつく至極調法なものである。その中の尤なるものは、伯國新聞協會會長モーゼス氏が昨年九月初旬發表して痛く關係筋の注意を喚起した説である。

氏は「契約移民誘入は憲法に牴觸せず」との題下に辯じて曰く、

新憲法の條項は實に賢明なるものと言つていい。余の解釋を以てすれば、憲法中に謂ふ所の移民とは不必要な場所に於ける外國移民を指して言うたので、各州が必要として誘入する契約移民は此の内には含まれて居ない。詳しく言へば、この條項は契約移民誘入を何等阻止するものではない。憲法起草者は恐らく爲政者に對して不必要な場所における外國移民の流入を防止する権限を與へるために此條項を設けたに相違ない。聖州の如き進歩せる州に對して若し勞力不足によつて、地方的といふよりも、寧ろ國家的性質を帶ぶる棉花政策の遂行を不可能ならしめたまま放置して顧みないといふことは實際問題として有り得べからざることである。だからサンパウロ州が必要だからとして日本と契約して誘入するものならば、その移民は憲法に牴觸

するといふものではない。

といふのである。

且つ氏は續けていふ。

我ブラジルは人類の一大鑛産地であるから何人も我等から受ける影響を拒ぐことは出来るものではない。如何なる外國人も一度我等と生活を共にする時は遂に其環境に順應するやうになる。此の故に余は何等人種的偏見は有つて居ない。

さうしてこのモーゼ氏の説はその反響頗る大。各地に賛成の聲が揚がり、特に聖州内奥地の地主等は日本移民誘入に關して既に其筋に向つて或運動を開始したとさへ傳へられてゐるのであるから早晚何とかうまい工合に運ぶだらうと思はれる。

日本移民への忠告

況んやまた、排日移民法案が議會を通過したといふものの、實際において伯國人特に地主や耕主等は日本移民の誠實勤勉に對して大いに満足して居るのみならず、廣く日本人一般に對して少しの悪感情も持つては居ない。私はこのたびの旅行中、つとめて伯國の各階級の人達、特に政治家、實業家、地主、新聞記者諸君と懇談して腹藏なき意見を聞いて見たが、日本移民

に對する感情は至極良好であり、親切である。親切であるからその忠告にも亦聽くに價するものがある。今その二三を書いて見る。曰く、

日本移民は餘りに集團的であり、あまりに排他的である。甚しきはブラジルに既に十年以上も居住して居る移民にして全くブラジル語を解せず、ブラジル人と交際せず、隨つてブラジルの風俗習慣に馴れず、中には、日本は一等國だ……なんのブラジル如きがと輕蔑し……こんなブラジルに同化してたまるか！ などと放言するものさへある位である。小さなことは言ひ條、これがブラジル人の感情を刺戟し、いらだたせ 憤慨させる。これ等の點はどうかして矯正して貰ひたい。これは日本移民の利益を思ふ上からの苦言だ。

更につづけて曰く。日本人はお人善しだから、知らんのかも知れないが、これ等日本移民の言動は伯國に於ける日本移民の競争者たる他の外國移民に日本人排撃の好き口實を與ふるのみならず、近來日本の南米發展を嫉視して何かとその乗すべき機會を狙ひつつ策動し、虎視眈々として罅隙を窺つて居るある國々に、誂へ向きの排日の託辭を供給するものである。だから日本移民の指導者達は深く思ひをこの邊に廻らして、なるべく日本移民を伯國に同化するやうに指導勧告するを要す、と言ふのである。その親切は大いに感謝すべきではないか。

こんな工合で伯國人は日本人を少しも憎んでなど居ないのだから移民問題などは遣り方一つで、うまくいけない事はないやうな氣もする。

序で一言付け加へて置く。私があちらへ著く二ヶ月程前にブラジルへ行つた經濟使節即ち平生鈺三郎氏等の一行が伯國に残した印象は上々吉といふべきである。大阪商船や、三井、三菱、鐘紡、東紡の中堅どころが揃つて出掛けて、「日本近來の海外進出は、ある國々の惡宣傳で世間に廣まつて居るやうなソシャル・ダンピングによるものではなく、その主なるものは勤勉なる勞働供給力の豊富、低廉な電力、效果的な工場管理及び生産、模倣技術の發展、生産費の低廉に加ふるに新しき生産發展と技術の鍊磨等によるものである事を徹底的に説明し、よつて以て伯國の進むべき針路をも併せて暗示し、示唆した」ものと見えて、到るところで噴々たる好評を聞いたことは私に取つて實に愉快なことであつた。

聞くところによれば、伯國はこの經濟使節の訪伯を契機として、新たに外務省内に日伯産業調査局を設け、遠からず日伯の合辦による産業會社を設立せしめんと意氣込んで居るとのことである。兎に角、經濟使節一行の伯國訪問は經濟上日伯接近のために拍車の一撃を與へたものといつていい。要するに今後日本は歐米諸國に負けずに各種の使節を南米方面へどしどし送ることが必要だ。これ迄日本は餘りに南米方面を疎略にし閑却して居た憾みがある。移民でも通商でも産業でもそれ等の發展のためには兩國國民の理解や感情の融和が一番先きであるのだ。

理解出來ぬ宣傳映畫

日本宣傳のために外國へ出す日本の映畫製作については、外國人の心理状態や、風俗習慣を深く考慮して作らねばならぬことを感じさせられた面白い挿話がある。

リオ・デ・ジャネイロの銀座といはれる最も繁華な、アヴニダ・リオ・ブランコにある美術學校の講堂で「日本文化」について講演した後で、餘興として觀光局の製作に係る「日本の四季」といふ映畫を聴衆の覽に入れることにした。その時これ等映畫に關するブラジル人の感想や批評を一つ聞いて見ようと思つて、私は人知れず觀客の中に交つて座席を占めた。

「日本の春」で、櫻が爛漫と開きに開いて、この世界が全く花で埋まる別天地となつた綺麗さ濃艶さには、風光の美などには普段はあまり關心を持たないブラジル人も餘程感心したものと見えて「オヤ綺麗！ 行つて見たいワ」などと頻に歎賞して居る。

で、私はひそかに小鼻を動かして、「どうだい、日本は綺麗な國だらう！」と心の内に誇つて居た。

その次の銀幕は「日本の夏」で長良川の「鶉飼」。

「鶉飼」と聞くと我々日本人には納涼だとか篝火だとか鶉舟だとか凡て詩的な夏景色が腦裏

に浮んで来る。

ところが納涼なんかといふ言葉もなく、況して篝火だの鶉舟などは見た事も聞いた事もないブラジル人には鶉飼とは何の事やらさっぱり分らないのである。それも無理からぬことで、その映畫の字幕には鶉飼についての説明が全くしてなかつた。

そこで観客は皆不得要領な顔をして居た。その時私の隣席の一人の紳士はやがて小聲でその隣の人に、

「なる程日本は漁業の發達した國だと聞いて居たが、鴨にまで魚を捕ることを仕込んである、感心なものだ」

といつてゐる。なんだあれを漁業の發達を宣傳する映畫だと思つて居るらしい、呆れたものだと思つた。

をかしくもあり、バカバカしくもあるので、その翌日偶然訪ねて來た邦字新聞の記者で、ブラジルに永く居る某氏に、このことを話すと、その記者の曰く、

「日本の映畫には兎角そんなのが多くて困ります。これは思ふに外國へ來たことがなく、外國人の心理など少しも知らない人が製作するからなのでせう。日本人は自分が山水の美だとか四季の風光だとかを愛好するから、外國人も多分同じことだらうと思つて、あんな映畫を作つて態々外國まで送つて來るのでせうが、元來外國人は一般に天然の風景などは餘り愛しはしない」

いのです。スキスの雪山でも、ヨセミテの谿谷でも、その景色ばかりを愛するのではない。外國人の愛するのは「人間」です「人生」です「人事」です。景色は外國人には二次的なものです。」

口角泡を飛ばし、記者君は尙も續けていふ、「鶉飼」などは外國人に解らぬだけで、まだ無害だから何でもないが、それよりも一番悪いのは日本風俗の映畫です。例へば「ジャパニズ・フェスティバル（日本のお祭）」あれなんかは日本を野蠻國だと自分で宣傳するやうなものです。お互ひ日本人には見慣れて居るから左程にも思はぬのかも知れませんが、あの多勢の若い人達がみんな跣足で、太股まで丸出しで、腕まくりして、向う鉢巻でやんややんやと神輿を擔ぎまはるあの有様は何です。私はいつぞやブラジル人と一緒にシネマへ行つたところが、偶然その「日本の祭」が出て來たので、とても恥かしくて、見て居られず、獨りコソコソ出てしまひました。その外淺草雷門の光景なぞ田舎ものが膝から下丸出しで……あれなんかも外國輸出を差控へて貰ひたい。」

第四信 メキシコ

思ひ起す革命當時

今から廿三年前、革命相次ぐメキシコに私が在勤して居た當時、ウエルタ將軍が、時の大統領マデロに叛旗をひるがへし、一千九百十三年（大正二年）二月九日の黎明、メキシコ市に革命騒動が勃發して忽ちの間に市は砲煙彈雨の巷と化し、砲聲は殷々と鳴り渡り市民は悉く遁竄して、市中寂として人影なく、ただ時々飛ぶやうにして一臺、二臺の自動車疾走して過ぎ行くを見るのみであつた。

この時大統領マデロの家族二十餘人が蒼惶として日本公使館へ避難し來つたので、これを庇護してやつた縁故などがあるために、メキシコは私に取つては忘れ難い所である。況して昨年三月メキシコ政府から新たに設定された最高勳章を贈與せられたなどのこともあるので、今回の旅行は私には種々な意味を持つた旅行であつた。

で、メキシコの舊友達の方でも亦、まだ私が著かぬ前から、エクスクルションや、園遊會や、夜會や宴會やのプログラムがすつかり出來上がつて居た程の歡迎振り。

されば到著のその日から、メキシコ出發のその夜まで、毎日毎夜の交歡。舊交を温めて新交を結び、文字通り寸暇なき有様であつた。多くのメキシコ新聞紙は革命當時の懷舊談などを掲げて日墨交情の親密を語り、中には「太平洋で繋がつて居るこの兩國は益々親善なるべき運命にある」とか、又は「メキシコに居る日本人が如何にメキシコ人から敬愛せられて居るかは、よく知つて居る筈だ」とまで開暢し、邦字新聞もまた、負けず劣らずの筆鋒で、日墨の親密をこの機會とばかりに謳歌し、中には「日本文化使節の歡迎攻め」などと大見出しを掲げた位であつた。

メキシコ市に到着するや早速私共は革命當時、無残にも暗殺せられた故大統領マデロ（今日では廣くメキシコ人から農民の救世主の如く崇められ、特に現政府はその理想の後繼者を以て自任して居る）の墓に詣でて、花環を捧げた。日本公使館員、日本人俱樂部の幹部諸君と共に、すると、日本人はどこまで人情の厚い國民であらうと言つてメキシコ新聞は又も大々的に、その墓參の寫眞まで入れて掲載したので、大いに恐縮した。

其の翌日、所定のプログラムに従つて私共夫妻はマデロ未亡人を訪問した。その時元内務大臣エルナンデス氏は自分の自動車で、我々のホテル迄自ら迎ひに來られ、そして自動車がマデ

ロ夫人の邸前に止まるや、元大藏大臣エルネスト・マデロ氏夫妻が門前まで迎へに出られた。内へ入つて見ると當時のマデロ内閣の生存者の總て、即ち元の外務、内務、大藏大臣夫妻、副大統領（これも革命當時暗殺せられた）の高級秘書官、その他の元の高官達が、マデロ夫人を取巻いて待受けて居られた。いづれも親密な舊友、それが二十三年振りの再會である。感慨無量、人間いまだこの際の感情をいひ現すに適當な言葉を發見せず。さればマデロ未亡人と荊妻とは、相見るや否や、互ひに強く相抱擁して無言のまま暫くの間ただ暗涙に咽ぶばかりであつた。眞にこれ一場の劇的シーン！

暫くの後、話は二十三年前の革命當時に溯つて話舊談新に花が咲いて、午餐の饗應の後、五時過ぎまでも盡期あるべからずであつた。（この革命の詳細は二四一頁「メキシコ革命運動體験記」参照）

華麗な墨都の發展振り

さてメキシコでも、各大臣や大學總長、文科大學長、圖書館長、博物館長等を初め、新聞記者、學者、政治家との會見の頻繁なりしことは他の三國と異なることはなかつたが、ただメキシコの外務省がラヂオ放送に全一時間を「日本時間」として提供して呉れたことは感謝措く能はざる所である。

その上文化講演に興味を添へる爲に、メキシコ生れの朝鮮人（即ち日本人）でソプラノの名歌手として廣く當地に知られて居るマリヤ李嬢の唱歌を講演の前、中、後へ程よく組入れて、最初に山田耕祥氏の作曲「カツポレ」、「お江戸日本橋」、「荒城の月」、次で堀公使の紹介演説、その次に私の日墨親善の懷舊談、メキシコ大學で日本文化講座受持の荒井教授の演説、その中間伊藤氏作曲の「さくらさくら」その他の唱歌、終りが李嬢のお得意の「バツタ・フライ」で日本氣分を横溢せしめて内外人の歎賞を満足させることが出來たかの觀があつた。

談漸く佳境に入り（世上萬事此の如しで）不圖氣がついて考へて見ると、私に與へられた紙數は今や盡くるに垂々としてゐるのである。

そこで驅け足的にそして極く簡単にメキシコの感想を述べる。革命また革命で、休養や發展の時間など無ささうに思はれた豫想を全く裏切つてメキシコ・シチーにおける商工業の股賑、特にその郊外や附近村落の發達と擴張には實に驚かされた。二十二年前にあつては狐狸の巢窟であつた原野が、今や全く立派な町續きとなり大統領官邸の所在地チャプルテペックの後方には新たに住宅地區が開かれて宏莊華麗な大厦高樓が連続し、然も家々の内部は進歩せる科學を應用した最新式モダン家庭。幅廣きコンクリートの道路は縦横に幾十マイルを貫通して自動車は往くさ、來るさ！

特にメキシコ市における日本人の發展はこれ亦眞に刮目して見るべきである。二十三年前ま

では市の在住者は僅かに三四十人に過ぎなかつたのに今では四百人以上を數へ、随つて日本商店もこれと正比例に繁昌し、鉛筆製造所、貝鈕製造所、その他製藥工場等の邦人の經營に係るものの續出を見るのは皆これ前途の好望を示すものとして頗る人意を強うするに足る。さればいづれの日本人も元氣横溢霸氣滿身たるものあるのは實に末頼もしく思はれる。メキシコのみならず、總じて中南米諸國における日本人の事業は決して悲觀すべきでない。最後に、この度の旅行で感じたことは日本人は進取の氣象に富んで居て、何處でも發展して行くといふ事實と、その氣概の盛んなることであつた。指導その宜しきを得れば前途の發達は期して待つことが出来ると思はしめる。

終りに臨んで私の使命遂行のために各地の居留民諸氏ならびに大公使館、領事館の方々が與へられたる多大の便宜と援助とに向つて茲に謹んで深き感謝を表明してこの稿の筆を擱く。

（昭和十一年一月上旬『東京朝日新聞』）

日本に對する外國人の評價

上

日本文化宣傳の爲昨年中南米諸國を巡歴の際、私はこれ等諸國の多くの政治家、學者、新聞記者達と屢々會見した。そしてその會見の際に於ける彼等の話し振りに依つて、彼等が如何なる程度に日本を評價し居るかの一端が窺はれて心竊かに一驚を喫し又深く残念に思つた。それは彼等が皆齊しく額面より安く日本を評價して居るといふことである。

日本は今や歐米列強に伍して相角逐し、海陸軍備、通商工業その他いづれの方面に於ても何等遜色なく所謂押しも押されぬ一等國を以て自任して居るのである。然るに外國人は我々が日本を認めて居る程度に日本を評價して居ないのである。然らば彼等は日本近年の飛躍的發達を全く知らないのかと言ふに、まんざらさうでもないらしいが、しかし真相を知つて居るものは極めて少ない。しかのみならず、真相の幾分を知つてゐる人すらも尙ほ日本を歐米諸國と

比肩し得る一等國とは思つて居ないのである。實に不思議なことではあるが全くの事實である。蓋し昔からの因襲の傳説が彼等の腦裏に先入主となつてこの僻見を來したのである。

然らばその因襲の傳説とは何かと言ふに、左の數語に盡きるのである。曰く「日本は亞細亞の一國である。されば支那や印度や暹羅と似たり寄つたりの國である。だから幾ら躍進したの、發達したの、開化したのと言つた處が、たかだか亞細亞的の發達、進歩開化に過ぎぬのであつて、歐米の進歩發達とは段違ひのもので、逆も日を同じうして語るべからざるものだ」と。これが蓋し彼等の心の僞らざる告白でもあり、且つ日本に對する評價の原動力を爲すものである。日本に對する此の如き誤りたる見解の行はるるは實に遠隔なる中南米に於てのみに非ずして、近く對岸の北米に於てすら尙ほ然りと言ふに至りては實に意外千萬と言はねばならぬ。

左は中南米よりの歸路、私が北米で親しく聞いた話である。曰く、北米にはまだ日本を七八十年前の舊幕時代とあまり變つて居ない半開國だと思つて居る人が少くないと言ふことである。特に驚くべきは北米の中小學校の地理の教科書の挿繪に、簑を着た農夫の寫眞に、ジャパニ・ス・レーンコートとして解説を加へ、尙ほ甚しきは丸裸體になつて居る昔の駕籠舁の寫眞などを掲げてゐる有様である。このやうな次第であるから隨つて米國人が概して日本を劣等視して居ると言ふことであつた。誠に歎かましい次第である。

下

日本人は口辭のやうに外國人に對して彼等の認識不足を云々するけれども、翻つて考ふるに日本人も亦外國人に對し認識の缺けて居る點がある。換言すれば日本人は外國人を買ひ被つて居る。日本人は自分が外國の事は比較的よく知つて居るので、外國人も亦自分程度に日本のことを知るものと思つて居るが、これが大なる間違ひである。外交家、新聞記者、學者、貿易商その他二三を除くの外、一般の外國人等は案外日本に關しては無智であつて、日本人が彼等を知つて居る十分の一だも日本を知らないのである。飯塚金作氏が過日ガイド座談會で漏らされた一話の如きはその最も適切な例證である。氏は曰く、

「四五年前米國のホテル經營者二十餘人を日本に招いた。その中でロサンゼルスのアムバサダー・ホテルの支配人フランク氏は帝國ホテルに一週間滞在して居た。フランク氏は余に向つて告白して言ふ、お耻かしい話ですが良心が咎めるから白状しますが、私は日本に來る時ピストルとジョージ・ワシントン珈琲を持つて來ました。ジョージ・ワシントン珈琲と言ふのは、湯に入れば直ぐに飲用珈琲になるハイキング用のものなのです。之を態々用意して持つて來た處が、帝國ホテルが作る珈琲は之より一層美味なんです。ピストルに至つては餘り氣まりが

悪いからトランクの底へ奥深くソット隠してしまひました。自分はこれまで日本に對する認識を全く誤つて居たことを深く悟りましたから、今後大いに日本の爲に宣傳につとめよう、と懺悔したとのことである。日本とは對岸のロサンゼルスのホテルの支配人にしてすら此の如し他は類推すべし云々、と話された。だから彼等をして額面通りに日本を買はしめ、實力通りに日本を評價せしめんが爲めには日本は自ら進んで日本の實力や、その發達の現状を盛んに宣傳しなくてはならぬ。恰も亞細亞の東端に日本屋と言ふ新店が開かれた場合に於ては、三越や大丸の如き老舗の英佛等と競争せんが爲に大々的に廣告するの必要あると同じことである。

見よ、歐洲諸國は新聞や雑誌や書物などに依つて、その國々の事情は中南米諸國には既によく知られて居るのみならず、歐洲から中南米に移住したものの中には、今や政界、財界、社交界に頭角を現せるものも少くないので、彼等は自國に有利のやうに隨時宣傳して居るのであるから、此の上、宣傳などする必要は無さうに思はれるが、事は全く反對に、歐洲諸國は今尙ほ中南米諸國に向つて盛んに宣傳して、何事についても自國を有利に導かんが爲に孜孜として努めて居るのである。私があちらに居つた間にも、スペインからは、曾て國際聯盟理事會で日本に不快な言説をなした彼のマダリアガ氏、フランスからは文學作家兼批評家として廣く知られて居るダニエル・レヴィ氏、イギリスからはロールド・マクミラン氏が宣傳に来て居た。特に驚いたのはエチオピアと戦争最中で他を顧みるに暇なしとさへ思はるるイタリヤがこれ亦

頻りに中南米に於て宣傳に努力して居ることであつた。

然るに日本は？ それほど必要な宣傳を全く閉却して居たのである。されば日本移民十八萬と言はれて居るブラジル・サンパウロに於てすら、「日本には電車があるか、電燈があるか」などと奇問を發せらるる程、日本の事情は外國に知られて居ないのである。況んや日本は歐洲諸國と較ぶれば言語文章の全く異なること、日本に關する印刷物の少なきこと、特に外國の社交界に出入して日本を宣傳し得る人士の絶無なる等、幾多の弱點、弱味、ハンデ・キャップを有するのであるから、日本は人一倍宣傳をせねばならなかつたのに、それが全く反對であつたが爲に、中南米に於て非常な損失をして居る。先年ブラジルに於ける日本移民排斥法案の通過、その他、中南米に於ける日本商品に對する不當なる割當、最高關稅の課賦、妨害、壓迫等日本の受くる損害は實に枚擧に遑あらずである。豈ただ額面以下に評價せらるるのみならんや。

今や「宣傳は紙製の彈丸なり」と呼ばるる時代である。日本は速かに從來の姑息な態度を改めて、盛んに世界の宣傳戦に乗り出して列強諸國に負けぬやうに奮闘せんことを私は此の際大聲疾呼して勸告せんと欲するものである。(昭和十一年四月七日「時事新報」)

公衆道德の相違

—

汽車、汽船、自動車、飛行機、飛行船、電信、電話、ラヂオ、テレヴィジョン等々の交通通信機關が近年大いに發達したお蔭で、世界が頗る縮小した。その結果、日本と外國との交通は日に増し頻繁を加へ、外國からの觀光客は年々歳々増加するばかりである。その上來る昭和十五年には神武天皇御即位紀元二千六百年奉祝大祭が行なはれるので、その機會に於て東京と横濱に萬國大博覽會が開かれ、オリンピック大會も其際また東京で催されるとの事である。さてその時は幾十萬の觀光客が世界の東西南北から我も我もと日本目掛けて押寄せ來る雜鬧は大變なものであらうと想像される。

その際日本はこれが接待等に關して有形無形の設備と用意を完整し、外國人に十分な満足を與へると同時に、一方には彼等外國人をしてさすがに日本人は教養の行届いた國民であること

を知らしむること、換言すれば、日本人は平素東洋の君子國を以て自任し自稱して居るだけであつて、名實共に一等國だ、實に見上げた國民だとの尊敬の念を起さしめ、以て國威發揚の一端に資すべきである。若し又それ程ではないにしても、尠くとも彼等外國人をしてこの日本を、自餘の東洋諸國と同視して、未開國だの半野蠻國だのと輕侮せしめぬやうに努めねばならぬ。されば觀光局や内務省、警視廳あたりでは昨今既にその準備に著手されたと言ふことであるが洵に機宜を得た事である。

處が、東洋と西洋とは各種の事物に就て古來からの風習が異つて居るので、自然その間に衝突を起し、牴牾し扞格するものがある。碎いて言へば日本の在來の習慣では、そんなに悪いことだとは思はぬことを、西洋の方では無作法だ失禮だと思ふやうなことが少くない。例へば日本では食後に小楊枝をつかふことは咎め立てされる程に悪いこととは思はれて居ないのに、西洋では之を失禮だ、不作法だとして擯斥する如きがそれである。これ等は千百中のほんの僅かな一例に過ぎぬ。

だから成るべくその扞格を和げるが爲には、外國人は日本人の公衆道德即ち社會的作法、公共的行儀に關して如何に觀て居るかを知り、且つ出來ることならば彼我を折衷することが最も捷徑な方法ではあるまいかと思はれる。

そこで参考の爲にこれ等に關する外國人の觀察や批評を左に書いて見る。

一昨年日本に來遊したフランスの婦人記者アンドレー・ヴィオリスの新著『ル・ジャポン・インチーム』即ち『内面の日本』中に書かれてゐる批評は、實に痛烈辛辣を極めた皮肉なもので、最初一讀した際には日本人ならば誰も立腹を禁じ得ざる程のものである。併し靜かに考へて見ると、その非難は一々急處に當つて居るので、まんざら悪口ばかりでも無いやうな氣もして、良薬口に苦しの感なきにしも非ざるのみならず、慥かに他山の石たる價値は十分にあると思はれる。で、先づ劈頭に之を抄譯して紹介する。

その大意左の如し。

「私は公衆道德の講釋をするものではありませんが、歐羅巴では他人の迷惑になることはどんなことでも爲ないやうにすることが社會道德の原則であり、基調であります。そのみならず一寸したサーピス、少しの骨折で、他人を喜ばすことが出来たり、そしてそれが世の中を明朗にして、我々の生活を愉快にすることならば、努めてさうするやうにいたします。日本では禮儀作法が口やかましく言はれて居るにも拘はらず、實際に於てはこの點歐洲人よりも思ひ遣りが足りないやうに思ひます。

近い話が、今度の旅行中、勿論偶然ですが、二度も三度も、私の船室は日本人の船室の隣りでありました。ですから毎朝毎晩、無遠慮に大きな音を立てて咽喉をガアガア鳴らしたり、ベツベツと唾液を吐き出したりするの手に取るやうに聞かされて、實に不愉快千萬、全く閉口しました。

運の悪いことは、この帝國ホテルでも、隣室がまた日本人のお客でしたので、またも毎朝毎晩咽喉の練習で、ガラガラガアガア。痰を吐く音はハツ、ベツベ。おまけに一種特別の腹鳴りの響(アノ、瓦斯發散のこと譯者附記)さへ聞えるのです！ ホテルを私宅とでも心得違ひして居るのかしらと思はれます。(と最初からこの調子で、以下益々辛辣になる。譯者附記)

汽車電車の中や停車場の待合室などはそれ以上なのです。多勢の人前で恰も咽喉科醫の施術を受ける患者のやうに、口中の奥の奥まで見えるやうな大きな口を開けて(丁度齒科醫の競技展覽會と言はんばかりに、入齒だらけの)口を開けてガアツと大きく咽喉を鳴らして床板の上へ痰を吐くのです。しかも痰壺はそこに備へ付けてあるのに、その中へは吐かずに、床板の上へ吐き出すのです。これ等の人達は公共運輸機關の床板と地べたとの區別を知らないのでせうか？そんな人達でも、まさか、お内では疊の上へ痰を吐くことはしなからうと思はれますが。

食堂ではスープを吸ふ時に必ず嫌な音をさせたり、食物を嚙む時にはガリガリと音を立てるので、隣席者の不愉快さはお察し下さい。これでは、折角進みかけた食欲も退却せざるを得ま

せん。中には茶を飲みながら、それで口をすすぐ者さへあるのです。全く呆れたものです。

若しそれ他の料理店などに行きますと、襖一重の隣室や特別買切りの部屋などから流れ来る千差萬別の奇妙な音響が我々歐羅巴人の耳へ傳はつて来るのです。それでも、マアあのいやな音響（アノ瓦散發散ノコト）が聞えないのが、勿怪の仕合せです。あれは東洋では、まさか、獎勵はされない迄も、兎に角許されて居ることですが、デリケートな西洋の作法では嚴禁してあるのです。（譯者附記、まさか料理店でアノ瓦散發散をする日本人などは無からうと思はれるが、一茶の句に「親子して尻くらべすなり夕涼み」とあることなどを聞きかじつて、著者は斯く書きたるならん、何にしても、外國との交通頻繁な今の世の中、油斷の出來ぬことかな呵々）

その他、驚いたことには、歐羅巴へ行つて來たことのある人ですら、日本では平氣で、人前で小楊枝を使ふのです。これは日本の習慣だと申すことですが、我々から見れば、餘り氣持のよいものではありません。で、歐羅巴では人前では使はぬこととなつて居ります」（譯者言ふ。これ亦東洋と西洋との風俗習慣の異なる一例なり。東洋では小楊枝の使用を禁ぜざるのみならず、寧ろ之を獎勵す、例へば四分律には、楊枝を嚼まざる五過失をあげて、「一には口氣臭し、二には善く味を分たず、三には熱瘴病消えず、四には食を引かず、五には眼明かならず」とあり、その他、十誦律、三千威儀等の書にも楊枝を嚼むの利を説けり）

著者アンドレー・ヴィオリスは續けて言ふ「勿論、私も各國皆それぞれの習慣があることはよく存じて居ります。だから日本人がその從來の習慣に従つて行動することを咎めようとする

のではありませんが、併し考へて見ますと、國際間には國際禮儀とでも申すやうな、ある一種の約束が隱然成立して居るのです。だからこの國際禮儀に外れたやうな行動をする國は、自然他國人の嫌惡を招き、従つて侮蔑せられることを免かれませぬ。例へば右往左往と賑ふ銀座の人道で足を踏まれたり、肩で押されたり、肘で小突かれたり、しかも（御免なさい）の挨拶を聞くことなく、又は電車や乗合自動車の中で無作法に貴下を押しつけて、あなたの場處へ腰かけた人があつた場合には、屹度あなたは嫌惡な人達だと思ひになりませう。處がそれが東京では普通に行はれて居るやうに見うけます。

だからその國の習慣だからとて、國際禮儀に外れた事はしないやうにすることが文明國民には當然なことなのです。日本の人達は、ひよつとすると知らないのかも知れませんが、日本人のそれ等の行動が如何に我々歐羅巴人を嫌惡がらせ、立腹させ、そして日本を輕侮せしむることとせう。

特に日本へ來る外國人に最も不愉快な印象を與へるものは、日本の男達が婦人に對する態度です。ともすれば我々歐羅巴やアメリカの婦人は甘やかされ過ぎて居るのかも知れませんが、兎に角、日本に於ては外國生活の經驗ある極めて少しの例外を除くの外、十中八九の人達の頭



の中には、凡て婦人はか弱いものだから扶けてやらねばならぬものだと言ふ考へが微塵もないやうに見受けられます。例へば婦人が自動車から降りる時には、その手を取つて扶けてやるか、又はその携帯品を持つてやるか、又は婦人の歩調が遅いならばそれを待つて居てやるか、或は人込みの中を通過する際には之を扶けてやるか、ほんの少しばかりの思ひ遣り——サービスだの、骨折りだの、作法だの、義侠だのと呼ばれる程のものではなくて——只だ弱い者を助けると言ふ人間自然の感情の發露に過ぎざる、この少しばかりの心遣ひを婦人に對して拂ふ人の少ないのが何よりも我々外國人には嫌であり、不愉快であるのです。歐米諸國では大きな荷物を負うたり、子供を抱いたりして居る婦人が電車の中で立ちん坊をしたり、吊革にぶら下がつて居るのに、屈強な若い男が恬然として平氣で腰掛けて坐つて居るなどと言ふことは、絶對に見られない圖であります」と滔々と敍し來つて、さてその結句に於て著者は極めて皮肉に、

「オヤ忘れて居ました。日本に於ては女風情なんか勘定の中には入れられて居ないのだと言ふことでしたね」云々。

このやうな辛辣な調子で尙ほ幾べ一ちを埋めて居るのであるが、私に與へられた紙數は今や盡くるに垂々とするので、之を詳譯することは不可能である。依つて著者が外國人の嫌惡するものとして絮説せるものに就てその要點のみを左に摘記する。

三

- (一) 列車内に入つて見ると、同乗の客の迷惑などには少しも頓著なく、無遠慮に、不作法に、大の字形になつて手足を廣げて居る人、又は背廣服を脱ぎ、カラを外し、ツボン吊りを取り、シャツの釦まで外して、米飯を以て便々たる大きな腹を露出して居る人、後から來る人の迷惑など少しも考へずに、吊り棚を獨占して種々な物を亂雑に載せる人、履を脱いでスリツパに履き換る人がある。(歐米の作法ではスリツパは寢室以外では決して履かぬものとしてある)
- (二) 同乗の人達の意向など少しも顧慮せずして、車窓を開閉する人、やがて車内の床板上は、罐詰の空き殻や、餅菓子、西洋菓子の包紙や、蜜柑やバナナの皮で一杯になる。
- (三) 多くの子供は列車内を駆け廻る。やんやと噪ぐ。色々な音のする樂器の玩具を吹き立てる。叩き立てる。喧噪言はん方なしである。側に居る兩親は少しも之を制止しない。その上これ等の子供はボンボンやカラメルを無暗に食ふ。菓子の空き箱や包紙をあたりに投げ散らす。汚ない手を以て他の乗客の膝の上などに無遠慮に觸はる、實に躰の悪い子供達だ、學校の先生方は一たい何を教へて居るのか。
- (四) 日曜日や祝祭日に於ける公園その他の場所にピクニックする生徒、學生等の辨當や菓

子や、果物やの包紙、竹の皮、紙函、木函の澤山な散亂！ 人の見て居る處で平気で小便をする者さへある。實に驚かざるを得ぬと述べて居る。（言ふ者罪なく、聞く者戒しむるに足るに非ずや。）

この他、外國人の書いた日本旅行記には左のことが書いてある。序でながら附記する。

日本人は列車内や電車の中で大聲で話すこと、並に婦人が車内で乳を露出して子供に乳を與ふること。宴會の招請に承諾して置きながら、その當日断りもせず不參することなどを擧げて居る。最後に、外國から來た音楽家や歌手の演奏に於ける日本の聴衆は餘りに冷淡、靜寂に過ぎて、往々演奏者を失望せしめる。當然拍手喝采のあつて然るべき處を黙過されるので演奏者は却つて日本人の音楽に對する理解力を疑ふことさへある程だ。だから今少し熱を持つて聽いて貰ひたいなどと書いたものもある。

以上の諸件は皆外國人から日本へ向つての注文と見て差支へない。されば出来るだけ外客をして我國に對し好感を持ち、良い印象を與へんが爲には、その注文に應ずるやうにした方がよくはあるまいか。特に日本精神を履き違へて、外人に高慢な態度を以て對する如きは非常な心得違ひである。相當の敬意を拂ひ、出来るだけ親切に取り扱ふことが寧ろ大國民たるの氣位とその襟度に相應はしいことである。

特に外國人だからとて彼我の間に懸け隔てを置かず、氣輕に打解けた態度を以て隔意なく談

話するやうにしたいものである。外客に對して一般民衆がかうした態度で出来るだけ好感を與へるやうに努めなければ、國際觀光局などで、いくらホテルを改築したり、内務省が國立公園などを拵へても、對外的な効果はあまり期待することが出来ぬであらう。

外國人から見た日本及日本人

—

昨年九月文化使節としてブラジルのサンパウロに滞在中のある日、舊知のブラジル新聞記者中の錚々たる人物六七名と同地の邦字新聞記者の中堅五六名を招待して、ホテルの一室で「無遠慮座談會」と言ふのを催した。その主意は日本人側のブラジル人に要望すること、並にブラジル人等の日本及び日本人に対する感想を少しの遠慮なく、腹の奥底までざつぐばらんに打まけて話し合つて見よう。そしてその座談會中に、或はお互ひの批評や諷刺が稍々辛辣な皮肉に互つても、少しも氣にかけつこなしと言ふ取極めであつたので、實に愉快であり、面白くもあり、又頗る有益でもあつた。

そこで先づ、ブラジル記者が日本及日本人に加へた批評に就いて、警奇と思はるるもの二つ三つを書いて見る。

—

日本が外國に於て排斥せられるのは自業自得であると言ふのがその一つ。

一寸、その前に一言斷つて置かねばならぬことがある。ブラジル人は、いづれもが、生來の雄辯家で、『豎て板に水』の概を以て滔々數千言、しかもそれが美辭麗句の珠數繋ぎであるばかりでなく、その音聲の抑揚頓挫、その調子の緩急高低が、十數名のこの座談會に適應しく、演説會や講演會のやうに角立たず、同時にまた二三友人の閑談のやうでもなく、如何にも當意即妙で、肩が凝らずに、話が判り、お刺さに、聴く者をして恍惚たらしむるものである。この點に至ると、日本の座談會などは、遠くその足元にも及ばない。日本の雄辯術などはまだまだ磨きが足らぬ、開拓すべき餘地が十二分にあると深く感じさせられた。だから、左に記述するものは、ほんの僅かにその主意だけであることを御承知願ひたい。

さてブラジル記者は言ふ。

日本人の外國發展の跡を見るに、到る處皆龍頭蛇尾である。その初頭に於ては外國人から大いに歓迎せられ、この分ならば將來必ず發展するなるべしと囑望せられるが、やうやく少しの根據が出来て、これから本當の發展を爲さんとする時機に至ると、必ずや手ひどい排斥に遭つ

て、俄然頓挫を來すのである。之を事實に徴するに、北米然り、カナダ然り、秘露然り、伯國に於ても亦然りである。直言せば海外に於ける日本人にはどうやら排斥は付きもののやうに見える。排斥される處で成功する筈がない。だから日本人は今の内に大いに反省すべき必要がある。日本人自身は或は氣が附かないで、所謂無意識でやつて居るのかも知れないが、日本人は自國に於て外國人を排斥するのみならず、外國に來て居てすらも、尙ほ外國人を排斥して居る。約言せば日本人自身が他を排斥するから、自分も亦他から排斥せられるので、言はば自業自得である。

今私は（伯國記者が言ふのである）日本人は日本に於て外國人を排斥して居ると言つたが、その排斥と言ふ言葉は或は稍々表現が強過ぎる嫌ひがあるかも知れないが、よしや排斥と言ふ程ではないにしても、日本人の心の一隅には外國人を嫌つてゐるあるもの存在することが我我には看取される。極言せば日本人は排外的精神を持つて行動して居る。これが日本人の海外に於て排斥せらるる弊根であり、病源である。日本人が外國で發展しようと思ふならば、この排外的精神、換言せば攘夷的精神を心の底から追拂つて、すつかり洗ひ清めて掛からねば駄目だ。

この攘夷的精神は八十年前の日本開國當時にあつては或は必要があつたのかも知れないが、今は時代が異なり、時勢が違ふ。然るに今尙之を墨守するが如きは實に時代錯誤も甚だしいと

言はねばならぬ。況んや今日の如く國際關係が飛躍的に密接の度を加へ、しかも日本がその政策として鎖國攘夷とは正反對に、先づ滿洲を門戸として積極的に世界進出を企てつつある時勢であるのに、ブラジルに來て居る日本人がそれと反對な行動に出づるなどは、深く日本人の爲に惜しむ處である云々と滔々と辯じ來つて、尙彼記者は續けて言ふのである。

日本移民は今やブラジルに十八萬人の多きに達して居るが、その内にブラジル語を話し、ブラジル人と交際し、ブラジルの風俗習慣に従つて生活するものが幾人居るか？ 絶無と言ふにはあらざるも、十指を屈して數ふことが出来る程少數である。この少數を除くの外は、ろくに話さへ出来ないのだから、意思の疏通などは絶無である。だから誤解となり、衝突となり、猜疑となり、果ては排斥となるのは當然だ。

三

その外、一昨年か、昨年のことと思ふが、日本から二三百名の學生移民がアマゾンへ出發するに際し、海軍省とか參謀本部とかへ、暇乞の爲（外務省とか、拓務省ならまだしも）隊列を組んで出頭した時、その大臣とか次長とかが、その學生移民に向つて「諸君はブラジルへ行つて、アマゾンの一角に將來大和民族の發展の根據を造る爲の一大使命を有するものだ、行け青

年諸氏よ、行つて彼の地に一つの日本村を建設せよ」と激勵したと言ふ話であるが、これが若し事實としたならば、ブラジル人には實に不愉快至極な話ではないか。考へても見なさい。若し支那や露國の學生移民が二三百人日本に向つて出發する時に、支那又は露國の陸海軍の大員が、日本に將來支那民族（又はスラブ民族）發展の根據地を造れと激勵したとしたならば、日本人はどんな氣持がするか……云々と。

實に痛い處を遠慮なく述べたて、その外、

日本は世界の一等國などと自任して居るやうであるが、世界の列國はまだまだ日本を一等國とは見て居ないやうだ。高が日本も矢張りアジア中の一國ではないか、されば支那や暹羅や印度と似たものだ。二三十年以來、擡頭したとは言ふものの、アジアは非文明國、半野蠻國と言ふ先入主の僻見が歐米人の腦裡にこびり付いて居る限り、新店の悲しさ、日本の信用と尊敬の程度は英佛獨伊の舊鋪とはとても比較にならぬところであると随分無遠慮にやつつけた。

特に近頃日本は獨りよがりの、世間見すで、増長慢に罹つて居ることなどを痛烈に批評したものである。頗る傾聴するに足るものがあつたが、餘り長くなつたから、それは次の機會に於て述べることにする。（昭和十一年四月號『雄辯』）

日本の躍進は奇蹟に非ず

他國とは育ちが違ふ

日本商品の世界進出は今や世界に異常な衝動を與へて各國をして悲鳴を擧げしめ、曾てはソシヤール・ダンピングなどと云ふ新語までを造り出し、その假想的威力で、日本を取つちめてやらうなどと意氣込んだ程であつたが、國際労働局長フェルナン・モレット氏が先年日本各地の工場を視察して歸つてからの報告で、

「ソシヤール・ダンピングとは労働者の生活條件を悪くすることを願はずして、生産費を切り下げ、かくして自國品輸出の機會を増加することだ……。そこでソシヤール・ダンピングを以て上の如く解釋すれば、余の視察した日本の輸出向き工業会社に於てはソシヤール・ダンピングは斷じて存在しないことを確言し得るのである。且つ新しい輸出向きの日本の大工業社會に於ては、労働條件は實に最高の水準に達してゐるので、日本の輸出の盛況は圓の下落によると同

時に經營及び技術の合理化に負ふことが多大である」云々と喝破して以來、各國はぐうの音も出なくなつたのは痛快至極である。

物は成るの日に成るに非ずであつて、日本人が生絲や絹織物に就て今日世界第一の地位を占むるに至つたことには深い原因があるのだ。その因由をも究めずして、僅か八十年の新興日本の産業がその先進たる歐洲産業の勢力を覆へすに至つたなどと言ふことは、不思議だ、奇怪だ、怪しからん、これは一種の謎だ、奇蹟だ、驚異だなどと誣ふるに至つては、我等は寧ろこれを言ふものの方の餘りに日本を知らざるに驚かざるを得ない。日本は養蠶、製絲、絹織物に取つては西洋よりもずっと古い傳統と經驗を持つて居るのである。彼等はそれを少しも知らないらしい。そこで今、その梗概を話して彼等の蒙を啓いてやるも亦一興たるを失はずだ。

さて、それには勢ひ、支那の蠶業や絹のことを話さねばならぬ。何故ならば日本はその昔これを支那から傳習したのであるから。

支那は古代に於て哲學や文學の國であつたばかりでなく、また科學の國であつた。科學は必ずしも歐洲の特産物ではない。あべこべに歐洲は科學上の知識を寧ろ東洋から教はつたのである。古代發達した支那科學の例を擧げて見れば、天文、數學、鍊金術、醫學、製紙、火藥、羅針器、活版、印刷等これ皆支那に於ては歐羅巴に先立つて發明せられたものである。そしてこれ等のものに就て、歐洲は支那に學んだものが少くないのだ。

科學ばかりではない、支那は古代から農業が開け工業も亦進んで居て、とても歐洲などの及ぶ所でなかつたのである。特に養蠶、絹織物などの發達は當時世界第一であつた。これ等の科學や養蠶や製絲や絹織物の製法が、朝鮮を経て間接に、又は支那から直接に日本へ傳習されたのである。だから日本の絹織物は随分古い歴史を持つて居るのである。

素晴らしいその素性

今その疎枝大葉だけをざつと述べて見る。

神功皇后の元年（西曆二百〇一年）新羅王、絹八十艘を獻す。同じく同五年には葛城鹽津彦を使節として新羅王に送り織工を獲て還り之を大和にをくと、明かに我國史に出てゐる。下つて應神天皇の三十七年（西曆三〇六年）阿知使主を吳の國に遣はして織工を求めしめ給ひし處、吳王はやがて兄媛、弟媛、吳織、穴織の四人を奉つた。そこで吳織等は多勢の織工を率ゐて日本へ來たのである。吳織は即ちクレハトリ。穴織はアヤハトリであつて、この二人を祭つた社は攝津の國吳服の里にある。吳服の里と言ふのは兵庫縣豐能郡池田町が即ちそれである。この地の舊名を吳羽の里と言ひ、この村に吳織神社、穴織神社がある。かの有名な謡曲の「吳服」はこのことを作つたものだ。私は昭和十年四月二十六日此の社に參詣して社司馬場氏からその

縁起を詳しく承つて歸つた。池田町の附近には今尙當時の「染殿井」の跡や「絹掛松」の跡が残つて居る。

上代に於てはその家に屬する一定の職業は之を子々孫々に世襲した。そしてその職業の名又はその住居する地名を以てその家の氏としたものである。即ち朝廷に仕へて弓を削く職業の部類に屬する者は弓削氏を名乗り、玉を造る部が玉造氏と稱した。その他、佐伯氏や大伴氏の人達が専ら武器を掌つて居たので物部と呼ばれて、それが職業であり同時に氏となつた。武器即ち刀劍類を今日でも「物の具執つて」などと言ふのが即ちこれから來て居るので、これ等の物の具を掌る武人即ち軍人を物部と呼んだ、その結果武士を「ものものふ」と言ふやうになつたのはこの「物の部」の轉訛だと言ふことである。

これと同じく呉織、穴織は機を織るのが職業であつたので、それが遂に「ハタオリ」と言ふ氏となり、それが衣服類を掌る服部に屬して居る爲文字は服部と書いて、之を「ハツトリ」と讀むやうになつた。ハツトリは機織の轉訛であることは言ふ迄もないことである。だから銀座の服部時計店などは遠く溯つて系圖調べをしたならば、その先祖は慥かに時計屋ではなくて呉服類を賣捌くのが世襲の家業であつたのかも知れない。

服部即ち機織の元祖が呉の國から日本へ渡つて來たが爲に、その後織物類は皆總稱して呉服と呼び、その商人を呉服商と言ふやうになつて、今日でも尙少なからず呉服太物類などと書い

た看板を見る。その起原は遠く應神天皇時代から來てゐるのである。

以上述べた如く呉織、穴織が日本へ來てから今日迄實に一千六百二十五年を経てゐる。その後、舒明天皇の二年（西曆六百三十年）に初めて遣唐使として犬上御田歙を支那に遣はされて以來、宇多天皇の寛平六年（西曆八百九十四年）遣唐使を廢止せらる迄二百六十四年間續いた。その間前後數十回遣唐使や支那留學生が派遣せられたのである。そしてこれ等の遣唐使が歸朝する時には、いつも支那の使節や隨行者と共に日本に來たのである。その隨行者の中にはえらい學者や宗教家があり、それと同時に陶工、木工、織工、刺繍工などが加はつて居たのである。

このやうに長い年月の間、日本人は紡績や織物に就ては幾多の經驗を積み、種々の鍛鍊を経て居るのである。だから自然とその手先の器用なこと、その技倆の卓抜なることは既に第二の天性となつてゐる程だから、歐羅巴人などが遠く之に及ばないことは至極當然なことである。第一あの歐羅巴人のソーセージみたいな太い、無器用な指をして居ては、とても鮮かな手際など望めるわけのものではない。それは丁度芋蟲に向つて藝當をしると強ひるやうなものである。

そこで我國の貿易を見ると、輸出の大宗は生絲、絹、人絹織物であつて、昭和八年度の輸出額は生絲、絹織物が四億六千萬圓、綿織物が三億八千萬圓、人絹織物八千萬圓である。その中でも生絲は我國最大の特産物であつて、世界總産額の約四分の三に當る七千四百萬斤を産し、

その内の四分の三を海外に輸出して居る。

蠶絲業は歐羅巴では伊太利、佛蘭西などに盛んに行はれたものだが、近年佛蘭西などは自國の需要すら満すことが出来ないで、昨年は日本生絲だけでも千五百萬圓から輸入した筈だ。蠶絲國として聊か體裁を具へて居るのは僅かに伊太利一國だが、その産額はやうやう日本の六分の一だ。日本の蠶業の先生株の支那ですら日本の三分の一にも足らぬ。世界供給の大部分は殆んど日本一國で背負つて居るのだ。偉なりと言はざるべけんやである。

だから自然また人絹でも遠からず世界一になるであらう。假令今は米國に次いで日本は第二位にあるにしても。

英語のシルクは

絹のことを英語でシルクと言ふのは羅甸語の「セリク」の轉訛である。そしてその羅甸語の「セリク」は支那西域の地名「疏勒」の轉訛なのである。

古代支那から羅馬へ絹が輸出せらるるに當り、必ずこの疏勒の地を経て出たものである。疏勒から支那の國外に出る絹のことを羅馬人が「セリク」と呼んだのは、恰もジャワから來た芋を我々がジャガ芋（ジャワ芋の轉訛）と言ひ、ボブラ（南瓜）が「カンボヂヤ」から渡つたの

で「カボヂヤ」と言ふのと同じことである。

そしてその疏勒のことは『漢書』九十六卷西域傳第六十六の末段に出てゐるから、今その原文を直譯和讀して左に掲げる。

「疏勒國王は疏勒城を治む。長安を去る九千三百哩。戶數千五百一十。人口萬八千六百四十七、勝兵二千人。疏勒侯、擊胡侯、輔國侯、都尉、左右將、左右騎君、左右譯長各一人。東の方都護の治所に至る二千二百一十里。南の方莎車に至る。五百六十里に市あり、西の方大月氏（國名）大宛、康居の道に當る也」

と出て居る。『漢書』の著者班固が獄死したのは漢の章帝の永元四年（我景行天皇二十二年、西曆九十二年）だから、さつと今から一千九百年前の疏勒は上記の如くであつたのだ。この疏勒は漢時代及び唐代の地圖にも明かに記載されてある。當時天山南路より西南ペルシャ、羅馬への唯一の通路であつたと言ふことである。

古代羅馬のことを支那の本などには「大秦」と言つてゐるのは蓋し Dacia（ダシヤ）の音譯である。今日のルーマニヤに於ける原住民はダシヤ人と呼ばれて居たのであるから、之を音譯したのが即ち「大秦」である。（註、ルーマニヤは羅馬帝トラジヤンの時、羅馬人をダニユーブ河北に移植して北狄の侵入を防いだ。その移植民が國を成したのが今日のルーマニヤである。だから今日でも尙ルーマニヤ人は自國をローマニヤと呼んで居る。羅馬人の住む場所の義であ

る)

史に依るに漢の武帝が張騫をして西域に使せしめたのが西曆紀元前一百二十二年であつて、西域の方から漢へ使を送つたのが紀元前一百十五年である。當時羅馬はまだポンペイやセザルの生れない前のことであるが、この時既に支那の文化は高度の發達を示して居た。當時支那の絹は羅馬人から非常に喜ばれ、珍重せられたもので、「セリク」(疏勒)と言ふ言葉が羅馬へ入つたのは紀元前二二一年頃であると言はれて居る。元來西域と言ふ言葉に廣狹の二義があつて、狭きは今の新疆地方の呼名であるが、廣義には天山南北路から南西のベルシャ、希臘、羅馬をもさす場合がある。

當時にあつては絹は羅馬人から尊重せられたのみならず、その製造元の支那でさへ非常に尊重されたものであつた。支那の雜書に支那が絹を西域即ち波斯、羅馬へ輸出することを許可した高、即ち分量は、胡姬即ち波斯や羅馬から支那に入貢する美人の身體の目方と同じ分量丈けに限られたものと記載されてある。當時絹を外國に出す分量の問題は、支那に取つては一大問題であつたとの事である。當時の胡姬即ち外國の美人は駱駝に乗つて來たものであるから、支那から絹を國外に出すに當つても同じくその駱駝に乗せて出したと言ひ傳へられて居る。これ等の傳説の眞偽は別として、兎に角、絹は頗る貴重なものであつたことが判るのである。そこで今「疏勒」即ちセリク(又はセレス)の名の現れて居る横文字の本の中で、確實な書

物としては、小亞細亞の地理學者ストラボン(紀元前六三——紀元二五)の地理書の如きがその一つである。この書物は紀元後第一世紀の初期に書かれたものであつて、アレキサンドル大王の覇業が破れた後、世界學術の淵藪であつたエジプトの首都アレキサンドリヤの學者達の業績を集大成したものの一つであるが、その本の第十五卷、第一章第二十五節並に第二十八節にセレスの名が現はれて居る。

これに依つて見ても、如何に支那の絹が古代から西域即ち希臘、羅馬に知られて居たかが窺はれるではないか。

支那の養蠶術の西漸

尙、東羅馬の有名な大帝ヂュスチニヤンは、五百二十七年に即位し、かの有名な羅馬法典を編纂し(五二九年に成る)廣く後世を益した皇帝であるが、その法典編纂事業と共に同皇帝のなされた有益な大事業と數へられてゐるものが即ち養蠶術の傳習であるとされてゐる。

西洋歴史によればヂュスチニヤン帝以前より歐羅巴には絹糸は有るには有つたが、その質も量も共に支那の絹糸に比すべくもなく、誠に劣悪なものであつたので、支那の絹糸が印度及び中央亞細亞を経て輸入せられた。處がヂュスチニヤン帝の世になつて、偶々二人のベルシャの

僧が支那の國境に布教し、蠶種を得て密かに之を竹杖の空洞中に藏めてコンスタンチノーブルに齎し歸つた。是に於て蠶種は容易に孵化し、その種が速かに繁殖して第一番に希臘で良好な絹糸が製出せられるやうになつた。その後久しく中絶の形であつたが、その後六百年を経て、養蠶術がシンリ島に入り、次いで伊太利、及び佛蘭西に傳播し以て今日に至つたのであつて、その年代、經驗共に日尙ほ淺く、とても日本に比ぶべくもない。日本が養蠶や絹織物の技術に於ては世界第一たるいはれ因縁は、右の歴史に徴しても當然の結果であつて、謎でも、奇蹟でも、驚異でも何でもないことが判るのである。(昭和十年六月號「新青年」)

外國人の目に映ずる

日本の兵士と米國の兵士

一方、日本の方では米國老兵會答禮使節が四月二十四日に東京へ著いたので、頻りに日米親善を説き、この兩國間に戦争などの起る譯は無いと歡聲笑語、次いでお定りのシヤンパンの乾杯、時節柄誠に以つて春風駘蕩和煦暢快、太平洋はその名の如く、四海波靜かな外觀である。然るに皮肉にも米國の方では、時もあらうに同じく四月二十四日、下院海軍委員會は總計費一億七千五百萬ドルの補助艦五十四隻の建造案を提出することに一致したと報道せられ、かてて加へて、米國艦隊百五十隻は極秘裡に出動して、來る五月十九日より向う六週間、パナマ運河を中心に、壯烈なる攻防戦を展開するアメリカ海軍大演習が行はれる云々と、これ亦同じく四月廿四日の入電である。

兩國間に戦争の恐れなどありつこないならば何の爲の一億七千萬ドルの要求ぞ、何の爲の五十四隻の建艦ぞ、そして又何の爲のパナマ中心の海軍大演習ぞ、問ふだけ野暮たるを免かれ

ぬ。

併し國際關係は全く亂れて麻の如く、平和か戦争か、敵か味方か、喰ふか喰はれるか、且にして夕を測られざる現今にありては、油断は大敵、用心堅固に如くものなしであるから、米國の左手には平和、右手には戦備も、請ふ、見て矛盾となすこと勿れ。これこそ現代國際渡世の要訣ぞかし。

我輩とても今俄かに日米戦争があらうなどとは思はないが、さりとして絶対にないなどとは誰でも言ひ得ぬ處であらう。

されば氣早な外國人の中には太平洋問題の將來を想像したり、日米兩國兵士の氣構へを比較論評したりなどして居るものさへある。

そのうちで、維納知名の論客アントワヌ・ジツカ氏が自ら太平洋方面を視察踏査の上執筆した『世界に於ける日本』の中にのせられてゐる、布哇の防備に關することや、日米兩國海兵の比較談は一寸面白く、且つその表現が極めて警奇であり、唐突であり、短刀直入であり、スツパ拔であるのが特に興味があるから試みに左に抄譯して見る。

著者はその書の第八章に日米關係を詳述し、第九章に於て「アメリカのジブラルタルなるダイヤモンド・ヘッド」と言ふ小見出しの下に大要左の如く語つて居る。

日本とアメリカとの間に於ける寄港地としては唯一つの布哇があるだけである。日本の最新型の水雷艇十二隻を除くの外、如何なる軍艦でも、その途中で燃料を中繼したり食糧を補充することなしには、彼の漫々たる太平洋を乗り切つて、そして再び元の出發點まで戻つて來ることの出來るのはまだ無いのである。だから布哇群島はその重要なことは正にこれ太平洋上のジブラルタルとも言はるべきである。處がこの布哇がアメリカに屬して居るので、米國政府は此處を先途と堅めて居ることは至極尤もな次第である。

英國領のシンガポールとジブラルタルは、いやが上にも祕密主義で固められて居るが、それとは丁度反對に、この布哇は全く公開的である。その堅固な要塞、設備完全な軍港、廣大な飛行場、數多き水雷艇庫などを世界中の密偵どもに大つばらに見せてやつて、その敵國をして、これでは逆も齒が立たぬ、文字通り難攻不落、攻め取ることなどは絶対に出來ぬものだと言ひさせる爲の故に、アメリカ政府は態とこのやうに公開して居るのではないかしらとさへ人をして思はしめる位に開放的である。

だから筆者も、何の面倒な手續なしにその軍港眞珠港を視察することが出來た。

待機の姿勢でその出動を待ち構へてゐる百八十臺の飛行機。其側にある廣大な飛行機製造工場、（聞けば此の工場では最短期間に現在の二倍の新飛行機を製造する能力を有するとのこと

である。) 數へ切れぬ程の水雷艇。長さ三百五十メートルのコンクリートで固めた大船渠。この船渠へはドレッドノート型でも巡洋艦でも自由自在に出入し得るのである。

そこには又、世界のあらゆる方面に放送することが出来るラヂオ局の設備、陸戦隊一萬五千人を收容することの出来る兵舎、特にダイヤモンド・ヘッドにあるコンクリート造りの要塞は、優に拾四萬の兵を掩護するに足ると言はれて居る。

その外今やダイヤモンド・ヘッドに新要塞が建築工事中である。そしてこれは他の要塞とは全くその趣を異にして全然秘密主義であつて、ホノルルの知事さへも參觀許可状を發給することが出来ぬのみならず、海軍將校でも、艦長さへもそこへ立入ることは絶対に禁止されてゐるのである。

ダイヤモンド・ヘッドのこの建築中の要塞の偉力は、どんなに素晴らしいものかは、勿論筆者の知る處ではないが、不圖筆者の頭に一つの疑問が湧いて來た。若し日本が濠洲及び太平洋を奪略せんと企てた時には、これ等の要害は少しはなにかの役に立つのか知らずと。

布哇群島中、重要なオアフ島を距ること僅か百九哩の處にヒロと云ふ港があるし、ホノルルを距ることこれも僅か九十五哩の處にカウシ島がある。若し日本がいつもの通り疾風迅雷的の素早い動作に出るならば、これ等の港や島を奪つて、日本の海軍の根據地とするには、左まで骨が折れぬであらう。米國はその時にオアフの要塞を妨止することなどは逆も出来やしないこ

とだと思はれる。

しかのみならず布哇に於ける總人口は三十萬人であるが、その内十二萬五千人は日本人だと言ふのだから、たまつたものではない。しかもこの日本人は統制された組織の下に、日本學校や日本寺院を有し、その上、日本人を煽動するものも居るし、日本人に同情して居る富有な支那人も居るし、かてて加へて米國に不平を抱いて居る白人さへも居るのであるから、これを思へば米國もなかなか安心出来ぬ譯である。

處が、眞珠灣軍港では、そんなことを話すものなんか有りやしない。頗る天下太平である。飛行機は輪を描いて心地よさうに晴空に舞つて居る。四方の山々は十年前までは全く荒蕪地であつたのが、今では立派な鳳梨の畑に變つて居る。水雷艇は毎日此處で發射演習をして居る。數隻のドレッドノートは小型のゼベリンが撒布する人工的霧の中に包まれて見えない。

余はある日、知友なる高級士官に案内されて水雷艇の水雷發射練習の參觀に出掛けた。アメリカ人が今、布哇で用ゐてゐる水雷はその長さ十七尺あつて、鼠色で一吋葉巻煙草に似て居る。その後部は長さ五尺、瑞西製の掛時計見たやうな形であつて、一見した處では、これが恐ろしい殺人機だなどと思はれない。しかし、勿驚、これが一個十二萬フランもするのだ。

天氣の好い朝であつた。我々は飛行機で眞珠灣を出發した。太陽は銅色に輝いてゐる。高さ三メートルもある甘蔗の綺麗な畑は海岸一帯に波打つやうに見えてゐる。水雷艇庫のあるマガ

ジョン・アイスランドの附近には小舟に楫してゐる日本漁夫の姿が見えてゐる。フォード島あたりには軟かい小風がそよ吹いて居る。海は至極穏かであつた。やがて我々は、練習の場處へ著いた。

さて愈々魚形水雷の發射が始まつた。通常ならば水準以下十尺の處を走つて進行し、その目的の地點に達してから、更に再び浮び上るのである。處が今發射した強力な水雷は、照尺を誤つたものと見えて、發動機の全速力を以て泥の中へ突入してしまつた。サア大變だ。十二萬フランもするものを此儘に放擲して置く譯にはいかん。そこで潜水機を以つて先づその水雷を搜索し、それから引揚げに取り掛らねばならぬ段取になつた。

然るにアメリカの海軍では、海兵に對して水底に潜り込むことを強制的に命令することが出來ない。海兵の方から私がその海底作業に當りませうと進んで申し出る者を待つて居らねばならぬのである。その譯は布哇の近海には恐るべき鱈が澤山居ると、その上この邊の潮流が頗る危険であるからだと言ふのである。

アメリカの海兵は頗る元氣で、その體格も優秀、誂へ向きのスポーツマンであるし、臆病でもないことを余はよく知つて居るのである。しかし沈没した水雷（幾らそれが高價なものであつたにしても）を、命がけで掘り出すなどと言ふことは彼等の決して欲せざる處である。だから、我こそ水雷搜索の潜水作業に當らなどと申し出るものは只の一人もなかつた。

思へばそれも無理からぬことである。元々アメリカの海兵なるものは一の労働者に過ぎぬのである。普通の労働者よりは給金が高いからと言ふ唯一の理由で海兵になつたのである。故に少なからずブルジョワ臭味を帯びてゐる。だから自然海中へ潜り込むことなどは眞平御免と言ふことになるのだ。

しかし、ひよつとしたら或はその指揮に當つた中尉が彼等海兵の氣に入らぬのであつたかも知れぬし、或は又米國の海軍部に於ける反軍國主義者の宣傳が利いたのかも知れない。が、何はともあれ、いづれにしても、自から進んで水雷搜索に當らうなどと言ふものは絶無であつた。

水雷はその突入した場處に永久に残るであらう。十二萬フランの爲に大切な身體を水漬にしてたまるかと言ふのが彼等の言ひ分である。そして海兵等は營舎へ歸つて、オアフの綺麗な娘さん達と手を携へて散歩に出掛けるのである。

余はホテルへ歸つて、先づ新聞でもと、開けて見ると、ロンドン・デリー・エクスプレスに左の記事が載つて居た。

日本はその最近の發明に係る一の新戦闘機を試験する爲、獻身的、没我的勇氣ある兵士の募集を行つた。

その新戦闘機なるものは、聞く處によれば、普通の水雷艇に依つて發射せらるる水雷の一種

であるが、その中には一人の水先案内者に乗込ませて、その目的物に向つて驀地らに進んで行くのである。だから間違ひなく慥かに百發百中である。勿論その水先案内者は生命を犠牲にして掛かるので、自分も死ぬが、その代り必ず敵艦に命中すると言ふ仕掛けである。

この命がけの作業たることを承知しながら、四百人の募集に對して五千人以上の應募者があつた。その中選抜した四百人は既にその勤務を始めた、とあつた。

その後右の電報は正確な報道であつたことが證明された。一九三四年二月八名の日本士官がこの新兵器の試射の際に死んだと言ふ事實が擧つたので。

その後、余は日本に行つた時、函館に於ける水上飛行機の獻上式に參列して大いに感動させられた。その飛行機は函館に於ける一漁業會社の社員達が醸金して海軍省へ獻上したものであつた。そしてその社員達の月給は平均僅かに貳百三十八フラン（日本金凡そ四十圓）しか貰つて居ない人達である。

空閑少佐は上海附近の戦闘の際、重傷を負うて知覺を失つて居た時、支那人の捕虜となつた。休戦の後、保釋されたのであるが、少佐はたとひ無意識であつたにしても、日本士官たるものは敵軍の捕虜となるべきではないとして立派に自殺した。

その後、余はまた日本軍艦を參觀した。士官達の部屋の簡素なものには驚かされた。只だ粗末な木製の手摺付きの寢臺があるだけで、その他には何等の裝飾もないので、恰も監房と異なる

所なした。その食物もこれまた極めて質素なものである。大尉でさへその月給僅かに千フラン（日本金凡そ二百圓）に過ぎぬと言ふことである。しかもその僅かな月給の内から此等の士官達は屢々二三百フランを艦の修繕に獻納する事があると言ふことである。ある士官の話に、彼等の俸給は辛うじてその家族の生活を維持するに足るのみであるが、併し我々がその不自由を堪へ忍んで居るお蔭で、今年は三隻の軍艦を餘計に造ることが出来たのである云々。

米國の海兵と日本の水兵との意氣込みがこんなに懸絶して居るのを見た余は、ダイヤモンド・ヘッドの要塞が有事の際に役立つや否やを疑はざるを得ないのである。

余は今此處で、アメリカ海兵の水雷搜索の拒絶に就て、それが善いとか悪いとか、又は日本兵士の英雄的行動が人情に合ふとか合はぬとかを議論するものではない。只日米兩國兵士の有りの儘の姿を觀察して、若し戦争の起つた時に、どちらが勝つことのチャンスが多く持つて居るかを検討せんと欲するのである。

苦行を何とも思はぬ克己的英雄主義の日本人、國家の爲には啻に喜んでその生命を捧ぐるのみならず、一生涯愉樂を得ることなどを少しも顧慮せず、専ら國民たるの義務を盡すことをその生命とする日本人、凡ての個人的利益を平氣で集合的利益の犠牲に供する日本人、國家の名譽の爲には個人的野心を窒息せしめ、そして堅忍不拔の意思を持つて居る、この日本人の前に啻にダイヤモンド・ヘッドのみならず、マニラの如きも兩國間に事ある際には餘り役に立た

ないやうに余には思はれるのである云々と、この著者は莫迦に日本最眞に書き捲くつて居る。

(この書物が一九三四年巴里で發行された當時、歐羅巴の政界及び經濟界に大きなセンセーションを興へたことは同年十一月二十日の『ジヤパン・アドヴァタイザー』が詳細に紹介した程である。譯者附記) (昭和十一年六月號『文藝春秋』)

西洋と東洋との場合

フランスの作家アンドレ・ベルソール氏がその著『新日本』の中に「若い妻君が自分の夫は死んだことと確信して再婚し、その後突然前の夫が現はれた場合」に於ける西洋人の態度と日本人の態度とを比較して色々な例を擧げて居るのは一寸面白い、或は遼東豚かも知れないが茲に摘譯して紹介する。

西洋に於ては、社會的地位の如何に拘らず、妻君が何等の悪意なく全くある事情の爲の犠牲となつた場合には、前夫はその妻君を寛恕することが普通である。南部フランスの舊い俗諺に傳へられて居る水夫の話がその一例であるとして、左の如く語つてゐる。曰く、ある日若い妻君が、その家の前を通り掛つた破れた帽子に破れた靴の見すばらしい一人の男を、自分の前の夫とは思ひも寄らずに、只だ氣の毒な人だと思つて、内へ呼び入れて一杯の酒を恵んでやつた。處がその男の歌ひ聲が前の夫に餘りにもよく似て居ると言ふので、妻君が俄に泣き出した。するとその男は、杯を飲み乾して、一言の禮も言はずに、涙ながらにすゞ／＼と歸つて行つたと

言ふのがそれである。

次にフランスの小説の大家ル・サアジユはその著『ジール・ブラ』の中にこんなことを書いてゐる。貴公子のドン・アルヴァール・デ・メローはあこがれて居る前の妻君に突然再會した時、彼女に向つて、「私は貴女の幸福の爲ならば總てを犠牲といたします。私は私自身よりも貴女を愛して居ります。ですから今日此處でお目に掛つたのが、これが最後のお別れです。今後私は貴女から遠く離れて貴女に捧げた残餘の生命を一人淋しく送る心算です」と言つた。すると彼女は、「それはいやです。再び貴方とお別れすることはとても私には堪へ切れません、お願ひです、どうぞ貴方と一緒にどこへでも……今後われわれ二人を離し得るものは（死）より外にはありません」との答へ、そこでドン・アルヴァールは彼女を連れて逃げて行つた、と言ふ話。

次がテニソンの書いた有名な漁夫エノツク・アルデンの話である。

ある日の夕方、エノツクは前の妻君を見たさの餘りに、こつそり忍び足で小庭に潛入し、窓の外からある家の中をのぞいて見た。部屋は明るく輝いて、煖爐に燃えさかる火の光は、綺麗に拭かれた食卓に反射してゐる。そこにはエノツクの息子と娘も居るし、昔の戀の競争者であつたヒリツプは、煖爐の側に坐つて居る妻の側で、一人の小さな子供を抱いて、一家が皆んなここに團欒して居るのである。エノツクが今ではもう自分の妻ではないこの若い女とヒリツプ

との間に出来た生れたばかりの小さな子供と、そして今はあんなに綺麗になつた自分の娘と、あんなに丈夫さうに大きくなつた自分の息子とを見た時は、懐かしさ、可愛さがこみ上げて來たので、彼は聲を出さぬ爲に窓縁にしつかりしがみついてゐた。若し少しの聲でも漏らしたらそれこそ大變、ヒリツプの家庭の幸福はめちやめちやに破壊されるのである、だからその時エノツクは「どうぞ神様、私に勇氣をお授け下さい。彼女が私の生きてゐることを決して知らないやうにして下さい」と祈つた。

エノツクは遂にその犠牲となつて、その後間もなく死んでしまつた、と言ふのがその實話である。

處が英國詩人テニソンは之を材料として作詩するに當り、讀者に餘り悲壯な印象を與ふことを避くるが爲と、又そのエロイツクなエノツクをして極端まで英雄たらしめようとしなかつた。この點が甚だ英國人らしい。テニソンはエノツクをして死ぬ前に、自分は彼女の幸福の爲に總てを捧げたものと言ふことを、竊かに宿の女主人に向つて漏らさしめて居るのである。このやうに祕密を漏らして仕舞つては、エノツクの爲にエロイツクな効果を減却することは多大である。またその祕密が漏れたならば妻や子供達の幸福を永久に破壊して仕舞ふことをテニソンは考へなかつたのである。しかしテニソンに従へば、この祕密漏洩の爲に、全村擧つて彼に深く同情し、こんな孤村では曾て見たことのない程な盛大な葬儀が、彼の爲に行はれたと言

ふのであつて、言ひ換れば徳行に對する報酬は、あの世を待たず、既にこの世から現はれるものだと諷したのは甚だ面白い。

最後に出て来るのがフランスの漁夫マルテンの話である。これはモーパッサンが「歸還」と題して書いたヌーヴェルの一つである。この話は英雄的ではない。話の筋はかうである。

ある日マルテンが元の自分の家の回りを徘徊して居た。その妻と彼の娘とは、跛足を引いて歩いて居るのみすぼらしい老人を薄氣味悪く見て居た。後の夫なるレヴェスクは、この男を氣の毒に思つて内へ呼び入れて食事をさせた。そこで總てが暴露した。妻君は前垂れを顔に當てて泣き出した。思ひ掛けない此の出来事の爲に感動さへも閉塞されてしまつて、三人ともただ茫然呆氣に取られて居るばかりであつた。何等の腹立たしさも、何等の反感も起らなかつた。暫くするとレヴェスクが先づ口を開いて、「さてどうすればよいのかなア」と言ふと、マルテンは、「俺はお前の望み通りにすべし。俺はお前に少しでも迷惑はさせたくないのだ」と言つた。そこでレヴェスクが「では、どうだい、二人で坊様の所に行つて極めて貰はうぢやないか」と言つた。その譯は、坊様は總てのことを豫見する智者であるので、坊様の仰言ることなら社會的に動かすべからざるものと彼等は思ひ込んで居たのだから、彼等二人は坊様に相談せねばならぬものと感じたのである。そこで二人は出掛けた。家から出ると、二人は全く元通り仲の良い友達に立ち返つて仕舞つた。話しながら行く道すがら、昔馴染の酒屋の前に通りかかつた

時、「どうだい一杯やらうぢやないか」と二人はそこへ入つた。

モーパッサンは茲で筆を擱めて居るのである。

著者ベルソールは右の三つの場合を評して「私はドン・アルヴァール・デ・メローの男らしい態度に感心する。そしてエノック・アルデンの献身的態度にも賛成するが、しかし私はモーパッサンのマルテンに於て我々文明人の情味とその賢明さを最も深く感ずるものである」と語つてゐる。

さて今度は日本の話について、著者は左の如く書いて居る。

十八世紀の最も有名な小説家西鶴は日本のエノック・アルデン、日本のマルテンを我々に語つて聞かせる。

漁夫の久六の姿が見えなくなつたので、誰も彼も皆な久六は死んだものと思つて居た。そこで坊様の讀經やら、萬端型の如く葬式も済んだ。處が前に擧げた、ル・サアジュとテニソンの話のやうに、妻君はまだ若かつたので、側から頻りに再婚を勧められた。妻君は堅くこれを拒絶した、のみならず、彼女は頭を刺つて尼になり、全く浮世を棄てて、朝な夕な香花をその夫の紀念に捧げる決心であると言つた。しかし長い間、皆から頻りに勸告せらるるので、それに従はされて、つい同村の漁夫左兵衛を入夫として再婚した。妻君は盛装して結婚式は型の如く賑やかに行はれ、新夫婦は嬉しさうに新枕の鬨へはいつた。

ある朝、久六はその後久しく見ない妻に對する愛情を胸一ばいに満して、突然自分の家へ歸つて來た。晴々した太陽の光は南向きの窓から射し込んで寢部屋の様子が手に取るやうに見えた。妻の緑なす黒髪はふさふさとして前よりも一層美しくなつて居るので、久六は得意の鼻を蠢めかして「ヘン、俺が妻は村一番の美人だぞ」と心の中に獨語した。だが、それもほんの束の間、他の男がそこに居る姿を見るや、彼の夢ははかなく消し飛んでしまつた。それと同時に妻君は新婚の喜びから目覺めてワツとばかりに泣き出した。奎兵衛もまたきまりの悪さ！

西鶴が三人を邂逅せしむる爲に選んだこの場面は、前に擧げた歐羅巴の話の場合よりは、ヨリ一層突然であるから、自然前夫の情を激發せしむる性質のものである。だから久六が此の際憤怒に燃ゆるは尤ものことだと思はれる。況んや久六は以前から奎兵衛とは面白からぬ仲であつたのだから尙更である。

しかしこれだけではまだ日本人の性質や、その全體の面目がよく現はれて居るとは言へない。下に記するところが眼目である。

先づ久六が何とも不可解なと言ふ態度で「一體これはどうした事だ」と至極簡單に訊ねる。すると奎兵衛が一部始終を事細かに説明する。久六は平素の冷靜なまごつきを取り戻して、その話を靜かに聽いて居る。その時の久六の様子は小首を傾けて奎兵衛の話に聞き入り「ウン成る程」「さうだ」などと寧ろ友情をさへ示して居るかに見えた。やがて奎兵衛がその話を終ると、今度は

久六が「遠く隔たつた海の彼方で長い間の辛苦艱難を経て來た」次第を物語して聞かせた。さてその話が終ると、久六は落著き拂つて妻を刺殺し、次いで奎兵衛を斬り、その同じ刃で自ら腹かき切つて死んだ。

そして筆者の西鶴はその直ぐ後へ「身分賤しい漁夫風情のものが、何と言ふエロイックな、見事な最期であらう。天晴武士でもこれ以上には出來まい」と賞讃して居るのである。

と著者ベルソールは附け加へて、そしてこの自殺に關して左の如く附言してゐる。

日本の作家は歐羅巴の小説や戯曲を翻譯するに當つて自殺の場面を配合することがあるが、これは我々歐羅巴人の心理を全面的に覆すものである。日本人は自殺さへすればそれで残酷な所行も正當化され、總てが帳消しになるものやうに思ふらしいが、我々は決してさうは思はぬのである。我々は感情のあらゆる濃淡のニュアンスを滅却して仕舞ふ自殺は、單なる野蠻行為に過ぎぬと思ふのである。そしてどんなに禮儀が正しくあるにせよ、どんなに儀式が嚴格にあるにせよ、このやうな場合には、寛大な慈心に勝るものは有りはしないと書き添へて居る。

日本人の教養

三四年前日本に來たフランス翰林院アカデミーのブリュー氏が『日本視察』といふ本を書いた。なかなかよく日本の風俗習慣を観察し研究して、外國人の書いたこの種の書物の中では一種出色のものである。今その中で面白いと思はれるものを二三紹介して見よう。

ブリュー博士は「日本とヨーロッパの各階級をそれぞれ比べて見ると一般に日本人の方が進歩してゐる」といつてゐる。「例へば兩方の下層階級、馬方とか、車夫、運轉手などを比べて見ても、英佛等に比べて如何に日本人が禮儀作法が正しいかがわかる。余は京都に於て自轉車の衝突を目撃した。双方反對の方から勢よく走つて來る自轉車乗が、あはやと言ふ間に衝突して双方とも轉倒した。すると、双方が靜かに起き上がるや否や直ぐに相手方の人の方へ走つて行つて、丁寧に御辭儀をするのを見た。次いで二人は微笑を取交し、お互ひにへお怪我はありませんでしたか」と慰め合ひつつ穩かに別れて行つた。若しこれがパリであつたならば、口角

泡を飛ばして惡態を吐き合ひ、拳固を振り上げ、大變な騒ぎになるところである。

また日本では道を訊く時にヨーロッパのやうにへ甚だ失禮ですがなどといふ前置をいはない。ヨーロッパ人が前置をしてから物を訊ねるのは、その問はれた人が果して教へてくれるかどうかかわからないので、拒絶されないやうにする用心からさうするのであるが、日本ではそんな懸念の必要はない。最初から相互に訊けば教へて貰はれるものと思つて居るし、訊かれたら教へてやるものとお互ひに心得て居るからである。また自動車に乗つても、お客の方からも降りる時に有難うといひ、女中に用を足して貰つた後にも有難うといふ。博物館に入れば番人は相當の教養をそなへてゐて、見物人と挨拶を交し、色々説明してくれる。日本の禮儀作法、教養の社會全般に行互つてゐることは驚くべきである。フランスは共和國であるから、上下貴賤の差別がない筈なのに、日本の方が却つて平等觀が進んでゐる。上下相剋が餘程緩和されてゐるのである。一つにはこのやうにどの階級でも禮儀作法を心得てゐるので、相互の交際が容易となつてゐるせゐもあらう。何にしても日本國民のしつけのいいのには驚いた」と書いてゐる。(昭和九年六月十九日『國民新聞』)

諸國民性一言評

フランスのある雑誌に「諸國民性一言評」と題して、ユモア的な短評が出て居た。奇抜な見方で、しかもその中には各國の國民性の特徴が活躍して居るやうに思はれる。左に日英米佛獨五ヶ國に關するものを摘録する。

英國人

- 一人ではのろま。
- 二人集ればスポーツ。
- 三人になると大英帝國。

米國人

- 一人の米國人は旅行者。
- 二人の米國人は拳闘競技者。
- 三人集れば世界第一の大會社。

佛國人

- 一人の佛人は機智。
- 二人集ればお喋り。
- 三人になると分立した政黨。

獨逸人

- 一人の獨逸人は召使。
- 二人の獨逸人は伍長と兵卒。
- 三人寄れば聯隊である。

日本人評に曰く、

- 一人では微笑。
- 二人では沈黙。
- 三人では密談。

いづれも中らずと雖も遠からずと謂ふべきか。

尙又その國民の性癖を左の如く評したものがあつた。曰く、

日本人は石を見れば何か裝飾にならないかと考へる。

西洋人は何か鑛物が含まれて居ないかと首を傾ける。

支那人はどうしたらこれが喰へるかと考へる。
穿ち得て妙と言ふべし。

(昭和七年二月號『國漢』)

白色人種は寢返りの常習犯

ナポレオンは一八一三年ライプツヒの戦で大いに聯合軍から破られた結果、一八一四年四月二十日エルバ島に流された。然るに一八一五年二月二十六日彼は竊かにエルバ島を脱出し、フランスの南端ジュアン灣から上陸して、遂に三月二十日に巴里へ乗り込んで再び帝冠を戴いた。

近著の『フランス逸話集』には、その當時の『モニートル新聞』に依つてエルバ島脱出の日から、巴里到着までの間に於けるナポレオンに對する稱呼が、彼に對する輿論と共に毎日變化して、脱出の當初には食人鬼とまで悪罵したのが、一步一步、國都に近づくに隨つて變更し、巴里到着の日には陛下の尊稱を奉り、前日の悪罵などはけろりと忘れた形であつたことを指摘して多大の興味を喚起した。お慰みに之を摘譯して見る、曰く、

食人鬼はその洞窟を脱出せり

コルシカの悪魔はジュアン灣に上陸せり

猛虎は今やガツフに到着せり

怪物はグルノーブルに於て一夜を過ごせり

暴君はリオンを通過せり

篡奪者は國都を距る六十里の處に現はれたり

ポナパルトは長驅して進み來れり、併し彼は決して巴里へは入らざるべし

ナポレオンは明日我が城壁の下に到るべし

皇帝はフォンテーヌブローに到着せられたり

皇帝陛下は昨日その忠勇なる臣下に圍繞せられてチュエリー宮殿へ入御せられたり

云々と列記し、そして筆者は皮肉にも、直ぐその後へ、「時として世間には今日の新聞記者が何等の操守なくして全く猫の目のやうにその説を變ずることを誹謗するものがあるが、これは蓋し、新聞記者の變説は昔の方が今日よりも寧ろ甚しかつたことを知らぬのであらう」と附記して居る。

さてナポレオンが巴里歸著以後、ワートルロー大戦迄の三ヶ月間は、國民は皆皇帝の歸還を謳歌し喜んで之に臣従して居たのであつた。然るにナポレオンがワートルローに大敗して退位するや、ルイ十八世王が英墮普露の諸帝王から援助せられて巴里へ還つて來た時にも、國民はまたこの新たな王を歓迎し謳歌したのである。その反覆表裏厚顔無耻な態度は我々日本人から

見れば實に呆然たらざるを得ない。

帝王を易へること突棊の如く、且にして夕を測られざることに祖先以來慣らされてゐるので、自然節義だの、操守だとの言ふ觀念が薄く、義理も人情も、耻も外聞も、物質的利害損得の前には弊履の如く棄てて顧みざる彼等西洋人と、建國以來萬世一系の帝室を戴き、當面の物質的損得關係よりも、義理人情に重きを置き、忠孝節義を勵む我々日本人との間には、人道の根本的觀念に於て此の如き大きな開きがあるのである。されば彼等が日本人を不可解な國民だと思ふのは全く無理からぬことである。

つい先達て死んだキツプリングがその名高い東西の歌に、

東は東、西は西

天地今の如くある限り

此の雙兒は斷じて合はじ

神の偉大なる審判の日まで

と歌つてゐるのは、この點ばかりでも知言と言ふべきだ。(昭和十一年五月號『文藝春秋』)

西洋人の自惚

西洋人ほど自惚の強い人種はない。彼等は何事も皆自己本位で判断する。だから外國の言語、風俗、習慣が自國のそれと異なつて、自國の標準に合はないものがある場合には、直ぐにそれを以て野蠻だ、非文明だ、低級だ、不可解だと貶視するのである。

一昨年の十一月頃、日本へ来て大へん文士諸君からもてはやされたフランスの大衆小説家モリス・デコブラの如きもまたその例に漏れない。彼は日本から歸佛後、早速『サムライ・ハシンドル』と題する「日本旅行記」を書いた。そして彼はその中に、日本語に就て途方もない莫迦なことを書いて居る。曰く「日本語には名詞に男性、女性の區別がなく、單數も複數もない。動詞に人稱に従ふ變化がなく、形容詞はあつても比較形容詞がない。こんな粗笨杜撰な言葉で話して居る國民と、我々が諒解し合ふなどと言ふことは、てんから出來ない相談である」などとほざいて居るのである。その上にまた彼は續けて、だから我々の譬喩法や美辭學などは日本人（少數の例外はあるとしても）には全く解からう筈がないなどと臆面もなくべら棒なこ

とを書いてゐる。實に呆れたものである。

彼は日本語に就ては少しの知識もなく、文字通り全く文盲であり啞者であり啞者である。それにも拘らずこんなことを言つてゐるのは、畢竟するにフランス語の文法を以て日本語を律せんとするからの誤である。そしてこれはデコブラばかりではなく、西洋人の中には、同じ過誤に陥り、同じ僻見を懷いて居るものが少くないのであるから、茲に一寸その誤謬を指摘し且つ日本語は彼等が誤解して居るやうな、そんな粗笨杜撰な言葉でないことを一言左に辯じておく。

日本語はモライスが言つたやうに、今日話されてゐる言語のうちで最も洗鍊され、最も美しいものの一つであると同時に、最も六ヶしい言葉の一つである。だから名詞の上につけるお帽子、お車、お食事などに於ける「お」と言ふ敬稱語すら持たない、粗雑な言語の國に生れた西洋人が、二年や三年日本に居て日本語を習つたからとて、その微妙なけじめが分る筈のもではない。流石昔から「言葉の花の咲き匂ふ國」と言はれる丈けあつて、日本語は禮儀の感情を本として、對話の美が無限に發達したので、例へば英語で言へば單に「アイ・ドント・ノー」即ち「私は知らぬ」の一句は、皇族貴顯紳士商人より車夫馬丁の間でも、又男と女と老人と子供の間にも、何等異なる處がないのである。然るに日本語には男女の間に區別があるばかりでなく、語るものの年齢、身分、職業に依つて相違がある。しかもその微妙な言葉の變化は對話者の身分が自分より、高いか、低いか、同輩か、親しいものか、親しくないものかに依つ

て限りなく變化する。まして喜怒哀樂に随つて、その變化が更に千變萬化する。そこに日本語の無量の微妙さがある。例へば前に擧げた英語の「アイ・ドント・ノー」の「知らないわよ」と言ふ言葉を聞いた丈で、この發言者の何人であるかを我々は理解し得るのである。そこには主格もない、目的語もない、唯だ動詞だけである。然るにそれが男でなくて「女」だと言ふことがわかり、老人でなくて、「若い人」であることが分り、上流階級ではなくて、下層階級寧ろ「花柳界の人」であることがわかる。

若しそれが「存じませぬ」となれば若奥様であり、「知りませんよ」となれば下町の内儀となり、「知らん」と言へば男となる。その男の言葉も、目上に對して言ふ時は「存じませぬ」となる。若しそれが立腹して居る時なら「知つてゐるかい」となり、親切に言ふ時には「知らないね」となる。

その外、「知りません」「知らない」「知らないんです」「知らなくつてよ」「知らねえ」「知らないので御座います」「存じませぬ」「存じ申さず」「存ぜず」「存ぜぬ」「存じあげません」等々のニュアンスに至つては、如何なる外國語にも譯出することが出来ないほど、日本人の感情は繊細であり、複雑であつて、實に外國人等には想像も及ばないほど微妙な言葉である。然るにこれを粗笨杜撰な言葉だなどと言ふのは、目を閉ちて世界は暗黒なりと言ふの愚に齊し。

若しそれ譬喩の巧妙、美辭法の精緻に就ても日本は決して西洋に劣るものではない。彼の近松の『曾根崎心中』、『道行血死期の霜』の冒頭や、竹田出雲の『手習鑑寺子屋』の「いろは歌」の如き、その他謡曲や淨瑠璃の道行きなどの美辭法や、譬喩の妙に至つては、古往今來歐羅巴の如何なる大家も得て追隨する能はざるものなることを余は茲に斷言して、彼等の自惚に對して一砭を與へ置くこと尙り。(昭和十一年五月號『文藝春秋』)

恐ろしい國際關係の現状

私が近頃讀んだ外國の書物や、人から聞かされた話などを綜合して國際關係の現状を顧みると、そら恐ろしいやうな、また薄氣味が悪いやうな感じがする。

何故かと言ふに、エチオピア事件が起つて以來、世界は全く暴力萬能の時代となつて、國際道徳や、條約や取極めなどは、どこかの隅へ押込められて、今や瀕死の状態である。そして世間は之を見て少しも怪しまざるのみならず、寧ろそれを當然であるとさへ見做すに至つた、こゝと程左様に、世界の人心が急回轉したからである。

先頃ドイツのライス・バンクの總裁で、兼大藏大臣シャハット博士に會つて來た人から、私が直接に聞いた話によると、さつと左の通りである。

シャハット博士は言ふ「萬事は兵力だ。今の世の中では力が一切を解決するのだ。エチオピアも兵力がないからあんな目に遭つたのだ。勝てば官軍、負ければ賊、無理が通れば道理が引つ込む。勝ちさへすればそれが正義の軍と言ふことになる。

だから優勝劣敗、弱肉強食と言ふ説は古いやうで居て、常時新しい光を放つて居る。要するに、喰ふか、喰はれるかは世界の現状で、萬古不易の大則で、そして永久不滅の眞理である。故に、軍備を整へることが何よりの急務だ。獨逸も發言權を得る爲には、どうしても軍備を擴張せねばならぬ。兵力さへあれば世界に恐るるに足るものはない」云々と力説したと言ふことであつた。

なる程、ドイツの獨裁王ヒットラーが昨年三月ヴェルサイユ條約中の軍事條項破棄の爆彈的宣言を投げ付けて勇敢に軍備の再建を企てたが、誰もこの横紙破りを咎めるものが無かつた。

その味を覺えたヒットラーは又候本年三月第二次の爆彈宣言でロカルノ條約の破棄を聲明しライン非武装地帯へ堂々と大軍を進出せしめた。然るにこれ亦誰しも之を喰ひ留めようとさへしなかつたので、往年の戰敗國獨逸は、今や一躍強大國となつて、歐洲の中原に睥睨して居る。これ蓋し萬事が兵力の世界であるからである。

イタリヤも亦然りである。國際聯盟の議決や、英國の抗議などを、馬耳東風と聞き流して、今や遂にエチオピアを我物として仕舞つた。最初英國はイタリヤを見縊つて、一番威嚇かしてやれと言ふ腹で、地中海へ多くの軍艦を集中したり、經濟的制裁強化などと脅かして見たが、餘りにムツリニ一の鼻息が荒いので、流石の英國も遂に尻込みして、今では制裁撤回を餘儀なくせられた。此處でも亦我々はまささまと兵力萬能の現實を見せつけられたのである。

看來ればシャハット博士の言葉通り力が萬事を解決する。イタリヤが英國からいぢめられなかつたのは、ただ強いからなのであつて、英國が決して伊國のエチオピア奪略を正當視すると云ふ譯ではない。況して英國の態度の變更に就ては正邪曲直の念など寸毫もその間に介在しない。只だ力が足りないから討伐を諦めた迄のことに過ぎぬ。若しイタリヤが弱かつたなら英國からいぢめられたことはエチオピアが伊國からいぢめられたのと少しも異はないのである。換言すれば弱肉強食これ大則で、今や世界は弱い者いぢめの世となつたのである。先頃向坂逸郎氏が、會社の重役とサラリーマンの話について、

「弱い者いぢめといつて大變悪いことのやうに言ふが、元來、力は弱いものに對して強く、強いものに對しては弱いといふのが當然なのである。これは一つの物理的の法則であつて、我々のよく知つて居る平凡なる眞理であるにすぎない。だから、いぢめられるのがいやなら強くなるより外に方法がない」と言はれたことはそのまま國際關係にも適合する。

それに就て最近讀んだ獨逸の書物に、「弱いと言ふことは國際上の罪惡なり、如何となれば他國をして奪掠せんと欲するの意思を挑發せしむればなり」とある。嗚呼弱いものは災なるかな！

同書に又曰く、他國を威脅しないやうな國家は現今の世界では決して尊敬され得ぬ。故に外國の尊敬を博せんと欲する國家は他國を威脅するに足る軍備を有するを要すと。さても恐ろし

いことになつたものだ。

又曰く、ある國家が富強なれば、求めずして他の外國はその同盟國とならんことを望むであらう。だからよき同盟を得んと欲せば須らくその國家を富強ならしめよ、同盟は招かずして走り來らんと。讀んで茲に到りて私は曹據の感舊の詩、

富貴他人合（富貴なれば他人だも合し）

貧賤親戚離（貧賤なれば親戚だも離る）

を思ひ出して慚然たるもの多時。

○

フランスの元總理大臣クレマンソーはその著『考の黄昏』の中に「平和は概して新たなる争鬪の準備期間に過ぎず」と言つて居る。

オーストリの論客アントワーヌ・ヂツカは言ふ、「平和の永續は只双方の力の軒輕なき時のみなり」と。言ふ心は少しでもその力に懸隔が生じ、少しの隙があれば敵國は直ぐ様、その弱点につけこんで來るものなりと。

碩學アナトール・フランスは更に一步を進めて曰く、「生きるとは殺すことなり。吾人は自己の生命を保たんが爲には他の生物を殺さざるべからず、見よ、現に我々は生きんが爲に、他の牛豚羊鶏その他の動植の生物を毎日殺して食するに非ずや。これを殺して食はざれば我々は

生きるを得ず。故に曰く「人生は死より出づ」他の生物の死は我が生を保つ所以の道なり、而してこれが人間に課せられたる運命なり。故に地球上に人間の存在する間は争闘は絶ゆることあらざるべしと。看來ればさても物騒なる人生なるかな！

余は今これ等の議論に就てその是非善悪を批判せんと欲するものに非ず。只讀者に向つて、現代に關する深省の材料を提供せんが爲に茲にこれを紹介したのである。

（昭和十一年八月號『現代』）

III

ピエル・ロチの愛人への戀文

『お菊さん』の著者ピエル・ロチの親友だつたルキ・ド・ロベールがピエル・ロチの愛人に手を出して、見事に失策つた面白い話を、ロベール自身が素直に懺悔してゐるが、失策つたとは言へ、その経緯には頗る愉快なものがあるから、ここに書いて見よう。

一九九八年、ロベールはアンダイにあるロチの寓居のお客となつて、その離れ座敷に住んでゐたが、或る日ロチがロベールに向つて、

「僕は今晚九時から十時まで、君が使つてゐるあの部屋が一寸入用なんだ。まことに濟まないが、一寸の間、君、どこかへ行つて呉れないか。若し差支へがなかつたら、どうかさうして呉れ給へ。」

と言つたことがあつた。どう言ふ譯でロチがロベールに部屋を空けて呉れと頼んだかと言ふことは、その後間もなく、ロチがアンダイのある美しい娘と戀に落ちて、互ひに戀仲となつたことを一言付け加へて置けばそれで十分だ。

その娘は、顔かたちが美しいばかりでなく、立居振舞までが如何にも氣高く、しとやかであつて、フランス中でもこの地方の良家の娘の特色と見なされてゐる藤たさを持つて居た。

ロベールは、ロチから部屋を一時間ばかり空けて呉れと言はれたので勿論承諾して、戸外に出た。夏の夜のことだつたから、彼はその邊を、メランコリックな氣持でぶらぶら散歩して居た。

ロベールは、散歩しながら、若し自分が物好きな男だつたら、あの時、戸外に出掛けるふりをして、部屋のどこかへコツソリ隠れてゐて、二人の密話を立聞きしただらうなどと、考へてみたりなどしてゐた。

もう十時になつたので、ロベールは自分の部屋へ歸つて見ると、其時は最早その部屋には誰もゐなかつた。注意して見ても、部屋には何一つ動かした氣配や、散らかした跡がなかつた。

ロベールは、ぼんやりその娘の事を考へ出した。彼は先達ての日曜日に、あの娘が教會から出て來る時、パツタリ出逢つて、互ひに微笑を送り合つたことを、恍惚として思ひ出してゐたのである。が、よく考へて見ると、その娘の微笑も一應の挨拶でしかなく、別に自分に特別の好意を寄せてゐるからだとも、彼には思へなかつた。その癖彼の心の一隅では、なかに自分だつて當つてさへ見たら、あの娘ぐらゐと言ふ自負心もないではなかつた。

そしてかう言ふ自負心が、ロベールにヒョんな謀叛心を起させてしまつたのだ。ロベールは、

それから數日經つてロチが五六日家を留守にしたことを、もつげの幸ひとばかり、娘の處へ手紙を書き送つたのである。夜の九時に自分の部屋の窓近く來て頂けぬかといふ意味の。

しかしさうは書いてやつたものの、ロベールは、この自分の企てがうまく行くなどと言ふことは別に考へてゐなかつた。だから、その晩娘がたうとう姿を見せなかつたことを知つても、彼は決してガツカリしなかつた。そしてその後、彼はそんなことをスツカリ忘れてゐた。

ロチが旅から歸つて來て四五日すると、ロベールの處へ粗惡な封筒に入つた手紙が届いた。

ロベールは、何氣なく、それを開いて見て、思はず吃驚して飛び上つた。その封筒の中には、つい先日彼が娘に書き送つた戀の手紙が、そのまま封じ込まれてあつたからである。

ロベールは、自分の手紙を、ふと讀み返して見た。彼はその手紙を書いた時には、どうせ相手は田舎の娘のことだから、意味さへ通じればいいと言ふ心算で、文章には何んの注意をも拂はなかつたのであつた。ただ彼は手紙が首尾よく娘の手に入つて呉ればいいがと言ふことと、もし萬一、人手にそれが渡つた時に、娘の迷惑にならねばいいがと言ふこととだけ考へなかつたのだ。さてその手紙といふのは、大體こんな風なものだつた。

「お嬢さん明晩九時に、人に分らぬやうに、こつそりと貴女のお出でを、ヴァイラ・デー（別莊の名）の側でお待ち致しております。ピダソア街道の大通りへ出る石段を下の、あの塔の下に待つて居ります」

然るに驚いたことにはこの手紙の文句の下に、ロチの手跡で、

「そんなこと、彼女は知らないよ、おい大將」

と、書き込んであつた。

ロベールの手紙は、まだ續く、「私が貴女をお待ちしてゐることなど、誰も知つてはゐません。そして私は誰にもこのことを他言はしないと誓ふことを、貴女に誓ひます」

ここへも亦、ロチは自筆を以て、「ようよう、その調子その調子」と註釋を書き加へた。

ロベールの手紙は、最後に、

「先達て貴女を初めて見てから忽ち思ひに沈んだ私は、このアンダイの土地を去る前に、もう一度お目にかかつて是非、思ひのたけを貴女に告白いたしたいと存じてをります」と結んであつた。

ここにもロチは、筆を入れて、

「やつたぞ、やつたぞ！ おお、ラ・ラ！」

そして手紙の終りのところへ、ロチの筆跡でメフィストフェレスが鼻に手を翳して居る漫畫を描き込んであつた。

かう言ふ工合に、アンダイの娘は、ロベールよりも二十も年齢上のロチに女の操を立てて、ロベールに見事肱鐵砲を食はしたのであつた。そればかりか、娘は何もかも皆んなロチに話し

てしまつたので、ロチと娘と二人して、散々ロベールの油を搾つたのである。

ロベールは、懺悔して言つてゐる。

「彼女は、やつぱりビエル・ロチの名聲に現を抜かしてゐたのだ。勿論私に見れば、ロチの盛名に對して競争しようなんてことは思ひも寄らぬことである。何故ならロチが、あの愛馬スタンブルに跨つて、彼女の住んでゐる家の窓先きを通り、彼女がそこから美しい顔をのぞかせた時、ロチはそつと微笑を送つたに違ひないが、その時彼女は、(ああ、あんなに偉い方が妾の愛人なのだ。あんなに有名な、そしてどの新聞にも寫眞が出て……)などと考へて、郵便配達夫さへ誇らしげに、西班牙の皇后様から電報です、などと毎日のやうにロチの處に届けて來るのに、彼女はスツカリ感激して如何に虚榮心を衝動させたことであらう。だから私は、ロチと張り合つたつて、とても勝味はないと斷念めてゐたのだ。私が彼女から肱鐵砲を食つたのは、ロチの盛名の爲だと、私はその時には思つて居たのである。

ところが今日改めてよく考へて見ると、私のその時の考は間違つてゐたことが分つて來た。その譯は、極めて簡單明瞭だ。それはビエル・ロチが私と比べて、やつぱり好男子であつたからである！」

ロチのこの戀は極めて短い間しか續かなかつた。何故なら、この娘さんは、その後間もなく可惜蓄のまま死んでしまつたから。(昭和九年五月號『話』)

「生きるといふことは殺すことなり」

生前既にその明快な叡智と、その絶高の藝術的美文とを以て世界的盛名を博したアナトール・フランスが死んでから、この十月で丁度十年になる。

この期間に於て彼の生前發表されなかつた雜著が近頃漸次發刊せらるるに従つて、その文辭の精妙は言はずもがな、その清微簡遠なる思想は益々彼の眞の姿を大きくし、輝かしい後光をさへも放つて居るかの如くに見える。

特にアナトール・フランスのパラドックス（逆説法）は、いつもながら奇想天外、彼氏獨得の撞場、天下一品の離れ業として、誰知らぬものもない。

今その未刊書中『將來に關する對話』の内で氏一流の逆説法の標本とも見らるべき「生は死より出づ」の一節を試みに摘譯して見る。

アナトール・フランスは「人間は自己生存のためには、（肉食して生きるにしても、野菜

食で生きるにしても、兎に角、生きるがためには）、他の生物を殺さなければならぬと言ふ悲しき運命の下に置かれてある」といふ主張を敷衍展開して左の如く面白く言ひ廻して居る。

「人間が動物の肉を食つて生きて居る間はどうしても血腥い残忍なものであるを免かれ得ない。自分の生命を保つが爲に他の動物を殺すといふことは、人間を殺すといふことと、その間の隔りは實に些細僅少なものであつて所謂五十歩百歩である。

そして又、植物だつても矢張り生きて居るので、植物にも生命があることは動物と異りはないのだ。だから假令菜食者であるにしても矢張り生物を殺すと言ふ同じ残忍を犯して居るのである。して見れば物を殺すといふことは人間が負はされた運命と言はねばならぬ。

野菜や植物の生命でも、生命と言ふ點から觀れば動物や人間の生命と全く同じもので、その間に輕重尊卑のあるべき理由はない。野菜だから殺して食つても少しも氣の毒でないなどと思ふ者は、生命といふものの本質を會得しないからである。だから我々が住んで居るこの呪ふべき地球が消滅して仕舞ふまで、「生は死から出る」のである。

かかるが故に、「生きてゐるといふことは殺すといふことである」

然らば生物を憐れんで、之を殺すことを止めたらどうなるかと言ふに、動物を殺さぬといふことは、取りも直さず一切の動物を死に導くといふ結果になるのだから、どうしても「生は死から出づ」の如く、「生きてゐるといふことは殺すといふことである」

人間も他の動物と同じく、殺戮に依つてのみ生存するのである。此處で余は諸君に、冷靜に深く人間なるものの本質を見極めて考へて貰ひたいのである。先づ人間がこの世に於て發明したものの内で、何が最初のものであつたかと言へば、殺戮することの術では無かつたか。そしてその次ぎが生産繁殖の術であつたのである。この殺戮と生殖との二つを中心として、人間は幾千萬種の發明をしたのであるが、その幾千萬種の發明なるものも歸するところは、この殺すことと、産むこととの二つのものに對しての補強工作でそれを少し美化するに過ぎないものである。

して見ればこの地球上に生きとし生ける凡ての動物は、殺すことを餘儀なくされた運命を負はされてゐるのである。随つて彼等の殘忍な、そして同時に氣の毒な短かい生命は、實にはかないものである。そしてこの世界を支配する殺戮の大法と、そしてこの破壊することの必要とは正に人間の本質とその目的とを我々に教示するものではないか。

そこで首を廻らして今の世の中を觀れば、今や東洋も西洋も、否、全世界が極めて不安定で、一方ではやれ軍縮だの、安全保障だのと騒いで居るのに、他方では、やれ毒瓦斯の研究だの、猛烈な爆撃機の新發明だの、斬つたの、殺したのと、言つて居るのも、畢竟各自の生存の爲であるのだから、アナトール・フランスのこのプリズムの角度から觀察すればこの地球の存する限り、盡未來永劫我々人間は戰爭を熄めることが出来ぬ運命にあるものとせねばならぬ。果し

て然らば所謂優勝劣敗弱肉強食、喰ふか喰はれるか、が人間に課せられた悲しむべき鐵則と諦らめねばならぬ。されば日本人よ、強くあれ、而して勝者たれ！

(昭和九年五月十九日『時事新報』)

巴里の給仕長の觀たる米國觀光客

その頃僕は在勤地の西班牙から巴里へ出掛ける時には、いつもホテルリッツかムーリースに宿泊することにして居た。ところが、リッツの給仕長が、ある日、僕にサーヴィスする度毎に、「左様です伯爵」とか「畏りました侯爵」とか云ふので、僕は擦つたい氣持で笑ひながら、「オイ冗談云つちやいけないよ、僕はそんな御大層な人間ぢやないんだ」と云つてやると、給仕長がこれは失策つたと云ふやうな表情をしながら僕に向つて、「ああ飛んだ失禮をいたしました、つい口癖になつて居るものですから」と恐縮するので、「何んだい、その口癖つてのは？」と僕が訊くと、「御存じの通り此のホテルへは亞米利加の千萬長者達が常時お泊りになりますので、それでついその」と辯解めいた事を云ふので、「だつて、亞米利加にや伯爵もなけれや侯爵もないぢやアないか」と僕が詰り掛けると、給仕長は「其處なんですよ、旦那、さういふ爵位なんてものが亞米利加には全くないので、アメリカの先生達はそれを譯もなく大喜びするんですよ。元來、亞米利加人が毎年あんなに多勢佛蘭西へやつて來ますのは、本當の事を申し

上げますと、何のことはない只だ大威張りに威張つて見たい爲に遙々やつて來るのですから。御承知の通り亞米利加人は、本國に居ちやデモクラシーなんですから、さうさう威張る譯にや行きませんや。早い話が大統領でさへ懇意なものなら、デジードとかジョンだとか云つて、皆んなお互ひ同志に、平等に取扱はれるのですから、どんな千萬長者でも亞米利加に居てはさう威張るわけには行かんのです。そこでアメリカ人は旅へ出た時、思ひ切り威張つて見たいと云ふのが例外の無い彼等の念願なのです。私は給仕長をやつて居ます長い間、色々ア研究して見ましたが、亞米利加人の富豪の理想とでも申しますのは、つまり貴族的に暮らし、貴族的に威張つて見たいと言ふ事なんです。そこで、私はかう云ふ理想を持つてゐる亞米利加人を片ツ端から貴族として待遇してやつたならば、彼の人達は定めし本望に違ひないと、考へつきました。さう云ふ心やりから、私はアメリカ人でさへあれば、誰彼の區別なく伯爵とか侯爵とかと云つてやるんです。所が、これが又大いに先生達の御氣に召して、あのホテルの給仕長は感じがいいとか、丁寧だとか、氣が利いて居るとか評判になりました、その賞められます事つたら……。何しろ旦那、亞米利加の富豪達は眞面目に心から、自分達は昔の羅馬の貴族と同じもの位に思つて居るので、からね。本當ですよ。驚いちゃいけません。尤も羅馬の貴族は奴隸を使役した遊惰な貴族であつたのに引きかへて、彼の人達即ち亞米利加の現今の貴族は頭を働かす貴族である點だけは一寸違つては居ますが、しかし貴族だと云ふ事を意識して居る所は兩方

とも少しも變りはないのです。ですから先生達を貴族として、萬事如才なく取扱ひさへすりや、先生達は大満足ですよ。所が、世間の人は、此の分り切つた事に氣がつかないんです。亞米利加はデモクラシーだからつて、一概にデモクラシーで扱ふなんて、そりやア大間違ひですよ。そんな事でしたら、何もわざわざ高いお金を使つて佛蘭西くんだり迄やつて來るが程の事はありやしませんや。千萬長者の事ですから、おいしい料理が食べたいなら佛蘭西一流の料理人を亞米利加へ連れて行つて、自分の邸へ雇つて置きやいいんですからね。所が亞米利加人の眞の願望はそんな贅澤をしたいと云ふ事ぢやないんです。前にもお話した通り、先生達はただ貴族として威張つて見たいんですア。ですからその處を洞見し忖度し推察しなくつちや嘘ですよ。私がこのホテルの給仕長になりました時、私の見込みを詳しく開陳したのです。すると幸に支配人は私の意見を一から十まですつかり採用して呉れました。そのお蔭で、御覽の通り此のホテルでは、どのお客様も皆貴族として鄭重にお取り扱ひ申す次第です。いや、旦那、随分私は研究いたしましたよ。かう迄やりますにや、給仕の服装にしてからが、常時^{いつも}リブレをキチンと着て、慎しみ深い恭しい態度で、どのお客様に向つても閣下とお呼び致すことにして居りますので、丁度佛蘭西の貴族が自分の邸で生活して居ると全く同じやうにサーヴィスする仕組みにしたのです。ですからこのホテルでは亞米利加人は思ふ存分威張れるので、そりやア大喜びですよ。こんな風ですから、つい伯爵とか侯爵とかが口癖になつちまひましてね、旦那のやうな

御常連に向つてさへ、うつかりさつきみたいに失禮してしまふのです。

*

旦那、私が先刻も申しましたやうに、亞米利加には貴族の稱號がありませんから、それだけ先生達はそれを尊敬する譯ですね。物、稀なれば貴しですよ。何しろアメリカの千萬長者と言つた處で、元をただせばみんな歐洲移民の成り上りで、運の善い奴がただ一山掘り當てて成金に成つたに過ぎないんですからね。だから肩書が欲しいばつかりに、貴族とさへありや、どんなのでも構はぬと云ふので、伊太利の公爵とか佛蘭西の伯爵とか云ふ貧乏貴族と、亞米利加の富豪の娘さん達がどんどん結婚するでせう。あれは伊太利や佛蘭西の貴族が才智が卓絶して居るとか、將來の見込みがあるとか云ふ譯ぢやないんです。ただ自分の可愛い娘に、一遍でも侯爵夫人とか伯爵夫人とかと呼ばして見たい、ただそれだけなんです。旦那にしたつて、此處の大きなカフェ・アメリカンなどにお出掛けになつた時、あのガルソンや美姫達から男爵とか侯爵とか云はれなかつたら、萬更ぢやないでせう。私にしましても、他所へ行つてそんな風に云はれたら、悪い氣持はしませんからね、チップの二圓や三圓はどうしたつてはすみませア。そこなんですよ、米國人を待遇^{もて}なす呼吸つてのは。だから一視同仁のデモクラシーぢや、駄目ですア。さうさう、先達てこんな事がありましたつけ。二三ヶ月前、亞米利加のある富豪のお客様が、佛蘭西語が習ひたいから、毎日三十分間宛教へて貰ひたいと仰有いますので、私はこのホ

テルの給仕で、高等學校を出たものを一人お世話しました。所がその學習の間は部屋の内から鍵をかけて、給仕から佛蘭西語を習つてゐるなんてことを堅く匿して居たのです。所が或る日その米人の富豪客が、サロンの眞中で相客の富豪達と話して居た時に、そのボーイがいつも部屋で語學の稽古をして居る時のやうに、なれなれしい調子で、「ミスター某」と呼んだのです。するとその亞米利加人は呼び掛けられても一向聞えぬと云ふ風に、知らん顔して居たのです。それ許りではなく、呼び掛けられるのさへ穢しいと云ふ面持で、ボーイにクルリと背を向けてしまつたぢやありませんか。これは給仕風情にミスターなどと呼ばれる謂れがないとも思つたのでせうか、それとも又、他人の前で恥をかかされたとも思つたからなのでせうか、とに角その翌日突然勘定を濟ませて此のホテルを出てムーリリスへ移つてしまひましたよ。

*
序でもう一つお話いたしました。例へば私が部屋に呼ばれたとしますね。そのお客様から、「此の手紙を」と云つて渡されるやうな場合には、「はい畏りました」と云つて、その手紙をその儘ポケットの中へ入れやうものなら、それは事件（こと）です。大失策です。かう云ふ時には、直ぐ給仕を呼んで、「これは閣下の大切な御手紙だから直ぐポストへ出して来るやうに」と云つて渡すのです。すると給仕は、前々からよく云ひ聞かせてありますから、その場合には、直立不動の姿勢で、それこそ鞠躬如として、丁寧なお辭儀をして恭々しくその手紙を持つて出て行

くのです。斯うすればアメリカ人に大變お氣に入るので。そして、これが又本當の佛蘭西貴族のお邸では今でも行はれて居る慣例なんです。なにはともあれ、此の佛蘭西へ觀光に来る外國のお客のうちで、なんと云つても一番多いのは亞米利加人ですよ、年に二億三千万弗と云ふ大金を巴里へばら撒いて呉れるんですからね。我々ホテル業者には大切なお客様です。これが旦那、觀光客丈けです。此の他に四千家族も、亞米利加人が巴里に住んでるんですから、米國人を款待するにや、抜け目なく先き様の心理迄も讀まなくては駄目ですよ」とリッツの給仕長はフランス人獨得の身振りやユモアを交へて、面白く長廣舌を揮つたので、僕もその時、成程奇抜な見方だと思つたので、今でも覚えてゐる。處で米國の觀光團が年々此の日本へもやつて来る折柄、何かの参考にでもなりはしないかと思はれるので一寸書いて見た。

威張らない大臣

此頃では餘程直つたやうだけれど、まだなんといつても日本には官尊民卑の風が、スツカリ抜け切れない。早い話が、いきなり役所などへ面會に行くと、突つ先きに頑張つて居る門衛から、コラお前何處へ行く？ などと一寸おどかさされるやうな取扱ひを受けたり、これが更に、大臣次官局長などになると、勿論忙しいからかも知れないが、途方もなくひどく待たされたりする。そしてやつと會つて見ると、以前から知つてゐる人はさうでもなく思はれるが、初對面の役人だつたりすると、どうもなんとなしに、役人風を吹かせてゐるやうに見え、尊大な感じを與へられ勝ちである。

これは勿論舊幕時代からの長い間の因襲であるからおいそれと俄かに改めることは六ヶ敷く一時には直らぬことであらうが、何とかして成るべく早く改めたいことである。幸ひ、昨今はこれまで辯護士をしてゐた人や、新聞記者だつた人や、或ひは大會社の番頭だつたりした人達が、政黨の幹部になり、次いでは局長次官大臣にもなる世の中となつて來たので、自然官尊民

卑の懸障も、だんだん直つて來ることであらうと思はれる。

そこへゆくと外國では、アメリカは勿論のこと、昨日迄の大學の先生や辯護士がいきなり、大統領になつたり、各省大臣になつたりなどし、又それ等の地位から身を引いてしまへば、元の職業にかへつて、少しもこだはらずに、又君と呼び僕と言ふやうな對等關係に戻るのだから、自然どうしても官尊民卑などといふ事はない譯だ。フランスなどでも、ポアンカレは辯護士から大統領になり、最近物故したブリアンも辯護士から大臣になり、その他こんな例は枚舉に暇のない位で、言はば出でては役人、退いては新聞記者や辯護士になるといふ風だから、自然官尊民卑の臭氣がないのである。

殊にフランス人は、革命以來自由平等の思想が上から下迄浸潤してゐるから、人民は役人を特別偉いものとは思つてゐないし、又役人も乃公が！ といふ風に威張らうとはしない。加ふるにフランス人獨有の平易さと愛嬌たつぷりな態度で應接するのだから、初めて會つた日本人などは、相手の丁寧さ、腰の低さに、却つてこつちが面食ふ程である。

イギリスでも、労働黨のマクドナルドが首相になつた位だから、あんなに保守的なイギリスでさへ、この頃では以前に較べると尙一層官尊民卑の臭氣がなくなつて來た。

いや、フランスやイギリスばかりではない、これから段々みんなさうなるのが、世界の趨勢であらう。

ところで、今私がここで話をしようとするフランスの大臣ヴィクトル・ロジュラの逸話は、これはまた飛び離れた簡素振り、餘りに威張らな過ぎる一例である。勿論これは、フランス人の内でも例外的な程の簡素な人ではあるが、この一例によつて見ても、あちらの大臣たるものの威張らないことがわかる。

ヴィクトル・ロジュラは、幾度も大臣になつた人だが、彼は人も知つてゐる通り、その才能、手腕は抜群で、どの大臣の椅子に坐つた時でも、やり手だといふ名聲を取つた人である。それと同時に、彼程威張らぬ人はなかつたといふので彼は有名である。いはば彼は、謙遜家で、何事にも簡素至極の人と言はれて居た。

前にもいつたやうにこの人は何度も大臣になつたから、どの内閣の時だつたか忘れたが、彼がかつて司法大臣だつた時、或る日の夕刻、ロジュラは朝から働き通して、今や司法省を退出せんとしてその門まで來かかつた時、不圖氣がついたことは自分は今晚是非とも調べて置かなければならぬ書類を入れて置いた小さな靴を二階の廊下へ置き忘れて來たことであつた。ところでこれから又あの梯子段を上つて、二階まで行くことが彼には大いに面倒臭く思はれた。しかし、それかといつて、靴の中に入つてゐる書類は、是非とも今晚目を通さなければならぬのだつた。

すると、そこに門番の制服を着けた一人の男が、大きなパイプを口にくはへながらゆつたり

と椅子に馬乗りに跨つて、如何にも旨さうに煙草を喫んでゐるのが、彼の目に留つた。

ロジュラは、直ぐに、おい君一寸！ といふ合圖をした。しかし、門衛は、一向に見ようともせず、相變らず悠然とスパリスパリとやつてゐるのだ。

成程この門公が知らん顔をしてゐるのも尤もな話だつた。この氣持よささうに椅子に跨つて煙草をふかしてゐるのは、本當の門公が一寸自分の家へ夕飯を食べに行つて來る間丈け、内證で頼まれた臨時代理の門公であつたのだからである。しかもその代り役の門番が、恐ろしく鼻つ柱の強い奴で、一寸の間でも司法省の門衛になつたといふので、思ひ切り高慢ちきになつてゐたのだ。

ロジュラは、先づ氣輕に、

「おい君！」とやつた。

すると門衛は心持ち頭を上げて、ロジュラを見た。ところがロジュラは、服装などに一向構はなかつた人だから、門衛は軽く扱つて、

——何か用ですかい？

といつた。

——ああ、一寸君に願ひしたいことがあるんだが……

といつてロジュラが、門衛に近づくと、門衛は、

— お願ひだつて？

— あのね、濟まないが、二階へ行つて、あの帽子掛の下にある、書類入れの小さな鞆を取つて来てくれないかね？

— なに鞆を！ なんですかい、あなたは私を、あなたの小使とでも思つてるんですかい？ するとロジュラは、やさしく何かいつて、彼に五フランの銀貨を渡した。五フランとはいふが、その當時にあつては、優に今日の十フランにも當るものだつた。男は、すると、慾に引かされて一寸立ちかけたが、再び思ひ返したか、

— いや、そりやなりませんよ。友達が飯を食ひに行つた間、私はここを預つたんで、一寸の間でも退いちやならんつて、きつくいはれてあるんだから、そりやなりませんよ。……しかし、誰かここに人がゐりやいいんだが……あ、ようがंस、ちやその間、あなた、私の代りにここにゐて下さい！

— うん、よし、いいとも、僕が代りをやつてやるよ！

— だが、唯ここにゐるばかりちや困りますよ。表からヂーンと鈴がなつたら、誰ですか？ つて一應訊いた後でなくちや、決して門を開けちやいけませんぜ。しかし、中から表へ出て行く人は、何んともいはなくつたつていいんですぜ。小役人達が、あなたみたいに、仕事をして晩く歸りなさるんだから。

と言ひつつ門衛は、ロジュラから頼まれた用を果す爲に、二階へ行つた。暫くすると、表の鈴が鳴つた。

俄か門番のロジュラが、何人ですかと訊いた後で、門を明けてやると、郵便配達夫が、「今晚は！」といつて慣々しく入つて来て、ロジュラと握手した。そしてそこに郵便物を置いて、

— ほう、君が今度の新しい門衛さんかい。

— いや、さうぢやないんです、一寸頼まれたので、一寸臨時の代理です……

ロジュラは、こんな際で、謙遜の口調を捨てなかつた。

ロジュラは、臨時代理だと言つたけれども、實は代理の代理であつたのだ。

さて、二階に上つて行つた門番の代りの男は、中々下りて來なかつた。それもその筈、鞆は譯なく見付かつたが、二階から下りて來ようとする途端に、同じ村の出身の知友とパツタリ出會つた。がその人は、居村から今朝便りがあつたといふので、その一部始終の郷里の話を持ち出したので、その立話が容易に盡きなかつたからだ。

ロジュラは、氣が揉めた。といふのは、彼は今晚或る貴族院議員から晩餐に招かれてゐたからだつた。

そしてその一方、晩餐を催した貴族院議員の方でも亦、定刻になつて來賓が皆揃つたのに、司法大臣一人丈けが來ないので、氣が揉めてならなかつた。で、その議員は、

——困つたな。又お喋りの訪問客か何かに引つかかつて、親切な大臣は、一々うんうんいつて返事をしてゐるに違ひない。この分ちや、明日の晩迄待つたつて埒が明きやしない！ こりや、迎へに行くより他、手がないわい！

で、貴族院議員は、堪り兼ねて、いよいよ自身でロジユラを探しに出かけた。

貴族院議員は、こんなに晩くなつても、司法省の門へは始終出入するので善く知つても居るし且つ又、もう顔の賣れてることだしするから、自分で心易く門を明けて入つて見た。

ところが、なんと驚いたことには、その門衛のあるところに、今晚招待してある司法大臣閣下が、恭々しく腰かけていらつしやるではないか！ 貴族院議員が呆氣に取られてゐると、そこへちやうど、先刻の代りの門衛が、鞆を持つて二階から下りて來た。と、そこに知らぬ一人の男がゐたのを見たから、門衛代理の男は根がそそつかしい男で、直ぐと向つ腹を立ててしまひ、ロジユラに向つて、

——この馬鹿野郎め！ そんなことでお前、門番の勤めが出来ると思つて居るのか？ さつきあんなにも言つといたのに、なんだつて門を明けつ放しなんかにしやがるんだ！ 若しかして、これが大臣にでも知れたら、俺達は直ぐにも馘首になつちまふんだぞ！ さあ出て行け、このトンチキのデクノ棒め！ たつた五分間も門番が勤まらんやうな奴で、一體なんになれるかつてんだ！ （昭和七年五月號『經濟叢書』）

フランス作家の勇退逸話

小引

「功成り名遂げて、身退くは天の道なり」と老子がいの一番に説教し、次いで秦の賢相蔡澤が「四時の序、功を成すものは去る」と相槌を打つて以來、高蹈勇退の思想は明哲保身の秘訣の如く見なされ、随つて士大夫の間に於ては之を實行に示した例は昔の支那や日本には枚擧に遑あらざる程多くある。で僕は、功名富貴全盛の地位を、恰も弊履の如くに惜し氣もなくさりりと棄て去ると言ふが如きは、名利に恬淡な東洋の高き教養の特産物であつて、とても利慾満身の西洋人などの思ひ及ぶ所ではないとさへ思つて居た。處がつい此の間、不圖フランスの雜著の中に佛國劇作の大家エミール・オーヂエ（一八二〇—一八九九）が宋の詩家戴復古の詩句

日暮倒行非吾事

急流勇退有何難

をそのまま實行した美談を読んで、さてはと驚嘆を禁じ得なかつたのみならず、現下日本の朝野の情態に鑑みて少なからず示唆されるものがあるを感じた。そこで筆を執つて譯して見たのが左の一篇。

フランスの劇作家エミール・オーヂエが今迄嘗て見た事のない大々的成功で、さしにも廣いフランス座も破れん計りの喝采を博したのが一八七八年四月八日、其の作になる『フルンヤンボール』の初演の晩であつた。その時彼は言つた。「これが僕の劇作の最後である、これがすんだら僕は必ず引退する。世の中は先様おかはりが定法だ。」と。

果然彼は引退して、その後は斷然劇作に筆を絶つた。オーヂエは當時口癖のやうに、世の中には良い潮時に引退した人は誠に少ない。或人は餘り早過ぎたり、又或人は餘りそれが遅過ぎたりする。しかしその選擇は各自の自由なのだから僕は寧ろ早過ぎる方を擇ぶ心算だ。人々から惜しまれたり又はいつ迄も世間の尊敬を維持する爲には、これに越した方法はないと言つて居た。そして彼が最も恐れ且つ最も嫌つたところのものは、人から侮辱せられることであつた。言ひ換へれば生き恥を曝らすと言ふことは彼にはどうしても忍ばれないことであつた。これ蓋し彼が持つて生れたブルジョアの矜持からであらう。

そしてその急流勇退のわけを、彼の親友で、伯林のある新聞記者をしてゐたポール・リンド

ーが彼の隠棲の地クロワシーへ訪ねて來た時、偶然これを漏らしたのであつた。

それは『フルンヤンボール』上演大成功の後、二三年を経たある年のことであつた。二人はアカシヤの樹蔭に椅子を並べて四方山の話に時を移した。その際リンドーはオーヂエに向つて「君は作劇の才能がまだ十分にあるのに、久しい間何にも書かないのはどうした理由か」と訊ねた。

するとオーヂエは、「それはね、僕は全く劇作を止してしまつたからさ。人間は末路が大切だよ。僕は羅馬皇帝ヴェスパジアンのやうに、屹然と立つた儘の雄姿で死にたいのだ。このことに就て、僕がまだ若かつた時目撃した印象が深く腦裏に刻み込まれて居て、今以て忘れられないある事件があるのだ。そしてその時、僕はへ男子須らく、他人から愛想を盡かされない内に勇退すべし」と堅く自ら心に誓つたのだ。」と言ふと、リンドーは怪訝の眼をパチつかせた。

オーヂエは語を次いで、「君がそのある事件と言ふのを聞きたいと言ふなら、ヨシ、一くさりお聴きに入れよう。随分教訓になる話だよ。當時僕は若かつたので、盛んに劇作をやつて居た。どの作もどの作も皆大當りで、劇界の寵兒などと世間から呼ばれて居た頃だつた。或日僕は一寸した用事で、フランス座へ行つた。座主は非常に愛想のよい人だつたので、我々二人は座主の室で盛んに笑話を交はして居た時、座付きの小僧が靜かに入つて來て、一枚の名刺を座主に呈した。すると座主は五月蠅いと言はんばかりの表情で、一寸肩をそびやかして、小僧に

「手がふさがつて居て、今日は逢へない」と言ひ付けた。そして半ば獨り言のやうに、
「五月 蠅い奴だ。何時下らないことばかり……」と言ひながら、今小僧が持つて来た名刺を僕に示した。僕はその名刺に「ウージェーヌ・スクリーブ」とあるのを見た時は實に喫驚仰天した。スクリーブ先生は、君も知つて居る通り十五ヶ年の長い間、劇界の大御所として、當時は飛ぶ鳥をも落さんずの大勢力があつた人だ。そしてまた、先生程の大成功を収めた人は無かつたのだ。それが何ぞや、劇場の座主風情に門前拂ひを食はされるとは！ 嗚呼、何と言ふ情ないことだと思つた。その時だよ、僕が、自分は決して、こんなみじめな生耻を曝らすやうなことは斷然やらないやうにするぞ、と自ら誓つたのは。これ即ち僕が『フルシヤンボール』以後は、決して作劇の筆を執らないことに決心して、斷然劇界から引退した理由さ。

僕の『フルシヤンボール』の上演は、實際大成功であつた。その當時の有様は今でもよく記憶して居るが、最後の幕が終つて、幕が徐々と下りて來ると、急に雷が落ちたやうな大々的の拍手喝采の間に、作者たる僕の名が披露せられたものだ。その時僕は座主の部屋で、ベレンと二人差し向ひで話して居た。するとベレンが僕の手をしっかりと握りしめて、

「へどうです。あの喝采は！ こんな大成功なのに、以後劇作はしないなんかと、なんぼ君が意地張りでも、まさか言はれた義理ではないでせう。君はあのやうな喝采を曾て聞いた事がありませんか？……」と云つた。で僕は、

「あの喝采は僕には退軍喇叭のやうに聞える。人間は成功の絶頂で勇退すべきものだ」と答へたのだ。

「その後、僕は間もなくこのクロワシーの地に引退した次第さ。」とリンドーに語つた。

思へばオーヂエの如きは、實によく引退の潮時を知つた人と云ふべきだ。彼は其の才能のまだ枯渴せざるに先立つて引退したのである。其の後、彼は時々満足さうに人に語つた。「私は自分の爲すべき文書の仕事はみんなして仕舞つたのだ。而して公衆から引つこめなどと言はれぬ先に、僕は自分勝手に自由に引退した。なる程書けば書けない事も無からうが、併しどんな作者にももうそんなに善い作は出来さうもないと言ふやうな感じのする時節が來るもんだ。それは絶筆の豫告のやうなものさ。」

果然彼は生涯スクリーブのやうなみじめな目に逢はずに、當時博した世人の尊敬をいつ迄も維持して、悠々自適の裏に餘生を過したのである。(昭和九年八月號『書物』)

宣傳は支那人の天才

支那人の宣傳上手なことは世界周知のことであつて、事實その巧みなことは中々日本人などの遠く及ばない程手に入つたものである。これは全く天才といふより他に言ひやうがないであらう。世界大戦の間、英佛聯合側でも又獨逸側でも、盛んにあることないことを世界に宣傳したものであるが、これを支那人に比べて見れば、まだまだその足もとにも及ばぬ位である。支那人は、そこに到ると、奇想天外といはうか、オリヂナリテイといはうか、人間業とは思はれぬ程の手腕を宣傳法に就いて持つてゐるのである。

しかし考へて見ると成程それもその筈である。支那の宣傳といふことは、歴史の上から見ても世界萬國に冠絶した傳統を持つてゐて、既に夏殷周の三代頃から始まつてゐるのである。そして春秋戰國には益々盛んになつて、猛烈な法螺の吹合ひをやり、蘇秦張儀を説客などと呼んで宣傳上手なものが勝つたのである。昨日迄は一介の書生で、困窮して、家に歸つて來てもその妻さへ機から下りず、嫂は飯を炊いて呉れなかつた程の蘇秦でも、法螺を吹き當てれば、從

約の長となつて六國に併せ相たりとあるから、六ヶ國の首相となつたのだ。そしてその出入りの時や、旅行の車騎輜重は王者に擬せられる程尊敬せられるのであるから、みんなが精力のあらん限りを盡して法螺吹きの方法を研究し、そして盛んに宣傳をやつたので、宣傳はある方面から見れば立派な一つの藝術と迄なつたのである。此の藝術の域にまで達したとも見られる支那の宣傳なるものは、二千年否三千年の長い年月を経て習練せられ、鍛錬に鍛錬を重ねて今日に到つたのであるから、私達から見ると天才と思はれるのも決して無理はないのである。こんな風だから彼等には宣傳の才能が遠くその祖先から遺傳してゐる譯で、彼等が呱呱の聲を上げて、此の世へ生れて來る時、既に此の宣傳を脊中へ背負つて出て來るのである。だから支那が國內の騒動は革命後殆んど絶間ないにも拘らず、外國に對しては、却つてメキメキ擡頭して來出したのも、全くこの傳來の宣傳上手のお蔭である。例へば先年のワシントン會議でも、ヂェネーブの國際聯盟でも、支那の使臣は頻りに排日の宣傳をやり、日本の横暴を廣告したりして、外國人の氣に入るやうなことを饒舌り散らして、盛んに自國の利益になるやうなことを宣傳し、その所期の成功を収めたのである。事實と宣傳上の言葉の違ふ事などは少しも關はずに恬然と述べたので、その度胸のよい事は到底日本人などの及ぶところではない。近くは閩錫山、馮玉璋、蔣介石などの電報戰爭を見てもその一斑が窺はれる通り、互ひに自分の方の有力なことや、正當なことを宣傳し合つてゐるのも、これ皆持つて生れた宣傳藝術の發揮である。

我々日本人は、戦争と云へば直ぐに砲煙彈雨の光景を思ひ浮べるのであるが、支那人はそんな殺風景なことは後廻しにして、先づ宣傳で勝たうと苦心するのが戦争の定石で、従つて宣傳上手な方が勝つものとしてあり、事實又宣傳上手なものが勝つのである。

斯く支那人の宣傳上手は先天的であつて、誠に手に入つたものであるが、それを昨年八月滿洲旅行の際、私は如實に見せられたので、一層その感を深くした。

ちやうど其時、かの東支鐵道回收問題が支那と露西亞の間に紛糾して感情の衝突その頂天に達し、兩國はその國境滿洲里附近に於て砲火相ひ見えんとしてゐる矢先であつた。

當時支那の漢字新聞や滿洲で發行せられる邦字新聞に載つてゐる滿洲里及び露支國境からの電報を見るに、どれ一つとして支那に有利で、露西亞に不利でないものはなかつた。例へば、「東支鐵道に就いての談判は、支那は飽迄平和手段をとらうとするのだから、如何なることがあつても暴力に訴へるやうなことはしない。然るに露西亞は既に數千の兵隊を國境に送つて居る。しかのみならず尙盛んにモスコウから此の方面に向けて輸送を續けて居ると言ふ報告に接した。これに依ると露國の野心がハッキリ窺はれる、唯東支鐵道のことばかりなら、我々支那側では既に五回も六回も穏やかに解決しようといつてゐるのに、赤色露西亞は無理無體に我々を壓倒しようとする態度に出るのだ。これは我々支那人を威嚇する積りかも知れぬが、それはひどい量見違ひといはねばならぬ。我々が大人しく下手に出てゐれば、つけ上つていい氣にな

つてゐるが、向うがさういふ考へならば、こつちだつて露西亞などに負けて堪るものか。」とか、或ひは又露支國境からの電報として、「露西亞は滿洲里を距る一里の地で砲火を開き、支那の小さな町を襲撃した。我が軍は早速これを迎へ撃つて潰走せしめた。戦闘凡そ二時間半、露西亞の死傷數二百にして、我が軍は僅に五十餘人の負傷者を出したるに過ぎない。」そして又その翌日も、殆んどこれと同じやうな電報が出てゐるのだ。後でよく聞いて見た處、それは皆支那側の宣傳的電報で事實は勿論無根の事か又は針小棒大な虚報であつた。

私は初め是等の電報を読んだ時、多少の掛値はあるにしても相當根據のあることと思ひ込んでゐたばかりでなく、鄭家屯へ出かける前日頃は、毎日毎日同じやうな電報を読んで居たので、スツカリ支那の新聞紙の報道を本當だと信するやうになつた。支那の古諺に衆口金を鑠かし、積毀骨を銷すとある通り、虚報でも度重なれば、人をして本當だと思はせる力のあるもので、市に三虎を走らせ、曹參人を殺すを信ぜしむるやうな次第で、三度重なると、いくら嘘だと思つてゐても、遂には本當にするやうになるのが人間の通性だ。支那人はこの心理作用をちやんと心得て居るから、その捏造が誠に以て巧みである。私達は二週間以來、毎日のやうにその非は露西亞にあるといふ記事を読んでゐたから、鄭家屯に著く頃には誰も皆、無理ないひがかりをするのは露西亞だ、威嚇するのは露西亞だ、と本氣にさう思ふやうになつてしまつた。そして露軍が滿洲里に入つたといふ電報を読んだ。そこで私達は愈々戦争が始まつたと思つた。そ

して鄭家屯へは八月二十八日に著いて見ると、そこで征露軍の大輸送が始まつてゐたのであつた。その兵數凡そ四千人と言はれて、中々大袈裟なものではあつた。そこで、私は初めて支那兵を見て驚かされたのである。第一その兵隊の軍服の色は全く褪せて、鼠色になつてゐるのか、カーキー色なのか、黒なのかさへサツパリ分らない混沌たる色だつた。そして更に又、上衣の色と、ズボンの色が違つてゐたり、靴などになると銘々勝手な形をしてゐて、見るからに汚い色の支那靴なのだ。更に特筆に値するのは、兵隊の年齢老若の甚だしく相違して居ることである。一番若いのは十五六歳で、老けたのになると四十歳から五十歳、しかもそれがごちやごちやに混つてゐるのである。

この兵隊の輸送が終つた後でなければ客車は出發させられぬと言ふので、私達は鄭家屯に數時足止めされた次第である。そこでちやうどこの足止めされた好機會を利用して支那の軍隊をよく視察して見るのもこれ亦一興と思つたので、私は注意深く見守つてゐると、突然十六七歳の兵隊が私の前にやつて来て、流暢な日本語で私に話しかけたのである。で、その少年兵隊の話聞いて見ると、五六年前に、父に連れられて神戸に行き、そこで暫らく働いてゐたが、その後廣島の或る家に一年半も厄介になつてゐたので、日本語をスツカリ覚え込んだといふのである。しかし神戸にゐた父が、都合に依り山東に歸ることになつたので再び連れられて支那へ歸つたが、支那では兵亂連年、加ふるに苛斂誅求がひどいので生計が立たぬ。依つて三年前

父母と共に山東を出て今では吉林の奥にゐて、父は百姓をして居るのであるが、自分は體力がないから百姓をすることも出來ず、それだからといつて苦力にもなれぬので、それならいつそのこと兵隊にでもなれといふので、今度募集された征露軍に加はつてやつて來たことは來たものの、給金も一ヶ月二圓か三圓で、それさへ渡らぬことが屢々あるのだから、兵隊を止めて日本に行きたいが、旦那どうぞ私を連れて行つて下さいと頼み込まれたのである。そこで私が、「だつて兵隊になつて、そんなに簡単に自分勝手に止めることなんか出來やしないぢやないか？」といふと、その少年兵隊は、「否、止めようと思へば今直ぐにでも止められます。」と答へたので、私も聊か呆氣にとられた譯であつた。よく見るとその少年の着てゐる軍服の肩拵がのびて居て、その袖は少年の手より二三寸長いのである。そして胴衣はダブダブで、帽子もほんの形ばかりのもの、何から何までみんな借物なのである。だから氣の毒といふよりも、これを見てゐると寧ろ滑稽の感が生じて來るのだ。さつとこれが征露軍として洮南チチハルを経て滿洲里方面へ送られる兵隊の服装なのである。それもその筈である。露支關係が緊張して戦争が始まりさうになつたので、急に一夜造りで捏つち上げた兵隊なのである。

鄭家屯から奉天への歸りに兵隊募集の廣告が出してあつた。「招募義勇」と云ふ看板を掲げて、そこで征露軍の兵隊を急募するのである。こんな兵隊だから訓練も紀律もあつたものではない。して又軍隊の輸送方法の亂暴なものにも私は大いに驚かされた。牛馬と同様に、無蓋車に

兵隊を積み込むのである。軍馬も駱駝も兵隊も皆同じ無蓋車で輸送されて行くのである。そしてその兵隊が、みんな丸腰で、劍も帯びておなれば、鐵砲も持つておないのだ。

餘りのことに、私はそこに居た鄭家屯居留の日本人に訊いて見た。「みんな丸腰ぢやないか？」するとその日本人が「ええ、みんなさうなんですよ。四五日前にも四五千人輸送しましたが、みんな丸腰でしたよ。」「どうして劍を持たせないのかしら？」と私が訊くと、「いや、若しそんなものを持たせると、奴さん達は、直ぐそれを賣つてしまふ恐れがあるからです。又そればかりでなく、何しろ無規律なものですから、夜にでもなると、民家へ入つて何をしでかすか分つたもんぢやありません。丸腰でさへ随分只食ひ、飲み倒しなんか到る處でやるんですから、この上武器なんか持たせたら、全く危険至極なものになります。だから戰場へ到着した後にいよいよ戦闘といふ時になつて、初めて武器を渡すんです。面白いことには彼等の持つてゐる鐵砲には此銃禁賣と銃身に彫りつけてあるのがあつた位です。」といつて詳しく説明をしてくれた。

かういふ一時の雇兵であるから、彼等は果して露西亞とはどんな國であるかといふことさへ知らぬのである。相手の國も知らず、又何の爲に戦ふのかも知らないのだ。

しかし亦無理のない話で、兵隊はみんな文盲の連中ばかりであつて、字の讀めるものなどは先づ百人に一人か二人の割合だといふ話である。私等が兵隊の容貌態度から見ても、さうかと

肯かれる程、如何にも愚鈍な阿呆らしい、そして懶惰な、兇惡な、相貌なのが少くないので、よくも揃つて人相の悪い奴ばかりを集めたものだと思はれる位である。そして、かういふ連中が戦線へ出かけて、兎も角露西亞と戦つて勝たうといふのだから、その度胸のいい事にはただただ呆れるばかりである。

鄭家屯に三四時間止められてゐる間に、私はそこに貼附けてあつた宣傳ビラを見て廻つた。そして私は、この宣傳ビラを見た時、その兵隊の實状とは似もつかぬ程であるのに奥驚した。私はその幾つかを寫し取つて來たから、その中で面白いもの丈をここに抜き書きして見よう。

支那は流石に文字の國である。その文句の巧みなことと煽動的なことは、實に無類飛切である。第一番に目についたのが、

打倒赤俄、帝國主義、收回中東、萬歲！

これなどは如何にも元氣がいい。赤俄といふのは勿論赤色露西亞のことで、中東とあるのは、東支鐵道のことである。これを回收せよ、萬歲といふので、讀んだ丈けでも景氣がよくて強さうだ。その次が、

打倒違反協定、無信義的赤俄、

これはいふまでもなく「協定に違反し、信義有ることなき赤色露西亞を打ち倒せ」といふの

であつて、これを読むと如何にも自分の方には信義があるやうに聞える。

勇士赴^レ敵、其樂如^レ歸、英雄報^レ國、百折不^レ回^{カヘラズ}

これなど文は名句である。文學としても立派なものである。人をおだてるにはこれ以上の名句はあるまい。

此次征俄^シ我們中國最有^ニ價値^一的征戰。

價値ある的などといふ新造語を使つて、せいぜいモダンなところを見せたといふのであらう。

護國軍人抖擻^{トツク}精神、滅^シ此仇俄、以^テ雪^ニ國^ノ耻^一

抖擻といふのは私達には珍しい言葉であるが、振ひ上げるといふ意味であつて、日本の近代語に言ひ換へて見れば發揮せよと言ふ意味であるさうであるが、非常に威勢よく聞えるのである。

要^ス想^ニラ^フ國際平等^一、必^ズ得^テ打^リ倒^ス蘇俄^上

支那のこの兵隊共に、國際平等などと云ふことが分るかどうか、そんなことは少しも頓著しないのが全く偉い。

兎に角外國人が見ると如何にも偉さうに見えるのだ。蘇俄なんて言つても、ソヴェット露西亞とはどんなものなのか、兵隊には分らないだらうが、そんなことは少しもお構ひなした。こ

こらが宣傳上手と言ふものなんだらう。そして最も激越を極め、最も大衆的なものになると、

斬^リ盡^シ殺^シ絶^シ我^ニ國土^一、奪^ニ我^ニ國權^一、殺^レ人、放^レ火、

慘無^ニ人道^一的、赤俄大鼻子

斬り盡してみな殺しにして仕舞へと煽動して居るのだ。そして最後の文句の露助のデコ鼻野

郎とは如何にも振つてゐるではないか。

國家的存亡在此一舉、勇敢の武装國土努力^{キョウカツ}！殺^ス！

皇國の興廢この一舉にありといふ、東郷元帥の有名な言葉を無斷借用に及んで澄ました顔でこの一舉にありなどといつてゐるところなど、さすがに宣傳の妙を心得てゐる。そして努力せよ、殺！ などと呼びかける景氣のいい文句は、プロレタリア大衆文學もどきに戰闘的で、陣的で、この宣傳ピラ文けを見た時は、どんな人でも血沸き肉躍るを感じるに違ひない。しかもこれ等のピラが最も人目につき易い、赤い紙や、黄色な紙や、水色な紙や中には金箔附の紙に、支那人持前の雄勁な名筆で書いた堂々たるもので、どこのお座敷の掛物にしても耻づかしからぬ程の立派なものである。

そしてかういふ宣傳ピラが、電信柱や家の軒先はいふに及ばず、立看板にしたり、吊るしたり、兵糧や銃砲を運搬する列車にさへ、ペタペタ貼りつけてあるのだ。

扱て上述の如き烏合の衆の兵隊も、いよいよ出發となつて、喇叭の音勇ましく鳴り渡ると、

數旒の青天白日旗が、蒙古から吹いて来る八月の風に翻翻と翻つて、如何にも威勢のよい光景を現出する。若し、だから兵隊のさまを見ずに只だこの貼り紙ばかりを見たならば、今度の戦ひは十分支那側の勝だと思はせる程である。私はこの時、成程宣傳もここまで来れば、その妙、神に入つたもので、これは慥かに支那人獨特の天才だと感歎した。

やがて私達は午後二時二十五分の汽車で洮南に向つた。私達は鄭家屯を出發する前に、洮南の知人へ電報を發して、今日午後六時にそちらへ著くから馬車の用意と「出迎へ頼む」と言つてやつた。ところがその途中で不時に停車を命ぜられたところが二三ヶ所あつたので、洮南へ著いたのは、夜の八時過ぎであつた。著いて見たところが、荒涼たる野原の真中で、その驛から洮南の町へは、まだ一里もあるといふ、途法もないところに下車させられたのだ。後でよく聞いて見ると、鐵道敷設當時、この土地を持つてゐた督軍が、自分の所有地を停車場にすると地價が上るといふので、こんな原ッばへ停車場を設けたのだと言ふことである。何しろ二十八年のことであるから月はなし、街燈などといつても、一町毎に僅か一つ位しかないもので、あたりは眞暗やみでその心細いこと言はん方なしであつた。さてまたいよいよ驛に著いて見ると、先刻電報で頼んでおいた日本人會の人達も一人も来てゐない。それどころか、驛には一人の人夫も、一臺の馬車もないので私達は全く困り切つてしまつた。そこで改めて、人を頼んで迎へにやつて、やつと日本人の人達が来てくれて漸く助かつた譯だが、さて聞いて見ると、通常の

著車時刻に、ちやんと十五六人で迎へに出てゐたのであつたが、それが最終列車だつたので、もう今日は来ないものと思つてゐたといふのだつた。それにしても驛に人夫も馬車も何にもないのはどうした譯かと訊くと、驚いたことには近頃兵隊輸送が始まつて以來、馬車などで停車場へ出迎へたりすると、皆兵隊にただ乗をされて仕舞ふ。そればかりか無償で馬車を徵發されたり、掠奪されたりするので、夕方の五時過からは、誰も停車場などにやつて来るものがないといふことであつた。なるほど人夫も馬車屋も誰一人居ないのが、それで初めて分つた。これを見ても、支那の兵隊が、どんなに亂暴を働くものかといふことが推察されるぢやないか。

扱て停車場に入つて、更にまた驚かされた。前にもいつた通り、兵隊は無蓋車の中で立ち竦んでゐるので、夜になつても寝ることが出来ぬ。だからみんな停車場内へ入つて寝ようといふので、驛の中はまるで足踏みもならぬ程に、入り亂れて兵隊が寝てゐるのであつた。あちらの隅ではパンなどを嚙つて居る、こちらの方では眞桑瓜を食ひ散らしてゐるものもあつて、その亂雑さと無規律さは、到底私共の想像も及ばないところだ。聞いて見ると、支那の良民の目からは、土匪も兵隊も異名同物で、兵隊も土匪も所詮同じことであると考へられて居る。その上、ややもすれば警察官吏さへもが、良民から見れば同じく土匪の別働隊であるといひ得るといふ話だつた。或る地方の人の話に依ると、兵隊の害を與へることは、土匪以上だといつてゐた。何故なら、土匪は目星しい金品を掠奪し、或ひは列車を襲撃し、富有な乗客を拉致して行つて、

身の代金を強請すると云ふやうな、言はば一定の目的物の攻撃であるが、兵隊は、もつと性質が悪くて、恐ろしいといふのである。一體兵隊は、土匪征伐などといふけれども、僅かばかりの日給で雇はれてゐる。みんな命の惜しい連中ばかりであるから、成るべく土匪に出會さないやうに、ゆるゆると遊び半分に行軍してゐるので、到る所、屯營の先々で、城外といはず城内といはずただ飲み、ただ食ひをやり、甚だしいのになると婦女を強姦したり、他人の物品を平氣で掠奪する。そしていよいよ土匪との戦が始まると、天に向つて發砲し、狡猾な奴になると、彈丸と銃器をそのまま賣却して戰場で小遣錢を稼いで、各自の懐中を肥やさうとするものが、兵隊の大部分であるといふことだ。處がこんな兵隊を持つて行つて、滿州里で露國軍を一撃の下に倒さうといふのであるから、その大膽不敵さが思はれると同時に、彼等が如何に宣傳上手であるかといふことが、益々痛感される譯である。元來支那には、

好鐵不_レ打_レ釘。 好人不_レ當_レ兵。

といふ諺があつて、いい鐵は釘には使はず、いい人間は兵隊なんかにならないといふのである。私は今度の旅行で、初めてこの諺をなる程と首肯した。

一體私達日本人は、軍隊とさへいへば、規律の嚴格な、訓練の行き届いた日本の軍隊を直ぐに頭に浮べて、その考を以て直ぐに外國の軍隊を想像するから、いくら支那の軍隊が無規律であるといふ話は聞いてゐても、せめて兵士の品格や、規律の遵守と云ふ位のことには、いくら支

那兵でも持つてゐるだらうと思つてゐたのであるが、實際目の當り支那兵を見るに及んで、これ迄の想像が非常な誤りであつたことを覺つた次第である。

しかし支那の兵隊が、全部が全部、みんなこんなに無規律だとは私は信じては居ない。蔣介石や閻錫山や馮玉祥の率ゐて居る軍隊などは定めて精銳なもので、その規律なども嚴格なものであらうと信じては居るが、兎に角私の實見したやうな兵隊が支那にはまだ居るのであると言ふことをハッキリ言つて置きたいのである。

こんなヤクザな、無規律な、亂暴な、烏合の衆の兵隊を以て露國軍を一撃の下に倒さうと云ふ意氣、否、その駄法螺に一驚を喫したと同時に、あの宣傳ビラの文句の雄壯であるのと對照して支那人が如何に宣傳が上手であるかに驚嘆した次第である。

で、支那人は出師の際に於ける宣傳が上手であるばかりでなく、凡ての方面に於て、苟くも宣傳に掛けては世界第一、天下無双だと云ふことを感得した。商業上の廣告でも、外交上の宣傳でも將た又文學上の賣名手段などでも、宣傳に掛けては日本人などのとても及ぶ處でない。だから自己推薦、自己宣傳でも支那人のやり方はズバ抜けた手際であつて人に少しも嫌味を感じしめないのみならず、却つて敬服、感激せしむる程である。

支那人のホルモン

大分久しい以前から喧傳されて居る若返り法の研究は、近頃愈々その效能が著しくなつたものと見えて、昨今の新聞紙上には、帝大名譽教授、理學博士石川千代松先生著と銘打つて『性とホルモン』の大々的廣告が出て居る。そしてその下には「青春再び來る」とか「四十からの人生を充實せよ!」とか「一切の煩悶と憂鬱を一掃せよ!」などと元氣のよい文字が並べてあるので、服用せぬ先から、はや既に若返つたやうな心地がする。

處が支那には若返り法の藥は昔から随分澤山あつたもので、後藤朝太郎君などは相當この道に精通してゐるやうに聞いて居る。しかしその實效は新發明のホルモンと較べて、如何なるものであらうか?

支那には六十歳、七十歳以上の老人で、新たに娶つたり、又は妾を納れたりしたものを詠じた詩が随分少くないが、それ等の詩に就いて見るに、支那の媚藥は餘り效能がないらしい。今それ等の詩の中で含蓄があつて、面白いもの數首を次に掲げて見る。

左の一首は六十歳で再婚した者を嘲弄した詩である。夫婦とも老年で、少しも若返つて居な

る。

六十作^ナ新郎^ト 殘花入^ル洞房^ニ 聚^ム猶^ト秋^ノ燕子^ニ 健^ク亦^ト病^ヲ鴛鴦^ニ
戲^レ水^ニ全^ク無^ク力^ニ 啣^ム泥^ヲ不^レ上^ル梁^ニ 空^ク煩^ム神^ノ女^ノ意^ニ 爲^ル雨^ト傍^ト高^ク唐^ニ

末の二句は言ふ迄もなく宋玉の高唐の賦にある「楚の襄王一婦を夢む、曰く、妾は巫山の女、朝には行雲となり、暮には行雨となる、朝々暮々陽臺の下」とあるに基くものである。甚解すると面白味がなくなるから、この儘にして置くが、空しく煩はすの二字如何にも深刻。ここま

で言へば讀者はその意を悟られるであらう。

*

次は、老男、老女が齡耳順（七十歳）を逾えて初めて婚配を完うしたものを嘲弄した詩である。

華梯空^ク作^ル枯^ク楊^ノ兆^ニ 二老新^ニ婚^ス樂^有餘^ニ 未^レ及^ク破^瓜先^ニ落^ク齒^ニ
還^リ從^テ熟^路駕^ニ輕^車 萊衣今^ニ與^テ新^ニ婚^ス着^ニ 金屋聊^ク爲^ル壽^母居^ニ
鷓蚌相^ニ爭^フ持^テ不^レ久^ニ 暗中笑^ム慙^ク武^林漁

末の二句、百返讀めば義自ら通ず、甚解すれば發行禁止の恐れあり、只武林の漁とは昔、桃源へ訪ねて行つた壯い漁夫のことだと一寸附け加へて置く。

*
徐某年六十五にして初めて娶る。然るにその花嫁さんの年は十五であつた。そこで某君が左の新婚の賀詩を贈つた。

十五、新娘六五郎　蒼々、白髮對紅妝
一樹、梨花壓海棠
結句無限の風趣、よくも言ひたり。

*
某翁年已に八十、色食未だ衰へず。曾て一妾を娶り、晩景を娛しむ。妾は元、ある家の小間使の女であつて、年正に十八、綽約として人に宜しで、なかなかの別嬪であつた。成婚の夕、翁樂んで左の詩を賦したと言ふことだ。この翁の媚藥は聊か效能があつたらしい。その詩に曰く、

我年八十卿十八　卿是紅顏我白髮
與卿顛倒正同庚
祇隔中間一華甲

我が古川柳にこれと酷似した妙句がある。十六歳の新造と六十歳の元氣な親爺を詠じて、逆さまに讀めば新造おない歳。

*

支那には兎角斯道の元氣者が少くないと見えて、左の一詩の如きは一讀人をして微笑を禁じ得ざらしめる。

富人某一妻一妾を置く、頗る極めて和好なりで至極折合がよかつた。そこである好事家が一詩を作つて之を詠じた。その詩、

不暖不寒二月天　一妻一妾正堪眠
鴛鴦枕上三頭並
翡翠衾中六臂連　開口笑時還若品
側身睡處恰似川
方才了得東邊事　又被西邊打一拳
一讀微笑を發せずには居られぬではないか。(昭和九年十二月號『モダン日本』)

旅行について

モーラン張りと言はれる程の一種の觀察の仕方と文體とを造り創めたポール・モーランは、素敵に旅行好きなフランスの作家である。彼の著作の主なるものは『夜ひらく』『夜とさす』を初めとし、暹羅のことを書いた『活き佛』、アメリカ、アフリカ、アンチールの黒ン坊を書いた『マジ、ノワール』、その他『紐育』『ロンドン』『世界一周』等々は、著者が實際旅行して親しくその場處で得た印象や、觀察や又はその旅行中に聞き込んだ傳説や實話などを、著者一流の技巧を以て組み合せて作つたものである。だから彼の書いたものは、他の作家等が單に想像から作り出したものよりは、迫力が非常に強く、随つて讀者の興味を惹き、之を感激せしむることが一層痛切である。そしてこれは皆旅行の賜物であるのだ。」とさへ言つて居る。彼に取つては至極尤もな言葉である。その上彼は『旅行の快樂』なる小冊子を著して、その中に歐羅巴に於ける昔から近代に至

るまでの交通發達の徑路を略述して居るが、我々東洋人にとつても興味なきにしも非ずである。
*
古代にあつては東洋西洋いづれも、殆んど同じ程度に於て旅行はなかなか困難なものであつたらしい。第一旅舎が無かつたのだ。我國の旅と言ふ字の枕言葉が『草枕』であるのを見てもその一般が推察せられる。萬葉の歌に、

家にあれば筍に盛る飯を草まくら

旅にしあれば椎の葉に盛る

(筍とは枕のこと)

この歌の意味は、解釋するまでもなく、當時旅宿などと言ふものが存在しないのであるから、寝るには草を枕にして樹下石上、野宿せざるを得ないのである。家に居れば茶碗に盛つて食べる御飯を、椎の葉で代用せねばならぬとあつては、實際旅は憂いもの、つらいものであつたらう。

(この歌は有馬皇子の作で我齊明天皇の御代、西曆六五八年に當る。西洋年代記には、この年サラザン東羅馬と和すと出て居る。今を去ること實に一千二百七十七年前のことである)

この當時は、あらゆる交通機關がまだ發達して居なかつた爲に旅行の苦勞と危険とは、今日

の我々からは想像も及ばない程であつた。

今日の安全にして且つ愉快的旅行と比較して見ると一層それが目立つ。試みに當時の陸路と水路の旅行を述べて見よう。

陸路の旅には多くは馬を用いたのであるが、それも上流階級に限られてゐて、普通は徒歩で旅行した。更に微賤の者に至つては、履をも穿かず跣で歩いたのである。他人の夫が馬で行くのに自分の夫が徒歩で行くのを見ると、如何にも氣の毒であるから、母が形見に遺した此の鏡と領巾を賣つて馬を買つてくれと懇願した妻の歌が『萬葉集』に見えてゐる。又

信濃道は今の墾道刈株に足踏ましなむ履著け我が夫

に見るやうに、信濃街道は新しく拓かれたばかりの道であるから、木の切株などに足を踏み立てて怪我をしないやうに、履を穿いて行つてくれと歌つた例もある。

水路の旅は、船舶や航海術が甚だ幼稚であつたにも拘らず、河を溯り湖海を渡る事は上古に於てもかなり頻繁に行はれた。舟は今の和船の如き小型のもので、これに帆を張つて順風を利用しつつ進める事もあつたが、櫂や楫を舷に數本取り附けて、水を撥ねて漕ぎ進めるのが普通であつた。その舟行の有様は、『萬葉集』に、

と歌はれてゐるのによつて想像し得る。

旅宿の設備の無い時代であるから、陸路に行く旅人は、日が没すれば野山の蒼薄、或は濱邊の葦荻を押し伏せて、草を結んで枕とし、月や星の光を仰いで一夜を明かすのである。又數日逗留する際には、草を刈り葺いて假庵を結ぶのである。近江の勝野原に行く旅人が傾く夕日を眺めて詠んだ歌に、

何處にか吾は宿らむ高島の勝野の原にこの日暮れなば

又伊勢を旅してゐる夫の身の上を想像して、家なる妻の詠んだ作に、

神風の伊勢の濱荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き濱邊に

といふ歌がある。

海路に行く者は浪の穏かな時を伺つて、浦を傳ひ岬を廻つて舟を漕ぎ、日が暮れば湊に入つて梶を枕に船中で丸寝をするのである。又風浪の激しきを見ては、岸に上つて假庵を結んで

大船に 眞襪繁貫き 朝なぎに 水夫整へ 夕汐に 楫引き撓りて、率ひて 漕ぎ行く君は……

夜を明かし、海面の風ぐのを待つて再び漕ぎ出すのである。琵琶湖を舟行する旅人の詠んだ歌に、

吾が船は比良の湊に漕ぎ泊^はてむ沖へな放^さりさ夜更けにけり

と云ふのがある。

旅人は固より著のみ著の儘であるから、垢つき汚れ又は紐の断れた旅衣の着替も持合せてゐなかつた。又雨露に濡れそぼち、潮に袖や裾の濡れた旅衣を、火にあぶり乾かしてくれる人も無く、況して朝風に寒い思ひをしても、着襲ふべき衣を借してくれる人は無かつた。妻の形見に着て居る衣の垢づくのを見て詠んだ歌に、

我が旅は久しくあらし此の吾が著る妹が衣の垢づく見れば

といふのがある。又寒い朝風に吹かれて、衣の薄きを敷いて詠んだ作に、

宇治間山朝風寒し旅にして衣借すべき妹もあらなくに

といふのがある。斯かる旅の不自由を思ひ遣つて、妻が夫の出立に當つて歌つた作に、

草枕旅の丸寝の紐絶えば我が手と付けよ此の針持し

がある。夫に絲と針を持たせて旅立たせるといふ所に、女らしい心遣りが現れてゐる。上古の旅の不自由は凡そかくの如くであつた。これ等と比べて見ると今の旅行は全く極樂である。

そして旅の憂さつらは、勿論日本ばかりでない。當時の支那でも矢張同じことで、支那にあつては旅につきものの字が旅愁であり客愁であつたのを見てもわかる筈だ。支那の奥地では今でもまだ昔と餘り變らぬ處が澤山ある。兎に角、宋の戴復古の、

旅食思^ニ郷味^一 砧聲起^ニ客愁^一

などはその一例であらう。

*

ポール・モーランに従へば、初めて旅舎や宿驛を設けたり、旅行の爲の道路を作つたり、見張番を置いて他國との交通、特に埃及への交通の便宜を計つたのはヘブリウ人であると言ふことである。

その後羅馬人が政治的經濟的の理由によつて道路を築造した。今でもフランスやイギリスのある村々には「セザールの路」と呼ばれて居るものが残存して居る。羅馬人の造つたその「セザールの道」なるものは中央の集點から四方八面縦横に放射線を分派したものである。フラン

スの中心點をリヨンに置いてあつた。道傍には標柱を立てて里程を示した。當時既に皇帝の御旅館たる宏莊なホテルや、諸役人の宿泊する旅館の設備等は恰も今日のモロッコに於けるそれに酷似して居ると言つて居る。

羅馬帝國の滅亡の後、即ち北狄侵入後は、各國共に孤立政策を採つたので國際間の交通は一時杜絶した。それが再開したのはシャルルマーニュ大帝（七四二——八一四年）の時であつた。大帝は羅馬人のつけた道路を復興した。その後聖ルイ王の時に至り道路の修繕を命じ、地方の封建君主等をして道路の責任を取らしむることにした。

その後十字軍（一〇九六年……一二七〇年）が起つて、亞細亞征伐と言ふ大運動が始まつた。西曆一千年以後は巡禮者の數が増加して來た。彼等は武装し隊伍を組んで旅行したものである。當時大學が設立せられ、各地方から學生が盛んに巴里に入り込み、又は卒業生等が各地方へ赴任する等の爲め交通が頻繁となつた。されば道路には貴人の輿（昇床）や車やが頻りに來往し、同時に田舎の人達の荷車や、騎士や歩行者の來往が漸次増加して來た。この當時は馬や驢馬やで旅行するものが多かつた。そして婦人は、鞍尻乗り「アングループ」で旅行したものである。

十五世紀の初めに四つ輪の重たい馬車が現はれた。これは伊太利からフランスへ輸入せられたものである。さて十五世紀と言へば文藝復興時代であつて、この時海底測量が始まり、次で

ポルトガル人やスペイン人が初めて世界地圖の製作に取りかかり、次で羅針盤が發明せられて大發見の時代に這入つたのである。

文藝復興時代から世の中の體面が激變し來つた。これ迄は臆病であつて、近海の沿岸貿易ばかりして居た船が、大膽に遠洋航海を始めるやうになつたので、外國との商業が段々繁盛し、その航路は蜘蛛の網を張つた如くに縦横に延長した。隨つて政治的、經濟的利益は各方面に進展し同時に交通が頻繁になつて來た。ところが、フランス國王ルイ十二世とフランソワ一世は非常な旅行好きな王様であつたので、各地へ巡幸された。そしてこの時代から學者や藝術家が研究の爲各地に旅行し、そのお蔭で見聞知識が廣くなつて、遠國の事もだんだん判つて來た。學問が巡禮藝術と呼ばれたのは實にこの時代のことである。世界的に有名な隨筆家エッセイの著者モンテーニュもまた大旅行家であつた。（尤もその血統が猶太人種であるからだと言ふことを忘れてはならぬと著者モーランは一本刺して置く。人が悪い）このモンテーニュこそ社會現象を人種や氣候の差異に關係するものだと説明した元祖である。十六世紀を攪亂したこの新しい科學は、當然十八世紀を攪亂すべき筈のものだ。

十七世紀に至つて四輪の重たい馬車が非常な進歩を爲して四輪輕走車となり、二輪輕走車となり、巴里を滑走した。此の時に至つて初めて速力と言ふことが人間社會の意識に這入つて來たとモーランは述べてゐる。

*
その後科學が長足の進歩を示して、矢繼ぎ早に汽船汽車、自動車、飛行機飛行船などの發明となりスピード時代が實現し、

箱根山昔や背で越す筈で越す今は夢の間汽車で越す

と唄はしめる程便利にもなり速くもなつたと同時に旅館の設備も完成し、其の上、警察制度が確立普及した爲に、強盜、追剝ぎ、胡麻の蠅、雲助などの脅迫や強請が全く其の跡を絶ち、昔は憂いもの、つらいものであつた旅行が、今では全く反對に、何よりも愉快なものとなつたのである。これ全く進歩した時代の賜物、文明の惠澤と謂ふべきだ。さればボードレールは『旅へのインヴェイション』で、

ああ、かしこ、かの國行かば、ものはみな秩序と美、豪華オブリシツケ平靜、はた歡樂

と歌つて居る。(昭和九年七月號『旅』)

幸福の處方箋

不景氣、就職難、失業、生活難、これが目下到る處に溢るる聲である。されば政府當局在野政治家、其の他の有志家達も今やこれが救済に努力盡瘁中であるのだから、早晚これ等の嘆聲や愁訴も薄らぎ行きて、終には其の聲を絶つに至らんことは萬民の心から願ふところである。

併し、不景氣が直り、生活難が止まつたからとて、人間の不平は止むものでは無いから、その不平や不満を根絶しない限りは、矢張り愁訴や嘆聲は絶えない。そこで私はその愁訴や嘆聲を根絶する處方箋を考へて見たのですと言ふ前書きで、『ジュールナル』紙の一寄書家アレクサン氏は左の如く書いてゐる。一寸面白いから抄譯して見る。

この處方は誰でも行ひ得る極めて簡單至極なもので、一口に言へば「精神的衛生法」とでも言ふやうなものだ。

その幸福の處方箋の第一條は「過去カクゴの事コトに就ツいて餘ヒり長ナガく考カウへ込コむことコトを避ヒけること」と言ふのです。

人間は過去の事ばかりを考へ出して、その回想に耽ると、自然今迄は消えて無くなつて居た悲しい記念や、舊い怨恨などや、病氣の時の淋しかつた思ひ出などが、再びありありと目に見えるのみならず、心の内にさへその芽を再び出して来て、自然人生が暗くなる。こんなことでは、假令物質的生活難から逃れ出ても、永久心的生活難からは逃れ出ることが出来ない。人間をしてこの淋しい心境から脱出せしめんがために、美術なるものがこの世に生れ出たのだ。特に演劇や、小説や、音楽は、人間が悲しい獨語、即ち淋しい思ひ出に耽り、悲しい回廊を獨りでどうだう廻りして居るのを救ふがために發明されたものだ。特に過去の回想に耽けることの大害の最なるものは、今となつてはどうしても取り返へしの附かぬ過去の損失を悔んだり、以前ある人から受けた侮辱や讒謗を思ひ出したり、曾て人前で失言して大失敗をやつたことを後悔して見たりすることである。換言せば、今更どうにも救済の方法のない事を、いつ迄もいつ迄も、未練に心の内に反芻することである。英國の諺に「零した牛乳に泣くな」とあるは、正にこれを誠しめたものだと思はれます。支那の聖書、論語と言ふ本の中にも、伯夷叔齊は舊惡を念はず、怨これを以つて稀なりとありまして、東西符節を合するが如く、過去の怨みや、失敗や、悲惨事は忘却に附して回想せぬやうにするに限りません。精神も着物と同じやうに、時々洗濯が必要です。洗濯して綺麗にして置くことです。「忘却無ければ幸福なし」とは善くも言はれた言葉なるかな。

上に述べたやうに、過去の下らぬ思ひ出に耽ることを避けて、悔恨事や、悲愁事を一切忘却することの外に、「忘我」の方法として一つの妙法がある。それは働くことである、勉強することである。「閑散無爲は不幸の候補者」と言はれる通り、何事も爲ないで居る人程世の中に不幸なものはないのである。人間は何にも爲ない時に、最も強く退屈を感じるものである。不眠病者の苦痛は、一睡の内に萬慮を忘却し得ない處に存するのである。閑散無爲の人は、病人ならざる不眠病患者である、千考萬慮から一刻も逃れ出づることが出来ない苦しみである。「忘我」の樂境に至ることの出来ない苦痛である。論語にも、「博奕なるものあらずや、之を爲すは猶ほ已むに賢る」とある程で、何にも爲ないよりは博奕でもしてゐる方が猶ほ賢明であると言はれてゐる。チャイルド・ハロールドや、ドン・ジュヤンの名作で世界に知られて居る英國詩人バイロンは、生まれつき不幸な人で、常時でも不平満々であつたのだが、さてそれが、希臘の獨立戦争に聲援して、そこへ出掛けて大いに活動した。そしてバイロンは一生の中でこの時程幸福であつたことは曾つて無かつたと言つて居る。それが、しかも、萬事に不自由な陣中で、ロンドンに居た時のコンフォルテブルな生活とは雲泥の差であつて、とても比較にならない程の不自由な生活だつたにも拘らず、却つて彼は幸福であつた。なぜならば彼は戦争中、非常に忙はしく東奔西走寸暇もなき活動中に、全く我を忘れて居たからである。そして彼がそ

の活動中には決して不幸を感じなかつた理由は、即ち彼が忘我の境に入つてゐたからである。丁度子供等が無我夢中で玩具をもつて遊んで居る時と同じく、自分自身を忘れて居たからなのである。だから、その本業があつて、それに勉強する人は言ふ迄もないが、若しこれぞと言ふ職業の無い人には是非とも何か活動を要するやうな仕事を見出すことが必要だ。

若し大活動を要するやうな適當な仕事の見つからない場合には、小さな仕事でも好いから、必ずこれを見つげ出すやうにするが肝要だ。例へば庭園を作つたり、又は植木をいぢつたりしても好く、又は色々なものの蒐集を始めて見てもよい。又はある研究の題目を定めて之に没頭しても好く、又は詩なり歌なり俳句なりを習ふこと、その他、歌舞音曲何でも、自分の好きな物を學修研究することだ。

要するに、何でも好いから一心不亂にその事に没頭し、我を忘れることの工夫をするのが必要だ。若しそれ等を學修することが嫌ならば、芝居や映畫を觀に行くなり、又は小説を讀んで我を忘れるのも亦一策だ。「人はパンのみにて生きるものに非ず」と耶蘇は言つたが、昔の羅馬人は、人生に必要なものは「パンと曲馬」だと言つて居る。そして後の學者が之に註釋を加へて「これは誠に尤なことだ、如何となれば、パンが身體の榮養に必要なが如く、遊戯は人の精神の吸収に必要なからだ」と言つて居る。茲に「吸収」とあるは、言ふまでもなく「忘我」のことを言つたのである。

映畫が發達して、今ではどんな田舎でも映畫館のない處はない位だ。これは慥かに近代文明の特色だ。まして東京市内の如きは、五歩に一樓、十歩に一閣、そして入場料も比較的高くはないから、何もせず家にぐづぐずして居て下らない無益な過去の回想に耽けるよりも、止むを得ずんば映畫館で寸時でも「忘我」の域に入ることが猶賢明ではあるまいか。

* 第二の處方は活動すること。

英國の哲學者バートランド・ラッセルの本の中に、「僕(ラッセル)は友人の書いた本を讀んだり、又は彼等の會話を聞いたりした時には、いつも、さては此の世の中では幸福であると言ふことは不可能なことか知らんと言ふやうな陰慘な印象を受ける。處が僕は、僕の園丁と話しをするや否や、先きのいやな印象は直ぐに消えて無くなる。その理由は僕の園丁は曾て不幸でないからだ。なぜかと言へば、園丁は庭を荒すところの鬼退治に朝から晩まで忙しく鬼との争鬭に忙殺されていつも忘我の連續の中に生活して居るからである」と。

ラッセルは又、彼の知つて居る丈けの人間の中で、最も幸福な男は一人の井戸掘の労働者であると、その著書の中に言つて居る。屈強なこの男がある井戸を掘る途中で、大きな岩に出逢したので、どうしても之を取り除けねばならないのだ。そして彼はこの岩石は早晚必ず掘り出すことが出来るものと信じて毎日こつこつそれを鑿り續けて居る。これが則ち幸福であること

の一つの秘訣であり一つの型である。世の中の大藝術家などは、大概皆この型に属するのだ。併し、活動すればよいからと言つて、唯だ活動するだけでは不十分だ。自分が属する社會と一致して行動することが必要だ。何故なれば社會と、左支右吾し、前衛後突相扞格することは、人をして徒に疲勞せしむるのみならず、その成さんと欲する事を困難ならしめるからである。しかし私は決して自由に考へたり、自分の思ふやうに行動したりすることを放棄せよと言ふのではない。そこから處方の第三が生れて来る。曰く選擇すること。

生きて行くがためには、自分と同じ方向に走る社會、即ちその意見を同じくする社會に居る方が愉快であり、都合が好い。さすれば、その社會の人達も自分と歩調が合ふのだから、自分の行動に興味を有つ。例へば、自分を了解しないある隣人と喧嘩口論などして居ては、自分の幸福を破壊するのみならず、併せて他人の幸福をも破壊することになる。處が自分と意見を同じうするものを選択して交際すれば、丁度精神上の兄弟と同棲するやうなものだから、萬事が好都合で、愉快である。つまるところ、同主義同趣味の人を選択して交際することが必要だ。

第四の處方は取り越し苦勞をせぬこと。

兎角世の中には途方もない事を想像して、色々無益な心配をする人がある。例へば地震の事などを想像して、下らぬ取り越し苦勞のために、あたら明るい人生を一方ならず暗澹たらしめるのは愚の極だ。明日の仕度、將來の準備は勿論必要ではあるが、これも程度の問題である。

今から昭和五十年の事などが人間の力で分る筈のものではない。又よしや、それが分つた處で、何とも方法のないことであるから、私は言ふ「貴方の義務を盡しなさい。そしてその他の事は、一切萬事神々の思し召しに任して、人事を盡して天命を待つことです」

そして第五即ち最後の處方は、

自分がベストを盡してやつた事には、どんな批評を他人からあびせられても、少しも氣にかけず、極めて無頓著にこれを聞き流し、所謂雲烟過眼に附して、之に對して決して言ひ譯をしたり、辯明したりせぬことです。況んや又これを苦にして悲しんだり、怒つたりせぬことは勿論である。

以上五ヶ條の處方に従つて精神的衛生法を實行すれば、一生幸福たること、私が屹度お請け合ひ致します。

と誓いてあつた。讀者諸君、一番之を實行してごらん下さい。(昭和七年三月號『政界往來』)